

# 箱 崎 10

— 箱崎遺跡第18次・第19次調査報告 —

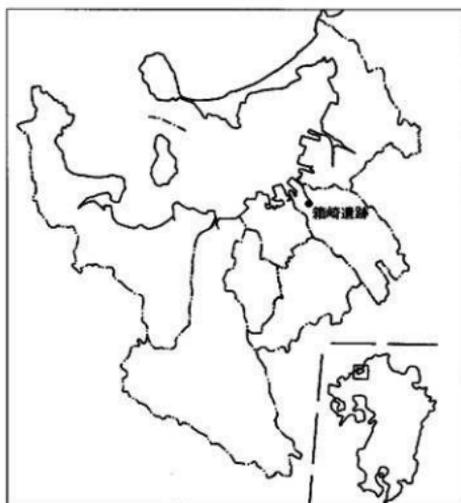
福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集

2001

福岡市教育委員会

HAKO      ZAKI  
箱      崎      10

—箱崎遺跡第18次・第19次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集



遺跡略号	調査番号
HKZ-18	9921
HKZ-19	9930

2001

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は共同住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第18次・第19次調査の成果を報告するものです。これらの調査では中世の集落跡を検出するとともに多数の輸入陶磁器が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りました株式会社 ユニカ、光吉 俊男氏をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、東区馬出5丁目、同箱崎1丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第18次・第19次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

調査回数	調査地	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
第18次	東区馬出5丁目470	9921	HKZ-18	920㎡	1999.6.14～9.28
第19次	東区箱崎1丁目2940-1	9930	HKZ-19	160㎡	1999.7.29～8.27

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は第18次調査を榎本義嗣、小川光彦（琉球大学大学院生）、花島拓・井本俊亮・山元真美子（別府大学学生）、第19次調査を長家伸が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は第18次調査を榎本、小川、上田龍児（福岡大学学生）、渡辺誠（九州大学学生）、第19次調査を長家、林田憲三、坂本真一、坂元雄紀、山根ひろみ、小田裕樹が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は第18次調査を榎本、第19次調査を長家が行った。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は第18次調査を榎本、星野恵美、上田、渡辺、第19次調査を長家、濱石正子、撫養久美子、坂本、小田が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40′西偏する。
9. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
10. 本書で記述する輸入磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。  
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」  
『九州歴史資料館研究論集4』1978年  
太宰府市教育委員会「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』1983年
11. 遺物番号は各調査次ごとの通し番号とした。なお、挿図中と図版中の遺物番号は一致する。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13. 本書の執筆はI-1.2)、IVを長家が行い、他を榎本が行った。なお付編として第19次調査出土の動物遺体については屋山洋が執筆した。
14. 本書の編集は長家の協力を得て、榎本が行った。

## 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯と調査体制	1
1) 第18次調査	1
2) 第19次調査	2
II. 遺跡の立地と環境	3
III. 第18次調査の記録	7
1. 調査の概要と順序	7
2. 遺構と遺物	9
1) 井戸 (SE)	9
2) 土坑 (SE)	33
3) 溝 (SD)	52
4) その他の遺物	57
3. 結論	60
IV. 第19次調査の記録	61
1. 調査の概要	61
2. 遺構と遺物	63
1) 掘立柱建物 (SB)	63
2) 井戸 (SE)	63
3) 土坑 (SK)	72
4) 溝 (SD)	85
5) その他の遺物	87
3. 結論	89
付編 箱崎遺跡第19次調査出土動物遺体について	90

## 挿 図 目 次

第1図 箱崎遺跡位置図 (1/25,000) .....	5
第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000) .....	6
第3図 第18次調査区位置図 (1/1,000) .....	7
第4図 第18次調査区北壁土層実測図 (1/50) .....	8
第5図 第18次調査区遺構配置図 (1/150) .....	(折り込み)
第6図 SE001実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3、1/4) .....	10
第7図 SE003・004実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	11
第8図 SE005実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3) .....	13
第9図 SE005出土遺物実測図 (1) (1/3、1/4) .....	14
第10図 SE006実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3) .....	15
第11図 SE006出土遺物実測図 (2) (1/3) .....	16
第12図 SE007・009実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3) .....	17
第13図 SE010実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4) .....	18
第14図 SE011・012実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3) .....	19
第15図 SE013実測図 (1/40) .....	20
第16図 SE013出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3) .....	21
第17図 SE015・017実測図 (1/40) およびSE015出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	22
第18図 SE016実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/1、1/3) .....	23
第19図 SE018実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	24
第20図 SE019実測図 (1/40) .....	25
第21図 SE019出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	26
第22図 SE020実測図 (1/40) .....	27
第23図 SE020出土遺物実測図 (1/3) .....	27
第24図 SE024実測図 (1/40) .....	28
第25図 SE024出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	28
第26図 SE026実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3) .....	29
第27図 SE041・044実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	30
第28図 SE270実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	31
第29図 SK002・008・014実測図 (1/40) .....	32
第30図 SK002・008・014出土遺物実測図 (1/3) .....	33
第31図 SK022・023実測図 (1/20) .....	34
第32図 SK022出土遺物実測図 (1/3) .....	34
第33図 SK023出土遺物実測図 (1/3) .....	35
第34図 SK027・028・031・032・033・034実測 (1/40) .....	37
第35図 SK027・028・031・032・033・034出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	38
第36図 SK035・036・037・039・042・043実測図 (1/20、1/40) .....	39
第37図 SK035・036・037・039・042・043出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	41
第38図 SK045・046・047実測図 (1/20) .....	42
第39図 SK051・053・054・055・056・057実測図 (1/40) .....	43

第40図	SK046・051・053・054・055・056・057出土遺物実測図 (1/3、1/4)	44
第41図	SK058・059・060・112・129・136・183実測図 (1/40)	46
第42図	SK058・059・060・112・129・136・183・187出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3、1/4)	48
第43図	SK187・243・348・359・365・415実測図 (1/40)	49
第44図	SK243・348・359・365・415出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	50
第45図	SD029・048・049・050・052実測図 (1/20、1/40)	51
第46図	SD025・029・038・385出土遺物実測図 (1/3)	52
第47図	SD048出土遺物実測図 (1) (1/2、1/3、1/4)	54
第48図	SD048出土遺物実測図 (2) (1/3、1/4)	55
第49図	SD049出土遺物実測図 (1/3、1/4)	56
第50図	SD050出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	57
第51図	ビット・遺構検出面出土遺物実測図 (1) (1/2、1/3、1/4)	58
第52図	ビット・遺構検出面出土遺物実測図 (2) (1/2、1/3、1/4)	59
第53図	調査区位置図 (1/500)	61
第54図	調査区全体図 (1/100)	62
第55図	SB18実測図及び出土遺物実測図 (1/80、1/3)	63
第56図	SE02・04実測図 (1/60)	64
第57図	SE02出土遺物実測図 (1/3、1/4)	65
第58図	SE04出土遺物実測図 (1/3)	66
第59図	SE10・13実測図 (1/60)	67
第60図	SE10出土遺物実測図 (1/3)	68
第61図	SE13出土遺物実測図 (1/3)	69
第62図	SE14～16・19実測図 (1/60)	69
第63図	SE14・15出土遺物実測図 (1/3、1/4)	70
第64図	SE16・19出土遺物実測図 (1/3)	71
第65図	SK01・03・06・07実測図 (1/40)	73
第66図	SK01出土遺物実測図 (1/3)	74
第67図	SK03出土遺物実測図及びSK06出土遺物実測図 (1) (1/3)	76
第68図	SK06出土遺物実測図 (2) (1/3)	77
第69図	SK07出土遺物実測図 (1) (1/3)	78
第70図	SK07出土遺物実測図 (2) (1/3)	79
第71図	SK08・09・12実測図 (1/40)	80
第72図	SK08・09出土遺物実測図 (1/3)	81
第73図	SK12出土遺物実測図 (1) (1/3)	82
第74図	SK12出土遺物実測図 (2) (1/3、1/4、1/6)	83
第75図	SK12出土遺物実測図 (3) (1/3)	84
第76図	SD11・17実測図及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	86
第77図	その他の出土遺物実測図 (1) (1/3)	87
第78図	その他の出土遺物実測図 (2) (1/3)	88
第79図	その他の出土遺物実測図 (3) (1/3)	89

## 表目次

第1表 箱崎遺跡調査一覧表..... 4

### 図版目次

- 図版1 第18次調査 (1) 調査区南側全景 (南から) (2) 調査区北側全景 (東から)
- 図版2 第18次調査 (1) SE001 (西から) (2) SE005 (北から)  
(3) SE006 (東から) (4) SE009 (北から)  
(5) SE010・012 (西から) (6) SE011 (北東から)
- 図版3 第18次調査 (1) SE013 (北から) (2) SE015 (北東から)  
(3) SE015井筒 (北東から) (4) SE016 (北から)  
(5) SE018 (東から) (6) SE018井筒 (東から)
- 図版4 第18次調査 (1) SE019 (東から) (2) SE024 (東から)  
(3) SE026 (南から) (4) SE041 (東から)  
(5) SE044 (東から) (6) SE270 (北から)
- 図版5 第18次調査 (1) SK002 (北から) (2) SK014 (北から)  
(3) SK022 (北から) (4) SK023 (北から)  
(5) SK027 (北から) (6) SK028 (北から)
- 図版6 第18次調査 (1) SK031 (西から) (2) SK032 (北西から)  
(3) SK033 (西から) (4) SK034 (西から)  
(5) SK036 (西から) (6) SK037 (北から)
- 図版7 第18次調査 (1) SK042 (西から) (2) SK043 (南から)  
(3) SK045 (北から) (4) SK046 (北西から)  
(5) SK051 (北から) (6) SK059 (北から)
- 図版8 第18次調査 (1) SD048・049・050 (東から) (2) SD048・049・050土層 (東から)  
(3) SD048・049土層 (東から) (4) SD052土層 (東から)  
(5) 調査区周辺風景 (北から) (6) 調査区周辺風景 (南から)
- 図版9 第18次調査 出土遺物Ⅰ
- 図版10 第18次調査 出土遺物Ⅱ
- 図版11 第19次調査 (1) 調査区全景 (南から) (2) SB18 (南から)  
(3) SE04土層
- 図版12 第19次調査 (1) SE10 (東から) (2) SE14~16、19 (西から)  
(3) SK01炭層上面 (西から) (4) SK01完掘 (西から)  
(5) SK09 (東から) (6) SK12 (南から)

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯と調査体制

### 1) 第18次調査

平成10(1998)年6月30日付けで、株式会社 ウキコより福岡市教育委員会宛てに東区馬出5丁目470(面積:2,933.45㎡)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号:10-2-151)。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡(分布地凶番号:箱崎34-2639、遺跡略号:HKZ)に含まれていることから平成10年7月30日に試掘調査を実施し、井戸・土坑・ピット等を確認した。その後、事業主体が株式会社 ユニカとなったため、この試掘調査成果をもとに両者で協議を行なった。その結果、申請地内の共同住宅建物部分1,447㎡については建築工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。その後、委託契約を締結し、平成11(1999)年6月より発掘調査(調査番号:9921)、翌平成12(2000)年度に資料整理・調査報告書作成を行なうこととした。

### <調査体制>

調査委託:株式会社 ユニカ

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治(現任)

調査庶務:文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

事前審査:同課事前審査係長 田中壽夫

同係主任文化財主事 杉山富雄(前任) 大庭康時(現任)

同係文化財主事 墨山洋(前任) 加藤隆也(現任)

調査担当:同課調査第2係文化財主事 榎本義嗣

調査補助:小川光彦(琉球大学大学院生)

調査作業:金子國雄 清田厚巳 榎本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 米倉國弘 石橋テル子

金子澄子 唐島栄子 草場恵子 小林スエ子 酒井康恵 杉村百合子 田崎アヤ子

辻美佐江 永松トミ子 吉村智子

井本俊亮 花島拓 山元真美子(以上別府大学学生)

整理作業:亀井律子 西島信枝 松尾真澄

小林由美 松本奈美(以上中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで株式会社 ユニカをはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## 2) 第19次調査

平成11年4月6日付けで光古俊男氏より福岡市教育委員会宛に東区箱崎1丁目2940-1の物件269.09㎡に関して共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号11-2-15)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群(分布地図番号34-2639・遺跡略号HKZ)に含まれており、周辺においても各種開発に伴い発掘調査が行なわれている地点である。申請地は以前異なる申請者から事前審査申請書が提出され(事前審査番号9-2-288)、平成9年10月16日に埋蔵文化財課により試掘調査を実施し、井戸・土坑等の遺構を確認していた。このため申請者に対して遺構が存在する旨を回答しその取扱について協議を行った。この結果建築物の基礎工事等で遺構の破壊が避けられないため、発掘調査を行ない記録保存を図ることで両者の協議が成立した。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成11年度に発掘調査、平成12年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成11年7月29日～平成11年8月27日の期間で行った(調査番号9930)。調査対象地は申請地中建物により遺跡の破壊が避けられない175㎡で、駐車場スペース等の残地については現状保存としている。発掘調査面積は160㎡である。また遺物はコンテナ20箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては地権者である光古俊男氏をはじめとして関係者の皆様方には発掘作業についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

### 〈調査体制〉

事業主体：光古俊男

調査主体：教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務：文化財整備課 谷口真由美

調査担当：調査第2係 長家伸

調査作業：曾根崎昭子 村崎裕子 森垣隆視 能丸勢津子 石川君子 鍋山治子 木村文子  
金子二三枝 幸田信乃 塚本よし子 山田政治

## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は今回報告する東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至る。この古砂丘の形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第1図に示した範囲で現在までのところ、北側から箱崎遺跡、古塚本町遺跡群、古塚初町遺跡、堅粕遺跡群、古塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。

本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて「箱崎ノ津」と呼ばれた入り江が博多湾から湾入しており、後述する箱崎宮の私港として利用されていた。第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。なお、データが不足するエリアについては現況の標高差を参考とした。これに拠ると砂丘尾根線の北端は第10次調査付近にあるものと推定される。遺跡北東端部で実施された同調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近から東側に振れて、ほぼ南北方向に延伸する。箱崎宮本殿の南側には標高約3.5mを測る緩いピークが認められ、更にこの尾根は第22次調査区付近の遺跡南東端に延びるものと推測される。よって砂丘尾根は従来推定されていた通称「大学通り」に沿うものではなく、遺跡南半部では東側に大きく振れ、広い西側緩斜面が形成されていたものと考えられる。また、南端部では東西方向から浅い谷が入り、鞍部をなすものと推定されるが、現在のところ該地の微地形は不明瞭である。なお、図中の破線は試掘調査における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成し、その東側では木性の堆積物が顕著に認められる。なお、第10次調査東端部ではその一部が検出されている。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列が確認されており、前述した港湾施設が存在する可能性が示唆される。遺跡南北端部はデータの不足により推測にとどまるが、先述した様に南側は鞍部を挟み、更に遺跡範囲が拡大する可能性が高い。該地におけるより詳細な旧地形の解明は今後の調査課題の一つといえよう。

この遺跡の発展の契機となった歴史的事象として箱崎宮の創建を挙げることができる。延喜21年(921)、大宰府観世音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元年(923)に穂波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。これは新羅来寇を防ぎ、対外貿易の拠点としての発展を祈念したものと考えられる。その後保延6年(1140)には善権宮とともに大宰府の府領となる。仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人が軍兵を率いて博多とともに宋人追捕をおこなった際に箱崎宮に乱入している。文永11年(1274)の元寇の際には箱崎宮は焼失し、以後も数度の火災に遭っている。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)には薩摩国によって元寇防塁が箱崎地区の海岸線に築かれる。また、韓国新安沖で発見された14世紀前半の沈没船からは「箱崎宮」銘の木簡が出土しており、該期の日本における大陸交易の基地の一つとして位置付けられる。

箱崎遺跡では現在までに24次の調査が実施され(第1表・第2図)、その時期的消長や遺跡内容が判明しつつある。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第6次調査出土の磨製石斧がある。その形態から縄文時代晩期から弥生時代初頭の所産と考えられるが、中世前半期の土坑から出土している。また、本報告の第18次調査においても同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片が確認されてい

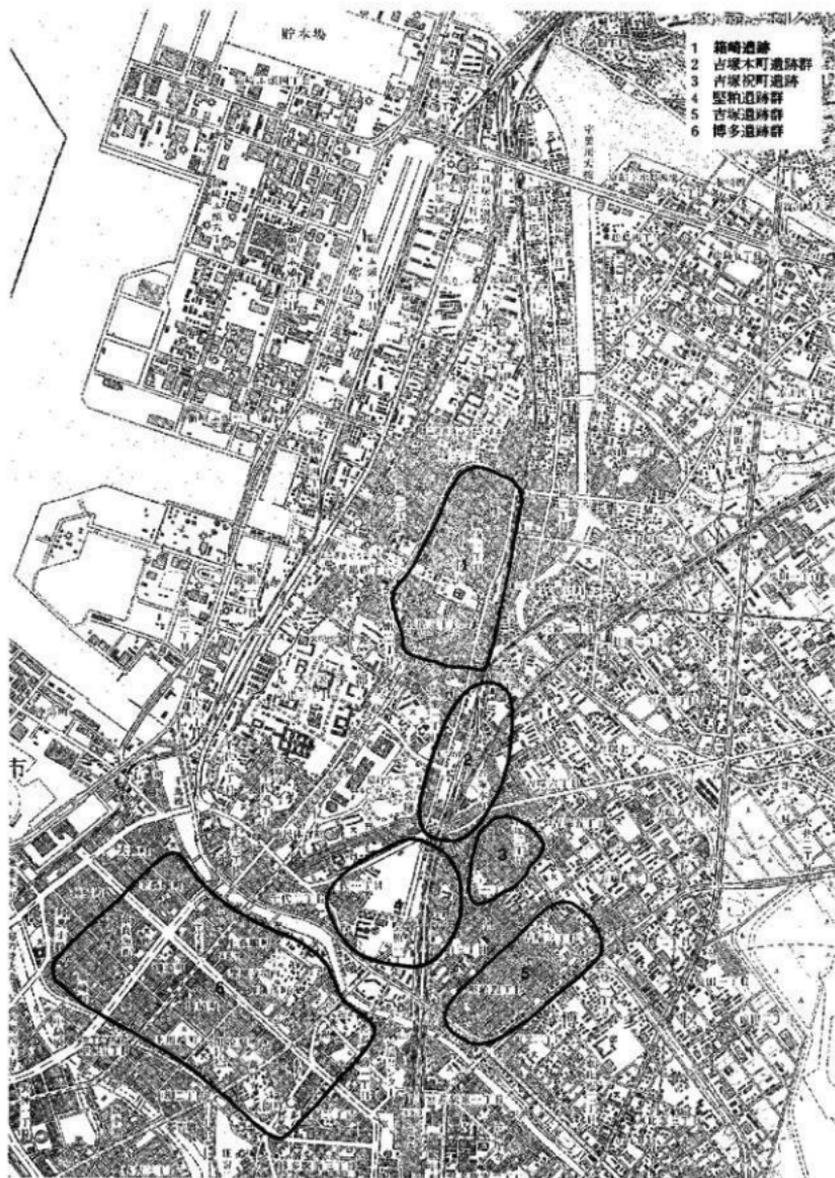
る。今後の調査において、稀少であろうが、該期の遺構が確認される可能性がある。古墳時代では第8次・20次・22次において竪穴住居をはじめとする遺構が検出されている。第8次調査では前期の良好な一括遺物が出土している。また、第10次・15次においては該期の遺物の確認例がある。これらは前期を主体とするが、後期の遺構・遺物も散見される。なお、いずれも推定砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択した集落経営が看取される。その後は奈良時代の遺物が第10次調査において近世井戸から出土した例を除き、数世紀の断絶が認められる。第2次調査の10世紀後半の溝は宮崎宮創建時期に近似するが、創建時の10世紀前半の遺構は同宮に近接する調査区においても現在のところ未確認である。11世紀後半になって遺跡内に該期の遺構が第2次・9次・12次・22次等において散見され、これらは尾根線およびやや東側に下った緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構の存在から中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは第3次・5次、本報告第18次調査例が示す様に西側緩斜面の利用が開始され始め、12世紀後半には広範囲に集落が展開する。13世紀以降は海側の西側斜面を積極的に生活の場として活用している。第11次・14次・21次・24次調査では重層的な調査が実施され、包含層上面で13世紀から14世紀、下面において12世紀後半の集落が検出されている。中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。第13次調査では短冊形の地割を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

<参考文献>

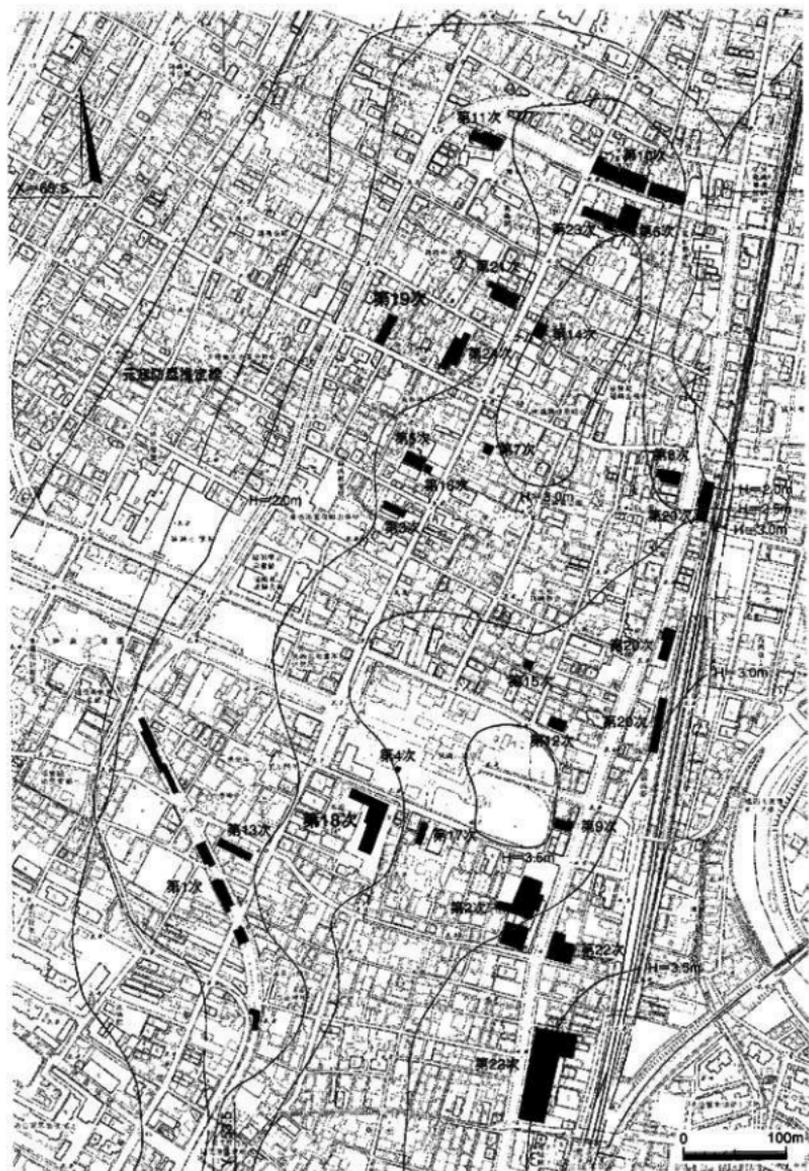
- ・小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1996年
- ・川添昭二編『よみがえる中世』東アジアの国際都市博多 平凡社 1998年

調査次数	所在地(全て東区)	調査年度	主な遺構の時期	備文
第1次	馬出5丁目地内	1983	12世紀後半～15世紀	市報第193集(1988)
第2次	箱崎1丁目18～32外	1986	10世紀後半～15世紀	興報第79集(1987)
第3次	箱崎1丁目2731-1・4	1989	12世紀中頃～15世紀	市報第262集(1991)
第4次	箱崎1丁目2761	1989	11世紀	市年報Vol.4(1991)
第5次	箱崎1丁目25・27	1991	12世紀～15世紀	市報第273集(1992)
第6次	箱崎3丁目8-31	1994	12世紀後半～13世紀	市報第459集(1996)
第7次	箱崎1丁目2711外	1994	12世紀前半～13世紀	市報第459集(1996)
第8次	箱崎1丁目2549-1外	1996	古墳時代前期、12世紀中頃～13世紀	市報第591集(1999)
第9次	箱崎1丁目1935-1	1996	11世紀～13世紀	市報第550集(1998)
第10次	箱崎3丁目7地内	1996	12世紀前半～13世紀	市報第551集(1998)
第11次	箱崎3丁目3266-1外	1997	12世紀後半～13世紀	市報第592集(1999)
第12次	箱崎1丁目2606-3-1	1997	11世紀～13世紀	整理中
第13次	馬出5丁目520・521	1997	15世紀	市報第592集(1999)
第14次	箱崎1丁目28-15	1998	12世紀後半～14世紀前半	市報第625集(2000)
第15次	箱崎1丁目2615	1998	11世紀後半～12世紀	整理中
第16次	箱崎1丁目2725	1998	11世紀～15世紀	整理中
第17次	箱崎1丁目20-19	1998	12世紀後半～17世紀	整理中
第18次	馬出5丁目470	1999	12世紀中頃～16世紀	本報告
第19次	箱崎1丁目2940-1	1999	12世紀後半～14世紀	本報告
第20次	箱崎1丁目4・5地内	1999	古墳時代前期・後期、11世紀後半～13世紀	整理中
第21次	箱崎1丁目2480	2000	12世紀後半～14世紀前半	整理中
第22次	馬出5丁目1地内外	2000	古墳時代前期、11世紀～15世紀	調査中
第23次	箱崎3丁目2404	2000	13世紀～17世紀	整理中
第24次	箱崎1丁目2511-1外	2000	12世紀後半～14世紀	整理中

第1表 箱崎調査一覧表



第1図 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)



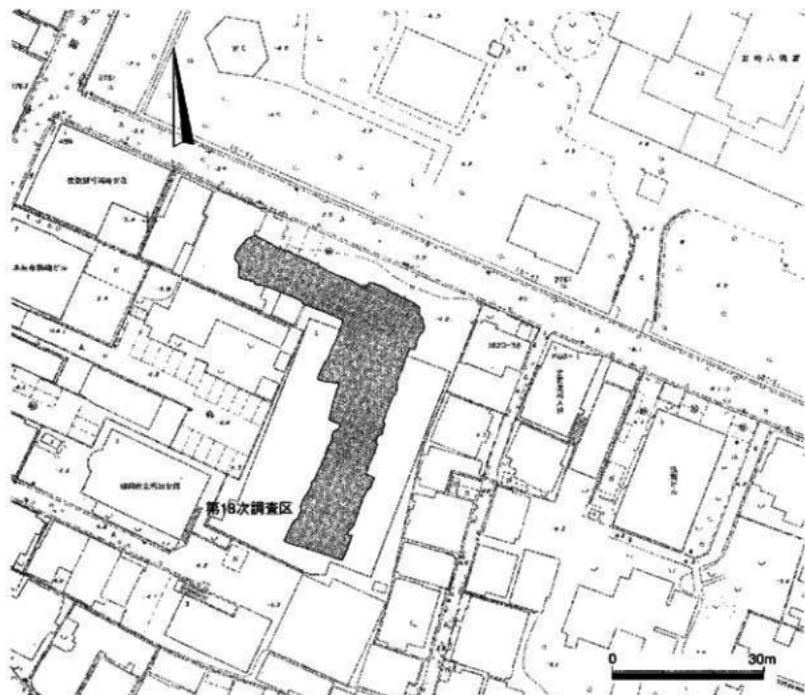
第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

### Ⅲ. 第18次調査の記録

#### 1. 調査の概要と層序

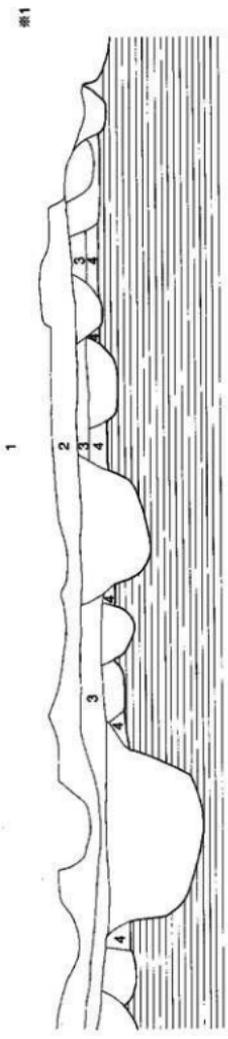
第18次調査区は東区馬出5丁目470番地に所在し、箱崎遺跡の立地する古砂丘上の南側に位置する。調査区北側には道路を隔てて宮崎宮が鎮座する。調査前はアスファルト舗装された駐車場として利用されていた。

第4図は調査区北壁の西側部分の土層を記録したもので、砂丘基盤の黄褐色砂層は東側から西側（海浜方向）に向かって緩く傾斜している。なお、砂層面は調査区の北東端で標高2.8m、北西端で2.3mを測る。また、調査区南端では標高2.8mを測ることから、南北方向での砂丘面はほぼ水平である。よって本調査区は砂丘南側の西側緩斜面上に立地すると考えられる。基本層序はその砂層上面に灰黄褐色砂質土（4層）、やや褐色がかった黒褐色砂質土（3層）、黒褐色砂質土（2層）、瓦礫を含む近現代の客土（1層）が堆積し、最上面にはアスファルト舗装がなされる。基盤砂層と4層との層界はやや不明瞭で、砂層の上位に4層のブロック混じりの汚れた砂層が見られる。土層観察では遺構の大半が砂層上層の4層から掘り込まれることが判明したが、今回の調査では黄褐色砂層上面での1面の調査を実施した。駐車場以前の旧建物跡による擾乱が認められたが、12世紀中頃か

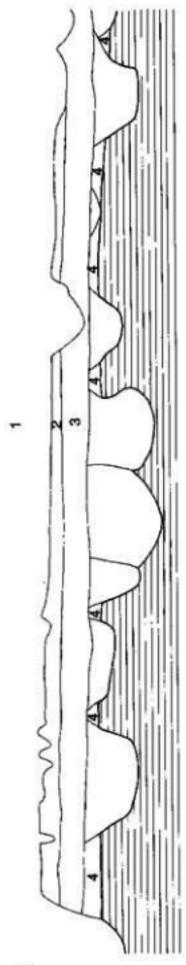


第3図 第18次調査区位置図 (1/1,000)

(X) \_\_\_\_\_ H=4.3m



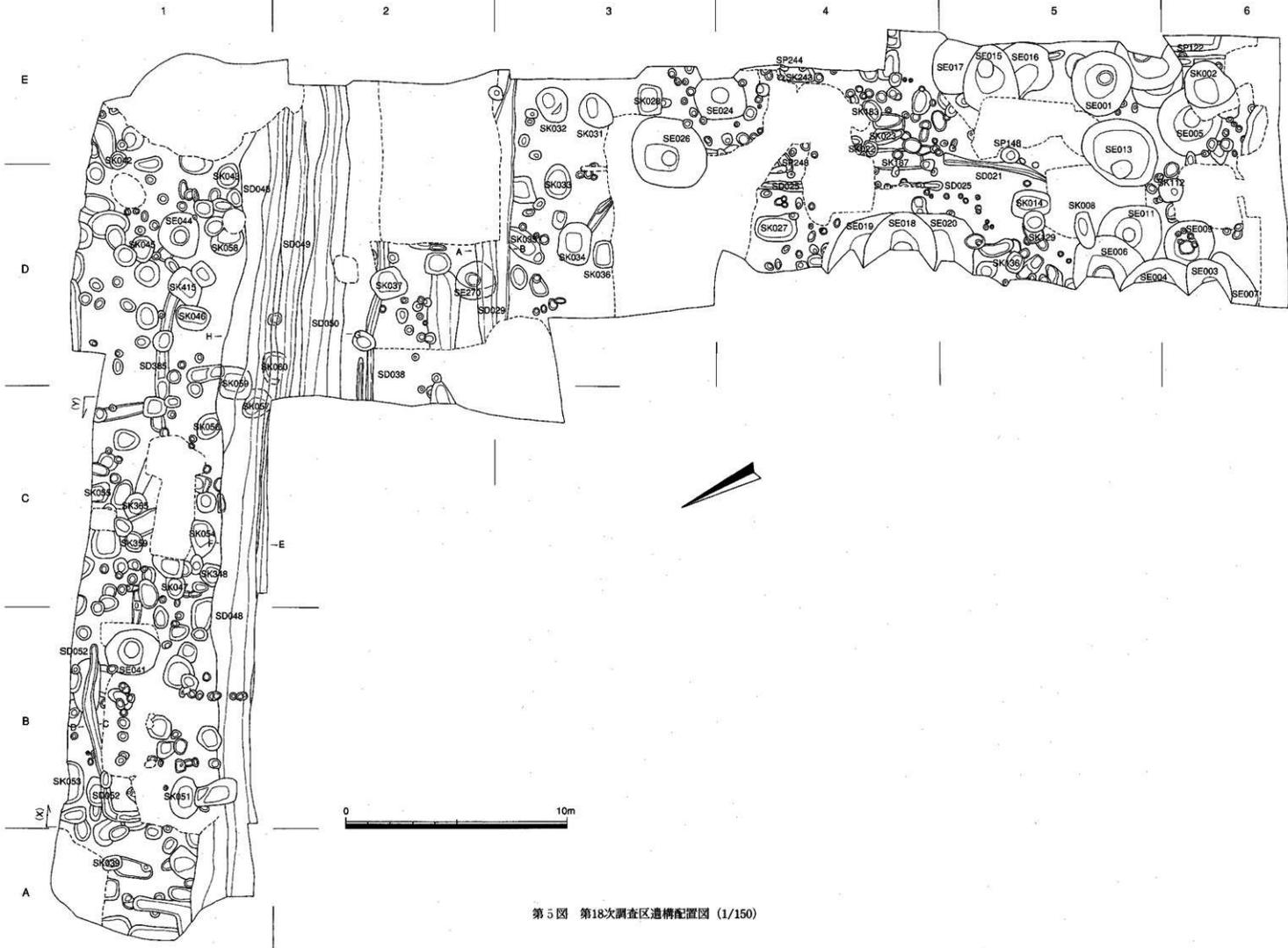
(Y) \_\_\_\_\_ H=4.3m



- 北壁土層  
 1 表土 (浮遊物付)  
 2 腐植質砂壤土 (粘土塊の層を含む)  
 3 褐色がかった腐植質砂壤土  
 4 灰褐色砂質土 (2層との境界は明確)

0 1m

第4図 第18次調査区北壁土層実測図 (1/50)



第3図 第18次調査区遺構配置図 (1/150)

ら13世紀を主体とし、16世紀に至る井戸、土坑、溝、ピット等を確認した。

発掘調査は平成11(1999)年6月14日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。廃上処理を申請地内で行わざるを得なかったため、「L」字形を早する調査区屈曲部のやや南側を境界として、まず、南半部の調査を行うこととした。重機作業と並行して発掘器材の搬入を行い、同月17日から人力による作業を開始した。なお、同月末に北部九州は記録的な豪雨に見舞われ、掘削した遺構の一部が流失したが、8月11日には南半部の調査を終えた。翌日から重機によって廃上反転および北側部分の表土剥ぎ取りを開始し、同月19日からは人力作業に着手した。そして、全作業終了後の9月28日に器材撤収を行い、調査を完了した。「I. はじめに-1.」で前述した様に、申請面積2,933.45㎡のうち建物部分の1,477㎡を調査対象としたが、周囲の安全対策や法面掘削のため、実際の調査実施面積は920㎡であった。

調査時の遺構番号は001からの3桁の通し番号を遺構の種別に関らず付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。また、以下の報告にあたって原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせで記述する。また、調査区内での遺構位置を本文中で示す際には調査時における任意の座標軸を基準とした10m単位での英字(西から東方向にA-E)と数字(北から南方向に1-5)とによるグリッド表記(第5図参照)を用いる。

## 2. 遺構と遺物

### 1) 井戸(SE)

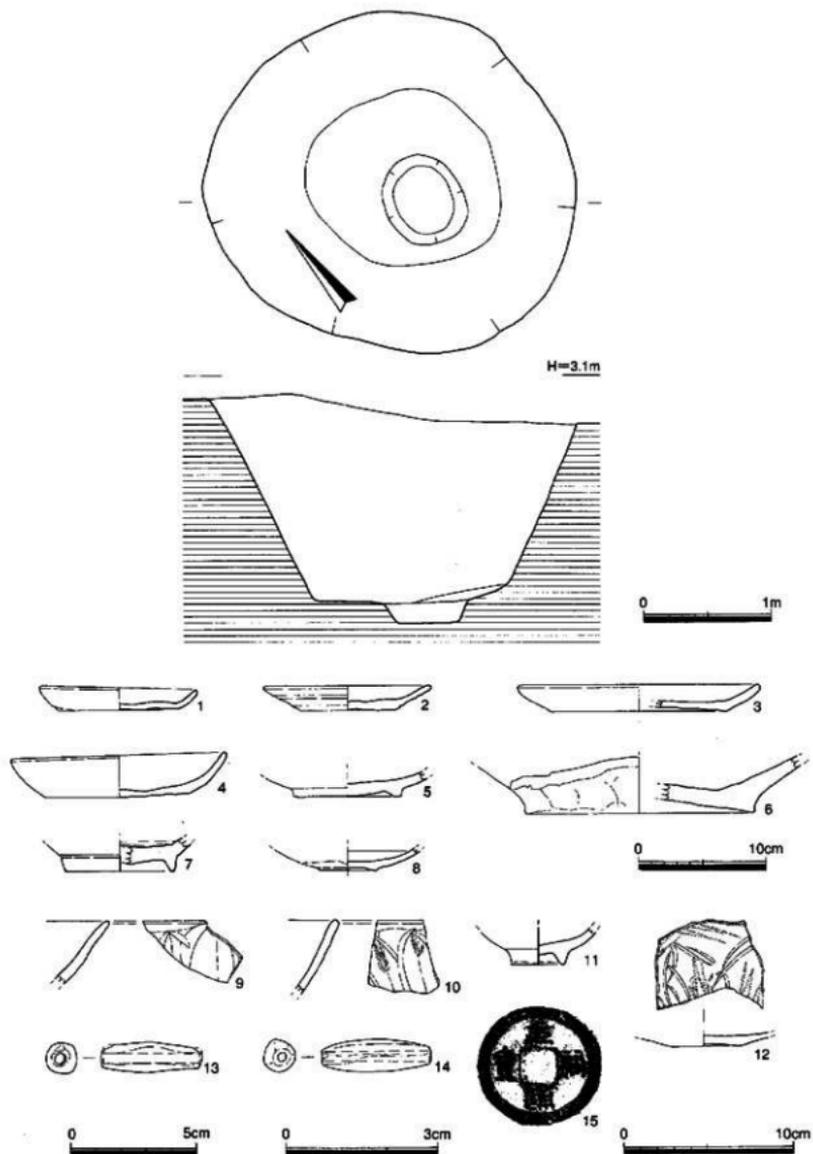
12世紀中頃から13世紀代の井戸を計21基検出した。12世紀中頃から後半が主体を占め、調査区南半部での重複が著しい。

SE001(第6図) E-5区に位置し、SE010を切る。掘り方は径2.6-2.9mを測る円形ブランを呈する。検出面からの深さ1.7mに平坦面を設け、やや南寄りに井筒を据える径0.7m、深さ0.2mの円形の掘り込みを有する。その中央には径約0.5mを測る木質の腐食した痕跡が認められた。底面の標高は1.1mを測り、そのやや上位で湧水する。

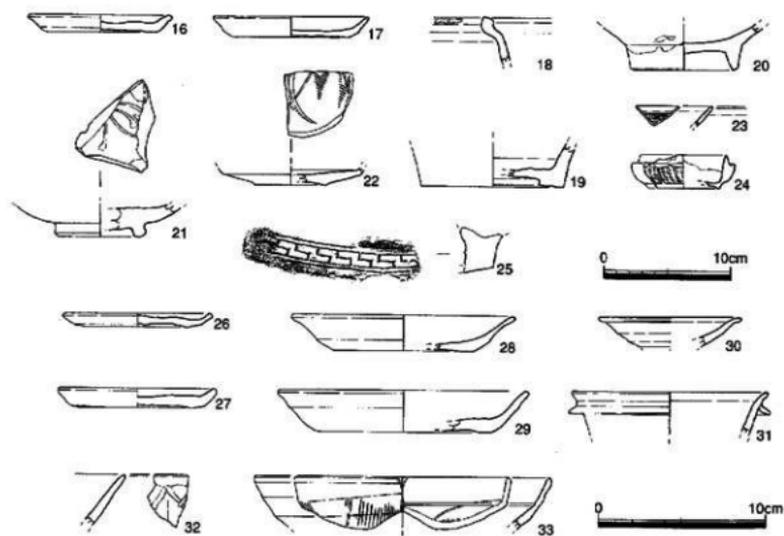
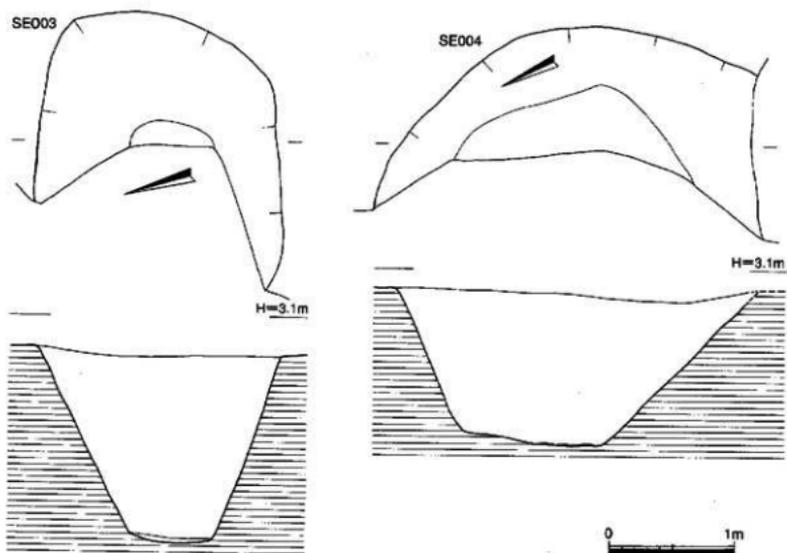
出土遺物(第6図) 1・2は土師器小皿である。復元口径は順に9.4、10.0cm、器高は共に1.5cmを測る。1は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。2は回転ヘラ切り底で、板状圧痕はない。3・4は回転糸切り底の土師器杯で、共に板状圧痕が認められる。順に復元口径は14.3、12.8cm、器高は1.6、2.7cmを測る。5は瓦器碗で、内底部にはヘラ研磨を施す。6は常滑焼の甕底部である。外面には板ナデ調整を行う。7・8は白磁である。7は碗類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。8は皿Ⅴ-1・b類で、体部内面の下半に段を有する。灰白色を呈する軸は体部下半には施されない。9-11は龍泉窯系青磁碗、9はI-5・b類、10はI-6・a類である。10は鎗蓮弁に構目文を加える。11は小碗Ⅲ-1類で、高台端部を除いてオリープ灰色の軸が施される。12は同安窯系青磁皿I-2類で、見込みに片彫りおよび簡状工具による施文を有する。外底部の軸はカキ取る。13・14は管状土錘で、順に重量は5.3、7.1gを測る。15は北宋代の銅銭、「元祐通寶」(初鑄年:1086年)である。他に中国陶器、瓦、鉄滓等が出土した。以上の出土遺物から13世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SE003(第7図) SE004・007・009を切る井戸で、D-6区で検出した。現況で径約2mを測る円形の掘り方を呈するが、西半部は調査区外に位置する。上面からの深さ1.5mに平坦面を作るが、調査区内で井筒は確認できなかった。覆土は暗褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が互層に混じる。

出土遺物(第7図16-25) 16・17は回転糸切り底の上師器小皿で、復元口径は順に8.4、9.2cmを測る。共に板状圧痕を有する。18・19は中国陶器壺である。18の口縁部内面には目跡が残る。20は



第6図 SE001実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (15は1/1、13・14は1/2、6は1/4、他は1/3)



第7図 SE003・004 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (25は1/4、他は1/3)

白磁碗Ⅴ類で、灰白色の釉が高台際まで施される。21は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、見込みに片彫りによる花文を描く。22は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類である。外底部の釉は削り取る。23・24は青白磁である。23は口禿の皿の細片で、型押しによる施文が内面に認められる。24は合子身である。外面には型押しによって隔刻文を施す。下半部は露胎で、にぶい淡赤褐色を呈する。また、受け部には蓋の一部が熔着する。25は軒平瓦で、雷文を配する。土師質の焼成である。他に土師器環、滑石製石鍋片等が出土した。これらの出土遺物から13世紀中頃から後半に属する井戸と推定される。

SE004 (第7図) D-5・6区に位置する。SE003に南側を切られ、SE006・009・011を切る。SE003同様に西半部は調査区外に位置するため、遺構全容は不明であるが、径3m以上の円形の掘り方を呈するものと推測される。上面からの深さ1.2mで平坦面を確認したが、井筒は検出できなかった。覆土はSE003と類似するが、暗黄褐色砂質土が主体となる。

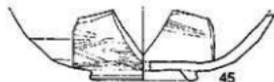
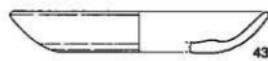
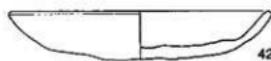
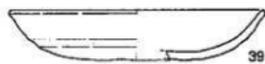
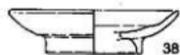
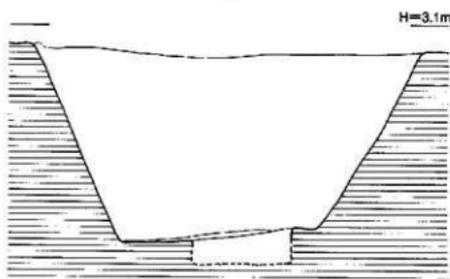
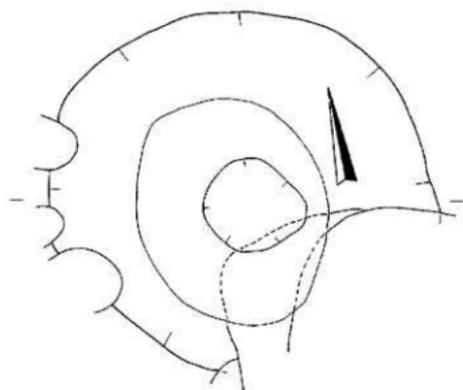
出土遺物 (第7図26-33) 26-29は回転糸切り底の土師器である。26・27は小皿で、27は板状圧痕を有する。復元口径は順に8.8、9.4cmを測る。28・29は坏で、共に板状圧痕はない。復元口径は順に13.2、14.8cmである。30・31は白磁である。30は皿Ⅲ-1類で、見込みの釉はカキ取る。体部下半は露胎である。31は水注の口縁部で、内外面に貫入が多い。32は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類、33は同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類である。32の釉調は明緑灰色、33は灰オリブ色である。他に中国陶器、青白磁、瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀前半の井戸と考えられる。

SE005 (第8図) D-6区で確認した井戸で、SK002に南東側を切られ、SE012を切る。径約3mを測る円形プランの掘り方を呈する。検出面からの深さ1.5mに平坦面を設け、ほぼ中央に井筒を据える径0.7~0.8m、深さ0.3mの不整円形の掘り込みを有する。その中央部には径0.5mを測る木質の腐食した痕跡が認められた。底面の標高は1.2mを測ると推定され、そのやや上位で湧水する。

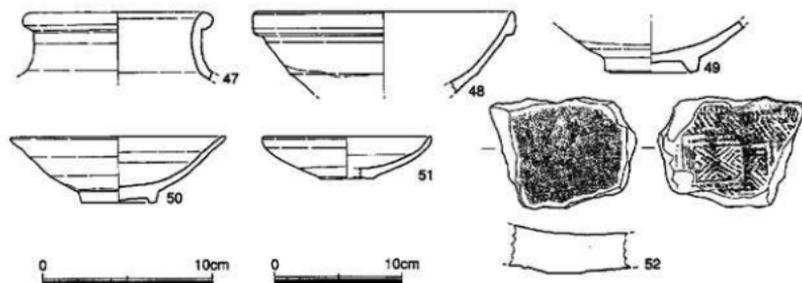
出土遺物 (第8・9図) 34-44は土師器で、この内34-38は小皿である。34-36は回転糸切り底で、34を除き板状圧痕が認められる。復元口径は9.2-9.7cmを測る。37の外底部には回転ヘラ切り痕が残り、板状圧痕を有する。復元口径は10.0cmである。38は高台を付す小皿eで、復元口径は10.0cmを測る。39-44は坏で、この内39-42は丸底坏である。いずれも回転ヘラ切り底で、39を除いて板状圧痕がある。復元口径15.2-15.8cmを測る。43・44は回転糸切り底の坏で、共に板状圧痕を有する。43の復元口径は15.4cmである。45・46は瓦器碗である。体部内外面にはヘラ研磨を施し、外底部にはヨコナデにより高台を貼付する。47は中国陶器壺である。口縁部の釉は拭き取るが、外面の頸部下半以下には暗オリブ色の施釉が認められる。胎土は粗い灰白色を呈する。48-51は白磁である。48・49は碗Ⅳ類で、外面体部下半は露胎である。50は碗Ⅵ-1・a類で、体部は直線的に大きく開く。内面には沈線が1条巡る。高台際まで施釉される。51は皿Ⅵ-1・a類で、体部の上位で緩く屈曲する。その内面には段状の沈線を有する。淡黄色の釉を施すが、体部下半以下は露胎である。52は平瓦で、凹面には布目が残し、凸面には榾目および斜行目の甲きを施す。厚さ3.1cmを測る。以上の出土遺物から12世紀中頃の井戸に比定される。

SE006 (第10図) D-5区の調査区際で検出した井戸で、SE004、SK008に切られ、SE011を切る。西半部は調査区外に位置する。現況での掘り方は径3.4mを測り、検出面からの深さ1.6mに平坦面を作り、中央部に径約1mの掘り込みを行なう。掘り込み内は湧水するが、その深さは0.3m程度である。底面の標高は0.95mを測る。井筒は遺存しないが、土層図(5-8層)から径0.7m前後の木桶を用いたものと推測される。

出土遺物 (第10・11図) 53-58は土師器で、いずれも外底部には回転糸切り痕および板状圧痕を有する。53-55は小皿、56-58は坏で、それぞれ復元口径は8.5-9.1cm、14.8-15.7cmを測る。59



第8図 SE005 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)



第9図 SE005出土遺物実測図(2)(52は1/4、他は1/3)

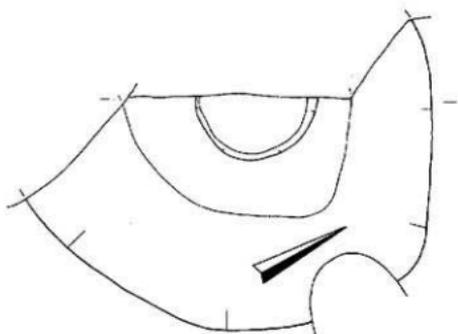
～62は瓦器碗である。62の高台は断面方形を呈する。体部内外面はヘラ研磨を行う。63・64は中国陶器である。63は壺で、オリーブ灰色の釉が内外面に薄く施釉される。口縁部内面には目跡が残る。耳の基部が僅かに遺存する。64は鉢である。釉色はオリーブ黄色で、口縁部外面の釉は拭き取る。その内面には目跡を有する。65～71は白磁である。65～67は碗V-4・a類で、口縁部上面を水平にする。68は水注で、SE004出土品(第7図31)と同一個体の可能性が高い。69～71は皿である。69・70は見込みの釉を輪状にカキ取るⅢ-1類で、体部下半以下は露胎である。71は皿Ⅵ類で、オリーブ灰色の釉が内面および体部外面の上半に施される。72は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。73～75は同安窯系青磁で、73・74は碗、75は皿Ⅰ-2類である。76は瓦質の埴片で、厚さ4.0cmを測る。他に縄目叩きの瓦片、釘等が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE007(第12図) 調査区南西端、D-6区に位置し、北側をSE003に切られる。また、大半が調査区外に延びるため、掘り方の一部分を確認したにとどまる。検出面からの深さ1.5mにおいて平坦面を検出したが、井筒は調査区内では未確認である。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とし、黄褐色砂が織状に混じる。

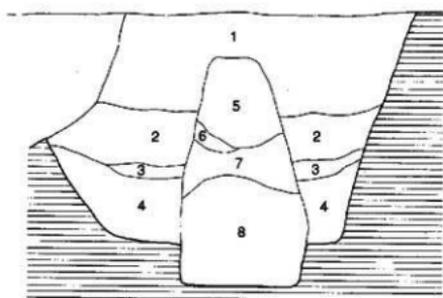
出土遺物(第12図77～82) 77は復元口径11.8cmを測る土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。78は瓦器碗で、ヨコナデ調整を加える。79は中国陶器の皿で、明赤褐色を呈する胎上に暗褐色の釉が全面に施される。底部は上げ底をなす。80は白磁皿Ⅲ-1類である。見込みの釉を輪状に剥ぎ取る。81・82は龍泉窯系青磁碗である。81はⅠ-5・b類で、蓮弁幅は狭い。82は見込みに片彫りによる花文を施す。買人が多く認められる。他に回転糸切り底の土師器小皿、白磁碗Ⅴ類等の細片が出土した。以上の出土遺物から13世紀前半から中頃に比定される。

SE009(第12図) D-6区で確認した井戸で、西側をSE003・004に切られる。掘り方は径2.2～2.4mを測る円形プランで、検出面からの深さ1.6mに狭い平坦面を設ける。その中央に井筒を据え付ける径0.6m、深さ0.35mの円形の掘り込みを有する。その内部には木桶が腐食したと考えられる円形の輪郭が認められたが、木質は遺存しない。また、掘り込みの上位では湧水する。なお、底面の標高は1.05mを測る。

出土遺物(第12図83～90) 83～85は土師器小皿である。83・84の外底部は回転ヘラ切り、85は回転糸切りである。いずれも板状圧痕を有する。復元口径は順に9.4、8.6、8.6cmである。86は回転ヘラ切り底の土師器丸底坏で、板状圧痕が認められる。復元口径は13.4cmを測る。87は瓦器碗である。内外面にヘラ研磨を施し、口縁部にはヨコナデを加える。88～90は白磁である。88は碗Ⅳ-1

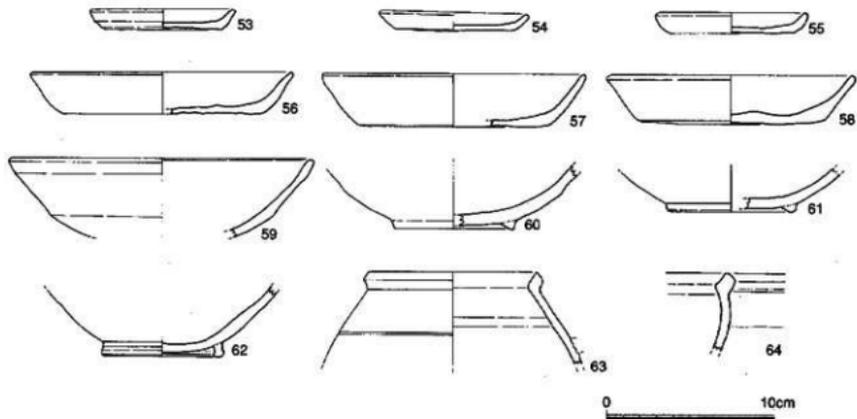


H=3.3m

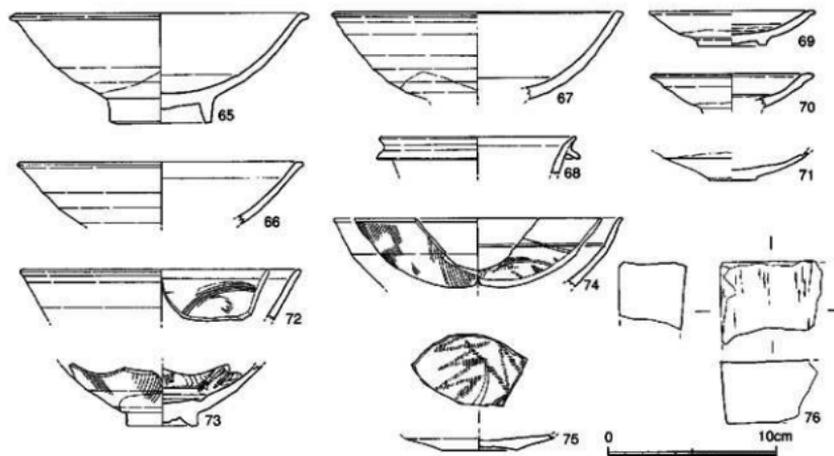


SE006

- 1 黄褐色砂質土および暗赤褐色砂質土の互層
- 2 黄褐色砂質土（暗褐色砂質土ブロック含む）
- 3 黄褐色砂（暗褐色砂質土に混じる）
- 4 黄褐色砂（暗褐色砂質土に混じる）
- 5 黄褐色砂質土（粘性あり）
- 6 黄褐色砂質土（粘性あり）
- 7 黄褐色砂質土（暗赤褐色砂質土ブロック含む、やや粘性あり）
- 8 黄褐色砂質土（暗赤褐色砂質土ブロック少量含む、やや粘性あり）



第10図 SE006 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)



第11図 SE006 出土遺物実測図 (2) (1/3)

・a類で、上面付近で出土した。見込みには沈線が巡る。89は碗V類、90は皿V類で、外底部の軸を削り取る。見込みには段を有する。他に中国陶器、瓦等が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の井戸と考えられる。

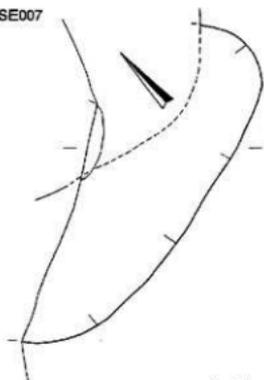
SE010 (第13図) SE012を切る井戸で、E-5・6区の調査区際で検出した。また、北側をSE001に切られる。東半部は調査区外に位置する。現況で、径約3mの円形の掘り方をなす。掘り方の覆土は暗褐色砂質土と黄褐色砂の互層で、その中央東側には上面付近から井筒痕跡と考えられる粘性のある暗灰褐色砂質土の円形プランが比較的明瞭に確認できた。検出面から1.5mの深さに平坦面を設け、井筒の下部を据える深さ0.4mの円形の掘り込みが検出できたが、東半部は調査区外にある。その内部には幅10cmの板材を用いた木桶が高さ約25cm程度遺存する。また、壁面際には板材1枚が横倒して出土した。掘り込み内は湧水し、底面の標高は約0.95mを測る。

出土遺物 (第13図) 91は土師器小皿で、復元口径は9.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。92は土師器杯である。回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径は15.0cmである。93・94は瓦器碗である。95は中国陶器無軸の播鉢で、播目は10条単位である。露胎部分は淡褐色を呈し、胎土は白色砂粒を含む灰色である。井筒の下層から出土した。96・97は白磁である。96は碗IV-1・a類、97は碗V-4・c類で、外面にヘラ状工具、内面には櫛状工具による施文を施す。98は滑石製片断で、石鍋を転用したものである。2筒所に穿孔が認められる。他に龍泉窯系青磁、瓦等の破片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸に比定される。

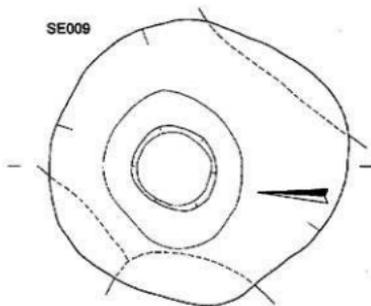
SE011 (第14図) D-5区に位置し、西側をSE004・006に切られる。掘り方は径約2.9mの円形を呈する。検出面からの深さ約1.6mに狭い平坦面を作り、その中央に径約0.6mの円形の掘り込みを行う。その内部は湧水が著しく、木桶等の痕跡は認められなかった。底面の標高は約0.8mと推定される。掘り方の覆土は暗灰褐色砂質土と暗黄褐色が互層をなす。

出土遺物 (第14図99~106) 99は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。復元口径は

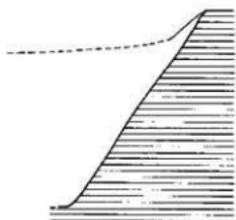
SE007



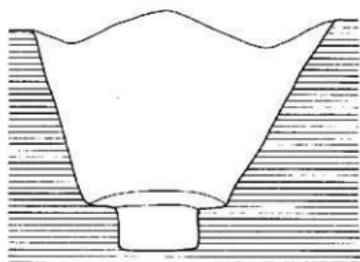
SE009



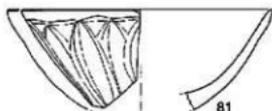
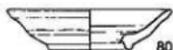
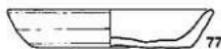
H=3.1m



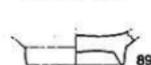
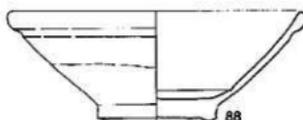
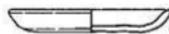
H=3.1m



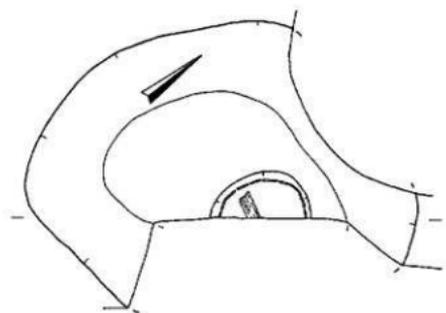
0 1m



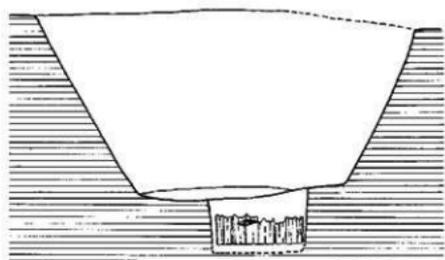
0 10cm



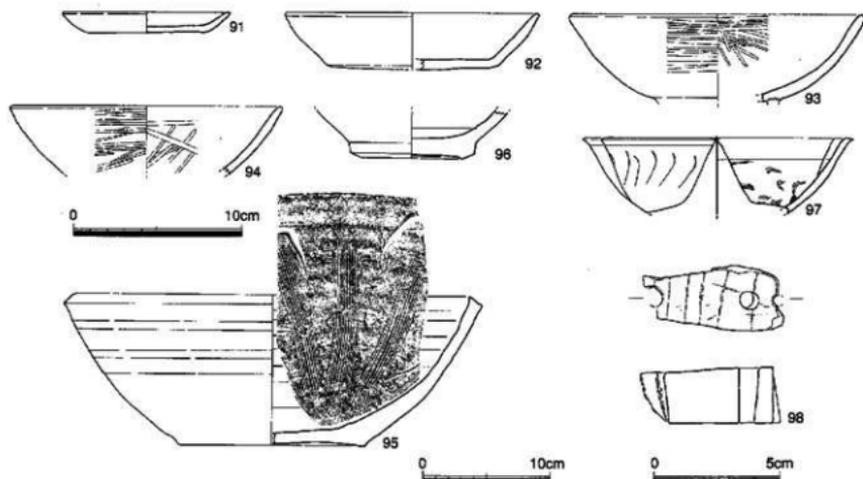
第12図 SE007・009 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



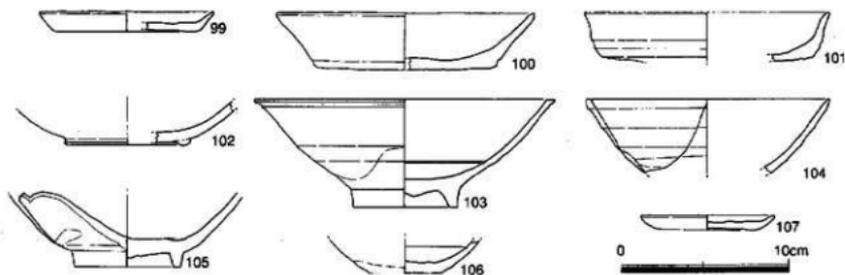
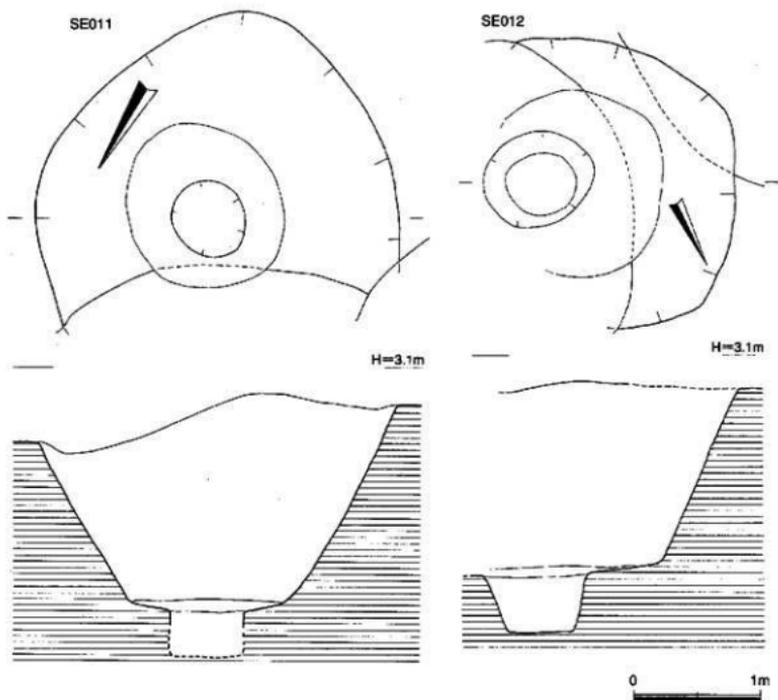
H=3.1m



0 1m

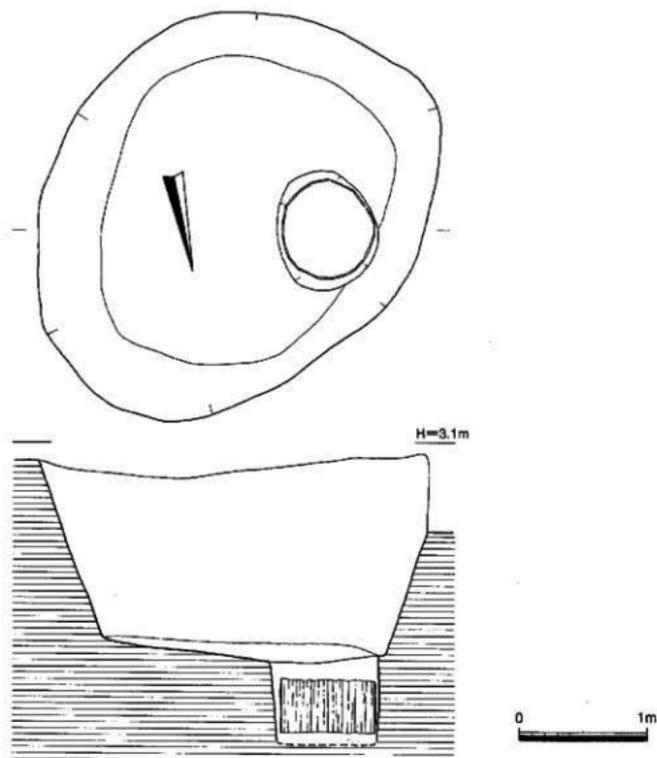


第13図 SE010 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (98は1/2、95は1/4、他は1/3)



第14図 SE011・012 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

10.2cmを測る。100・101は十師器坏である。復元口径は順に15.2、14.5cmを測る。100の外底部は回転へら切り、101は回転糸切りで、板状圧痕を有する。102は瓦器碗で、断面台形状の低い高台を貼付する。103～106は白磁で、103～105は碗である。103は平坦面付近で出土したV-4類である。体部の下位に沈線を施す。釉は濁った灰白色で、薄く施釉される。104の外面下半は露胎である。



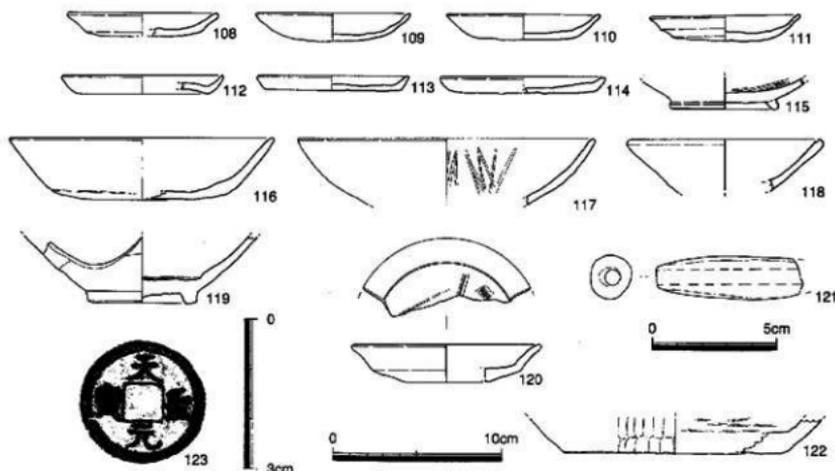
第15図 SE013 実測図 (1/40)

105はⅣ-2類で、見込みの段内側の軸を輪状にカキ取る。106は皿V類と考えられ、体部外面下半から底部の軸は削り取る。内面には段を有する。他に白磁碗Ⅳ・Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、瓦等の細片が出上した。以上の出土遺物から12世紀中頃の井戸と考えられる。

SE012 (第14図) E-5・6区で検出した。南西部をSE005、東半部をSE010に切られる。現況では径2.5mの円形の掘り方をなすものと推定される。検出面からの深さ1.5mに平坦面を設け、径0.7~0.9m、深さ0.4mの井筒を据える掘り込みを有する。内部に木質は遺存していない。底面の標高は0.9mを測る。

出土遺物 (第14図107) 図化し得た遺物は土師器小皿1点のみで、井筒掘り込み内から出土した。外底部は回転へら切りで、板状圧痕が認められる。復元口径は7.8cmを測る。他に少量の回転糸切り底の土師器小皿細片が出上している。出土遺物は少量であるが、遺構の前後関係からも12世紀中頃の井戸と推定される。

SE013 (第15図) D・E-5区に位置する。他遺構との重複はないが、東側の壁面は攪乱される。



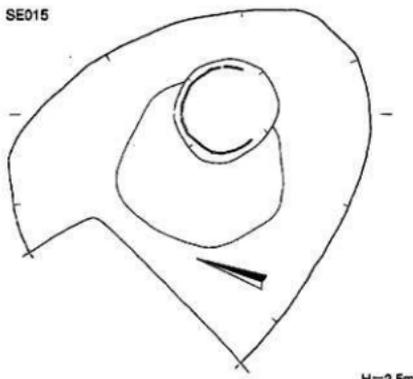
第16図 SE013 出土遺物実測図 (123は1/1、121は1/2、他は1/3)

掘り方は不整な楕円形を呈し、長径3.5m、短径2.8mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなす。また、上層から井筒痕跡と考えられるやや粘性のある暗灰色砂質土の円形プランが確認できた。検出面からの深さ1.6mに平坦面を設置し、西側壁面寄りに井筒を据える径0.8～0.95m、深さ0.7mの掘り込みをもつ。その上位では湧水する。また、内部には幅10cm前後、厚さ約2cmの板材を21枚用いた径約70cmの木桶が高さ約40cm遺存するが、土圧により歪む。底面の標高は0.7mを測る。

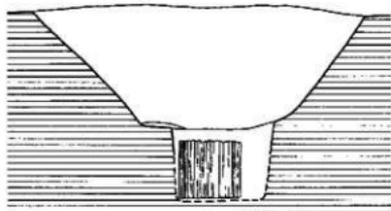
出土遺物(第16図) 108～116は土師器で、この内108～114は小皿である。復元口径は8.8～9.6cmを測り、平均は9.0cmである。いずれも外底部には板状圧痕を有するが、108～111は回転ヘラ切り、112～114は回転糸切りである。115は椀で、断面方形の低い高台を貼付する。内面はヘラ研磨、外面にはヨコナデを加える。116は復元口径15.4cmを測る坏で、外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が認められる。117は瓦器椀である。内面には縦方向のヘラ研磨を施す。118は中国陶器の皿である。暗赤褐色の胎土に褐色の釉を施す。119は白磁碗Ⅱ-2類である。見込みに段を有し、その内部の釉を輪状にカキ取る。120は同安溪系青磁皿Ⅰ-2類で、見込みに片彫りおよび櫛状工具による施文を行なう。外底部の釉は削り取る。内外面共に貫入が多く認められる。121は管状土錘で、端部を欠損する。122は滑石製石鍋で、外面にはノミによる削痕が認められ、煤が付着する。123は北宋代の銅銭、「天聖元寶」(初鑄年:1023年)である。他に白磁碗Ⅳ類、瓦等が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の井戸と考えられる。

SE015(第17図) E-5区で確認した井戸で、西側壁面は擾乱に切られる。SE016・017を切るが、検出当初は前後関係が判然としなかったため、全体を0.5m程度掘り下げ、その面で三者の前後関係を確認した。掘り方は円形もしくは楕円形を呈するものと考えられ、径は3m以上と推定される。検出面からの深さ約1.4mには狭い平坦面を設け、東寄りには井筒を据える径0.8m、深さ約0.6mの円形の掘り込みを行なう。その上位では湧水が認められ、内部には幅10cm前後の板材を合わせた木桶が南東部1/4を除き、高さ45cmが遺存する。底面の標高は約0.75mと推定される。

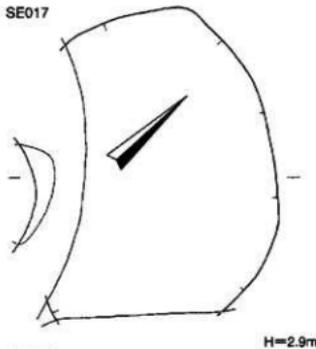
SE015



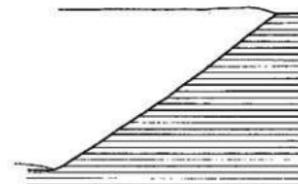
H=2.5m



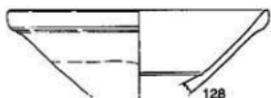
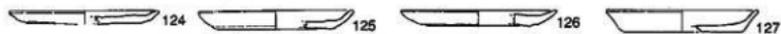
SE017



H=2.9m



0 1m



128



129



131



132



129



130

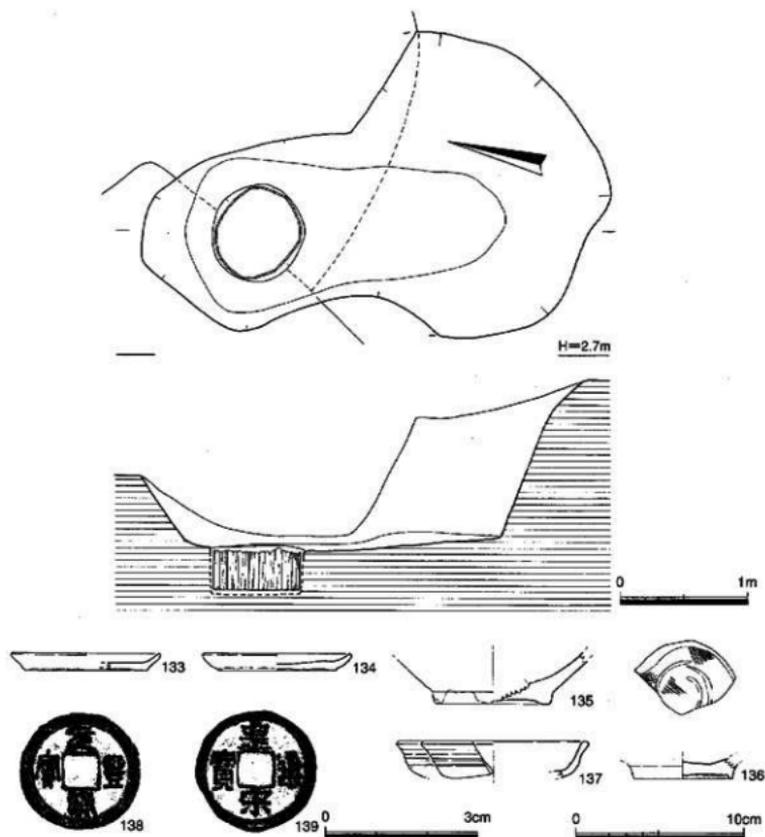


0 10cm

0 5cm

第17図 SE015・017 実測図 (1/40) およびSE015 出土遺物実測図 (131は1/2, 他は1/3)

出土遺物(第17図) 124~127は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕はない。復元口径は8.6~9.2cmである。128は白磁碗Ⅳ類で、見込みに沈線状の段が巡る。外面にはピンホールが多い。129・130は同安窯系青磁碗である。129は外面に片彫りによる沈線を有するⅢ-1・c類である。内面にも同様の工具による花文を施す。130はⅠ-1・b類で、外面に櫛目を施し、内面には片彫りによる施文が認められる。131は上層から出土した青銅製の観音菩薩立像で、長方形の台座を有する。両手の端部を欠失する。高さ3.9cmを測る。132は混入した弥生土器甕の口縁部片で、中期後半の所産であろう。器面は風化が進む。なお、現在のところ遺跡内で該期の遺構の報告

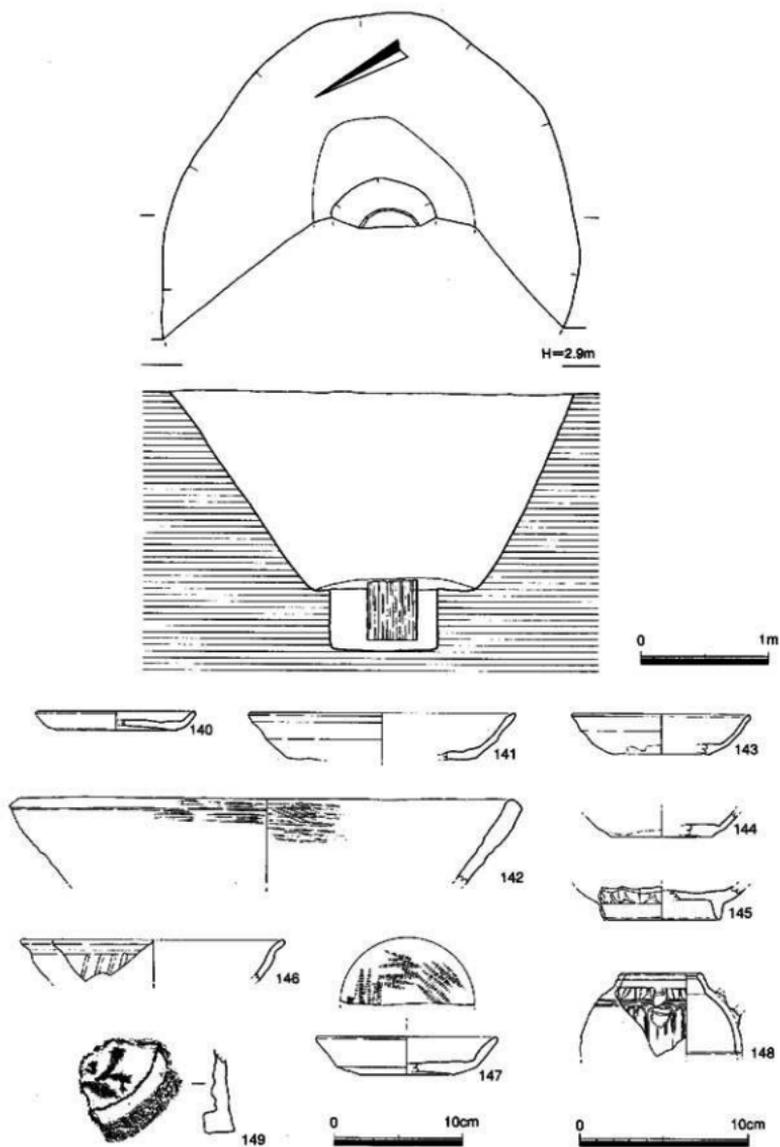


第18図 SE016 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (138・139は1/1、他は1/3)

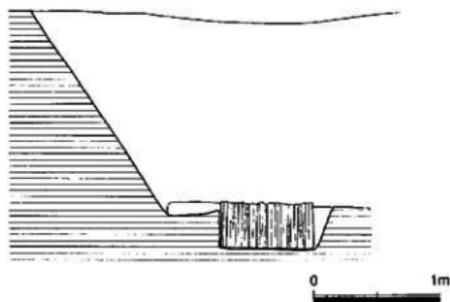
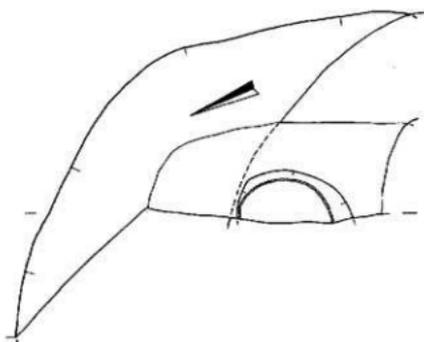
例はない。他に瓦器椀、中国陶器、白磁碗V類、龍泉窯系青磁等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半から13世紀前半の遺構と推定される。

**SE016** (第18図) SE015に切られる井戸で、E-5区に位置する。また、西側は掘乱に切られるため、遺存状況は不良であるが、掘り方は楕円形を呈するものと推察される。検出面からの深さ1.5mに楕円形プランの平坦面を設け、北側寄りに径約0.7m、深さ0.4mと推定される円形の掘り込みを有する。その内部は湧水し、木桶を据え付ける。桶は厚さ1-1.5cm、幅8-10cmの板材を22枚用いており、その径はやや重みがあるものの約65cmを測る。なお、底面の標高は約0.8mである。

**出土遺物** (第18図) 133・134は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。復元口径は共に8.6cmを測る。135・136は白磁碗である。135は碗V類で、釉が高台際まで施される。136は青



第19図 SE018 実測図 (1/40) および出土物実測図 (149は1/4、他は1/3)



第20図 SE019 実測図 (1/40)

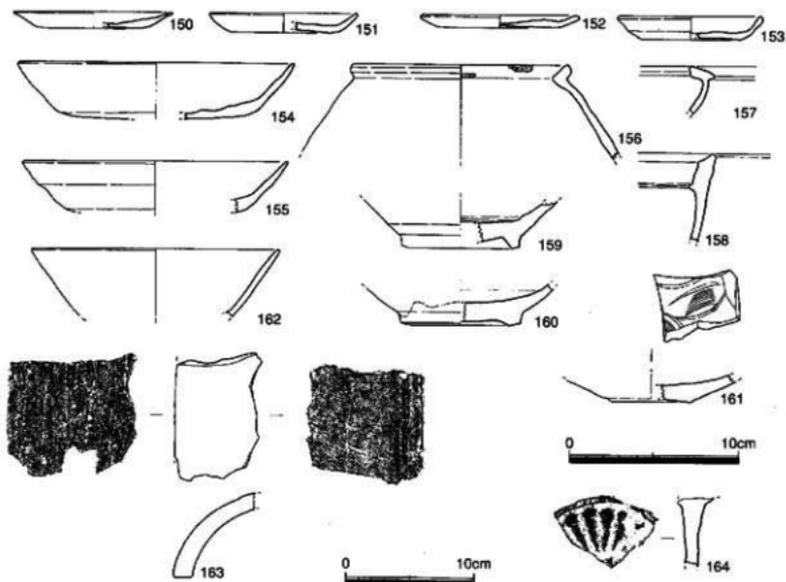
味のある釉を高台外面まで施軸する。幅が狭く、低い高台を有し、内面には片彫りおよび櫛状工具による施文がなされる。137は青白磁で、皿であろう。口縁端部は凸面気味の面をなし、体部には2条の沈線が巡る。138・139は北宋代の銅銭である。それぞれ「元豐通寶」(初鑄年:1078年)、「皇宋通寶」(初鑄年:1038年)である。他に1点銅銭が出土しているが、錆化が進むため、銭文は不明である。その他の出土遺物として瓦器、須恵質土器、中国陶器、白磁等の細片がある。これらの出土遺物から12世紀後半から13世紀前半の井戸と考えられる。

SE017 (第17図) E-4・5区に位置し、南側をSE015に切られる。また、東側は調査区外に延びるため、遺構の全容は不明である。検出面からの深さ1.5mにおいて平坦面を確認できたが、井筒や掘り込みについては検出できなかった。出土遺物に

は回転系切り底の上師器小皿、白磁、青磁、瓦が少量あるが、いずれも細片で図化し得ない。

SE018 (第19図) D-4区で検出したが、西半部は調査区外に位置する。また、SE019・020を切る。現況では掘り方は径約3.1mを測る円形を呈する。検出面からの深さ約1.5mに平坦面を設け、井筒を掘る深さ0.5mの掘り込みを有する。また、内部には木桶が遺存するが、調査区内では径の1/4程度しか確認できなかった。板材7枚が高さ約40cm遺存する。底面の標高は0.65mを測る。

出土遺物 (第19図) 140・141は回転系切り底の土師器である。共に板状圧痕を有する。140は小皿で、復元口径は9.2cmである。141は復元口径15.6cmを測る坏である。142は瓦質土器の鉢である。器面の剥落が進むが、内外面に刷毛目調整が残る。143・144は口禿の白磁皿Ⅰ-2類で、外底部は露胎である。145は龍泉窯系青磁の坏Ⅲ-4・a類で、外面には銅蓮弁文を施す。胎土は淡赤褐色で、釉は二次的加熱により明灰白色を呈する。146・147は同安窯系青磁である。146は碗Ⅲ類で、外面に片彫りによる沈線を有する。147は皿Ⅰ-2類で、外底部の軸はカキ取る。見込みには櫛状工具による文様を施す。148は白磁の壺もしくは小形の水注と考えられる。把手の大半は欠損する。外面には型押しによる施文を有する。内外面にやや黄味がかった釉が施されるが、口縁端部は施釉後にカキ取る。胎土は軟質である。149は須恵質の軒丸瓦で、瓦当には界線および草花文が施され

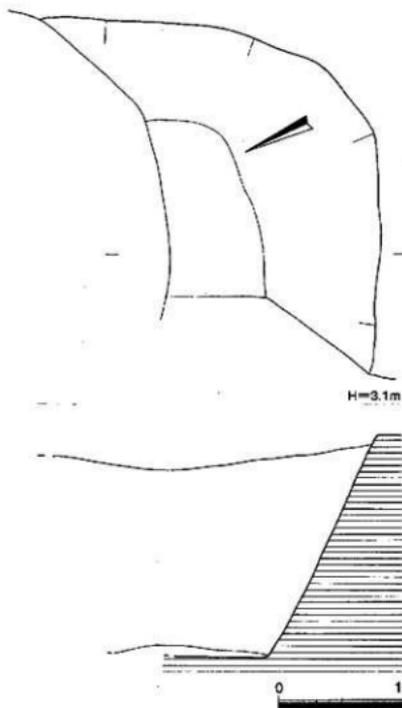


第21図 SE019 出土遺物実測図 (163・164は1/4、他は1/3)

る。他に中国陶器、白磁碗Ⅱ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土した。この井戸は以上の出土遺物から13世紀後半に位置付けられる。

SE019 (第20図) D-4区に位置し、南側をSE018に切られる井戸である。また、西側は調査区外に位置するため、遺構の約1/4を確認したにとどまる。検出面からの深さ1.6mに平坦面を作り、井筒を据える深さ約0.3mの円形プランの掘り込みを行なう。その内部には幅10cm未満の板材を用いた木桶が高さ約40cm遺存する。底面の標高は0.8mを測る。掘り方の覆土は暗黄褐色砂を主体として灰褐色砂質土が互層をなす。

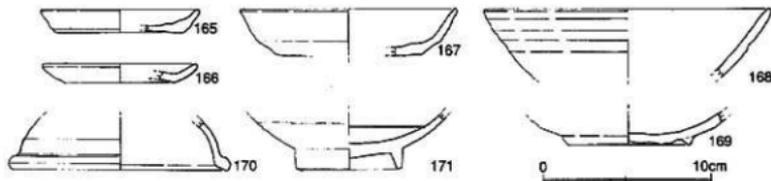
出土遺物 (第21図) 150～153は土師器小皿である。150は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りである。150・153には板状圧痕が認められる。復元口径は8.4～9.2cmを測る。154・155は土師器坏である。外底部は共に板状圧痕を有し、154は回転ヘラ切り、155は底部の遺存が少なく切り離し技法は不明瞭である。復元口径は順に16.0、15.4cmを測る。156～158は中国陶器である。156は壺で、口縁部内面に目跡が残る。黒色粒子を含む暗灰色の胎土にオリブ灰色の釉が全面に薄くかけられる。157は鉢で、「T」字状を呈する口縁部は外傾する。にぶい赤褐色の胎土にオリブ褐色の釉を施す。158は無釉の捏鉢である。胎土には白色砂粒が多量に混じる。159～161は白磁である。159は見込みの釉を輪状にカキ取る碗Ⅱ類、160は碗Ⅳ-1・a類で、見込みに段状の沈線を有する。161は皿Ⅱ-1・c類で、低い高台状の削り出しを有する。淡オリブ灰色の釉が外底部を除き施釉される。内面には片彫りおよび櫛状工具により花文を描く。162は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類である。163・164は須恵質の瓦である。163は丸瓦で、凸面は縄目叩きを粗くナゲ消す。凹面には布目が残り、側



第22図 SE020 実測図 (1/40)

半の遺構と考えられる。

SE024 (第24図) E-3・4区に位置し、他の井戸とは重複しない。掘り方の東側の一部は調査区外に位置するが、径約2.2mの円形を呈するものと考えられる。上面からの深さ約1.7mを掘り下げた後、更に井筒を掘る径0.7m、深さ0.3mの円形の掘り込みを行っている。その内部は湧水するが、径0.55mを測る円形を呈する木質の腐食した痕跡を確認できた。最下段の木桶であろう。なお、底面の標高は0.95mと推定される。

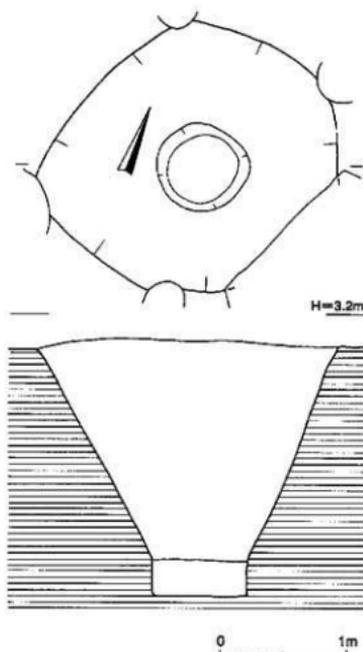


第23図 SE020 出土遺物実測図 (1/3)

面はヘラナデを施す。164は軒丸瓦で、花卉および珠文を配する。他に瓦器碗、同安窯系青磁皿、滑石製石鏡等の細片が出土した。以上の遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SE020 (第22図) D-4・5区で検出した井戸で、北側をSE018に切られる。また、西半部は調査区外に位置するため、全体の約1/4しか調査し得なかった。検出面からの深さ1.7mに平坦面を設けるが、井筒は調査区内では確認できなかった。

出土遺物 (第23図) 165~167は土師器である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕はない。165・166は小皿で、復元口径は順に9.2、9.0cmを測る。167は復元口径12.6cmを測る杯である。168・169は瓦器碗で、外面はヨコナデ、内面はヘラ研磨を施す。169には低い断面三角形の高台を貼付する。170は中国陶器の蓋である。灰褐色の胎土に褐釉を施す。171は白磁碗V類で、見込みに段状の沈線が巡る。釉はやや青味をおびた白色を呈し、体部下半は露胎である。他に須恵質土器、白磁碗IV類、龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁、瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半から13世紀前

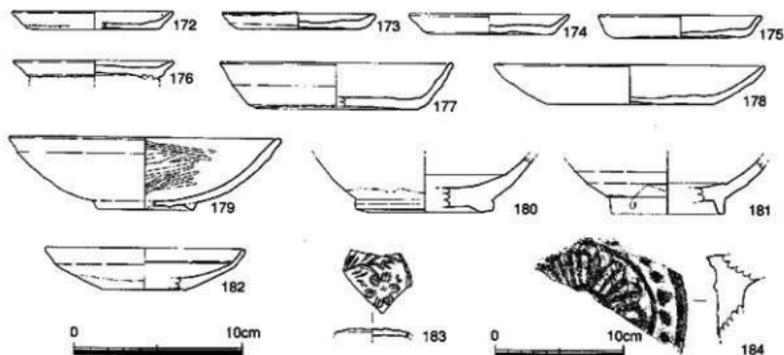


第24図 SE024 実測図 (1/40)

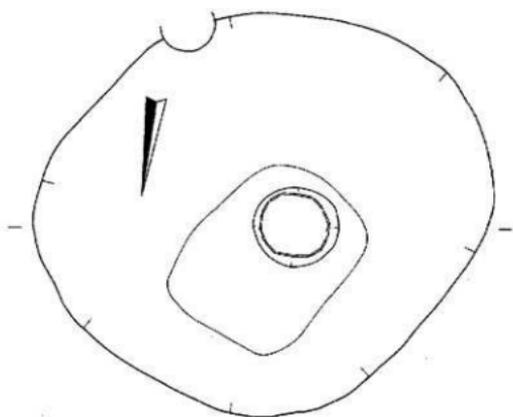
出土遺物 (第25図) 172~176は土師器小皿である。172~175の外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。復元口径は8.9~9.4cmを測る。173はほぼ完形である。175は井筒掘り込み内から出土した。176は高台をヨコナデで貼付する小皿cであるが、台の大半を欠失する。外底部には回転糸切り痕が残る。復元口径は9.2cmを測る。177・178は回転糸切り底の土師器環で、共に板状圧痕を有する。復元口径は順に13.6、15.8cmである。179は瓦器碗である。断面三角形の低い高台を付す。内面は横方向のヘラ研磨、外面にはヨコナデを加える。内面から口縁部外面にかけては黒灰色、以下は淡灰白色を呈する。180~182は白磁である。180は碗Ⅳ-1・a類、181は碗Ⅴ類である。共に明オリブ灰色の釉が高台際まで施釉される。182は皿Ⅵ-1・a類である。体部上位で屈曲し、その内面に沈線を施す。オリブ黄色の釉がかけられるが、体部外面の下半は露胎である。183は青白磁の合子蓋で、天井部が遺存する。外面には型押しにより草花文を施す。釉は内外面にかけられ、青味のあるオリブ灰色を呈する。184は須恵質の軒丸瓦である。外区には界線および楕円形の珠文を配し、内区には複弁の蓮華文を有する。

他に白磁碗Ⅱ類等の細片が出土した。これらの出土遺物からこの井戸は12世紀後半に比定される。

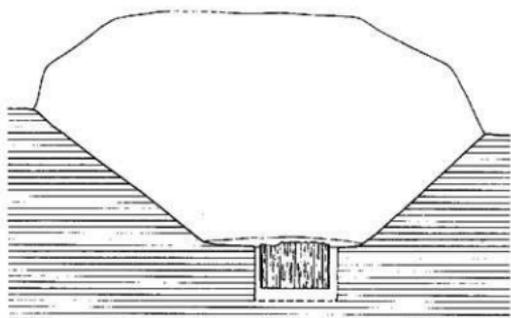
SE026 (第26図) D・E-3区で検出した。他の井戸とは重複しないが、周辺の擾乱によって壁



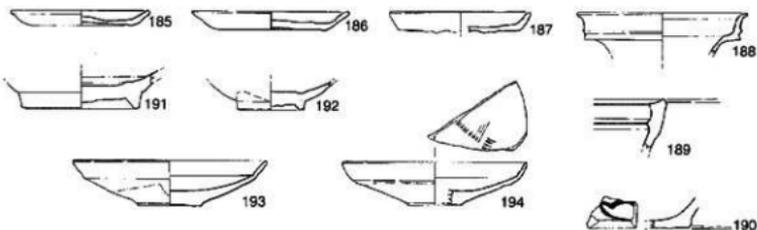
第25図 SE024出土遺物実測図 (184は1/4、他は1/3)



H=3.1m

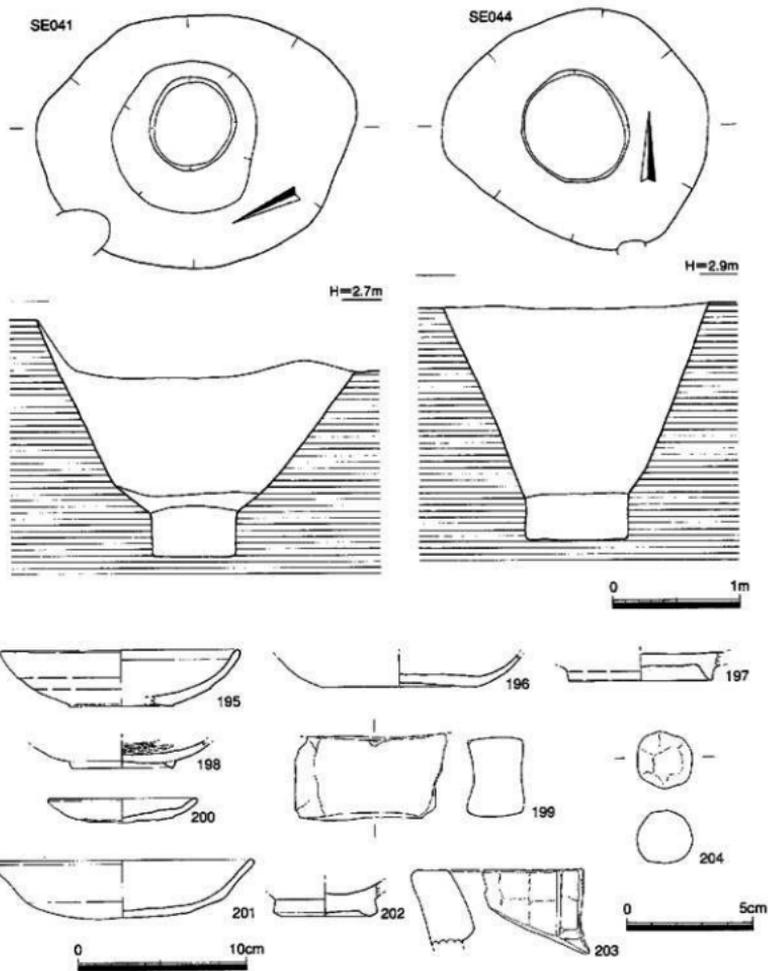


0 1m



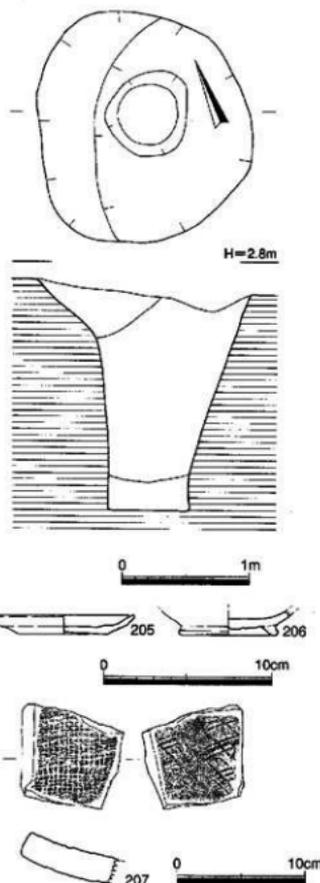
0 10cm

第26図 SE026 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



第27図 SE041・044 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (204は1/2、他は1/3)

面が削平を受ける。現況で、掘り方は径3.1~3.5mを測るやや不整な円形プランを呈する。検出面からの深さ1.8mに平坦面を設け、その南側に径0.65mの掘り込みを有する。その内部は湧水し、幅10cm前後、厚さ1~2cmの板材を15枚用いた径約50cmの木桶が据えられる。高さは約35cmが遺存する。底面の標高は約0.65mを測る。



第28図 SE270 尖測網 (1/40) および  
出土遺物実測図 (207は1/4、他は1/3)

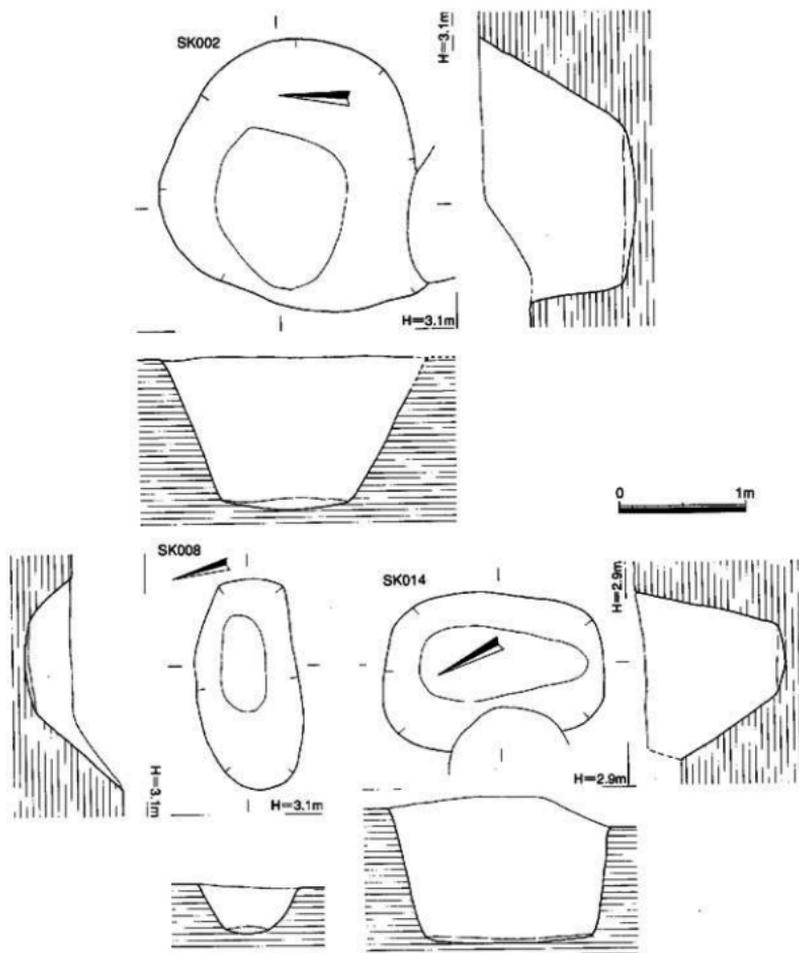
ナデを施す。198は瓦器碗である。内面はヘラ研磨、外面にはヨコナデを加える。199は砂岩製の砥石で、4面を砥面として利用する。両端部は欠損する。他に須恵質土器、中国陶器、白磁碗Ⅳ類、瓦等の細片が少量出土した。土師器の法量からは13世紀前半の井戸と推定される。

SE044 (第27図) D-1区で検出した井戸で、掘り方は径1.9~2.1mを測る小形の円形プランを呈する。検出面からの深さ約1.5mまでをまず掘り下げている。その壁面の傾斜は急である。更に径約0.9m、深さ約0.4mの円形の掘り込みを行なっている。その上面では木質の腐食した径約0.6mの円形の輪郭のみを検出し得た。掘り込み内は湧水するが、底面の標高は約0.8mと推定される。

出土遺物 (第26図) 185~187は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕がある。復元口径は8.2~9.2cmを測る。185は井筒内出土である。188は高麗陶器の二重口縁壺で、口縁部は外反し、内外面共にヨコナデを施す。胎土は堅緻で、にぶい赤褐色を呈するが、器面は暗灰色である。口径は10.0cmに復元できる。他に胴部片と思われる細片が1点出土している。189・190は中国陶器である。189は無軸の捏鉢で、赤褐色を呈する胎土には砂粒が目立つ。190は鉢の底部片で、内面には黄白色の施釉を行ない、鉄絵を施す。外面は露胎である。191~194は白磁である。191は碗Ⅲ類、192はⅢⅢ-1類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。193・194はⅢⅢ-1・a類で、体部の上位で屈曲する。体部外面の下半は露胎である。193の外底部には墨書が認められるが、字体は不明である。また、194の内面には柳状工具による施文を有する。他に土師器杯、須恵質土器、同安窯系青磁、格子目印きの瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸と推定される。

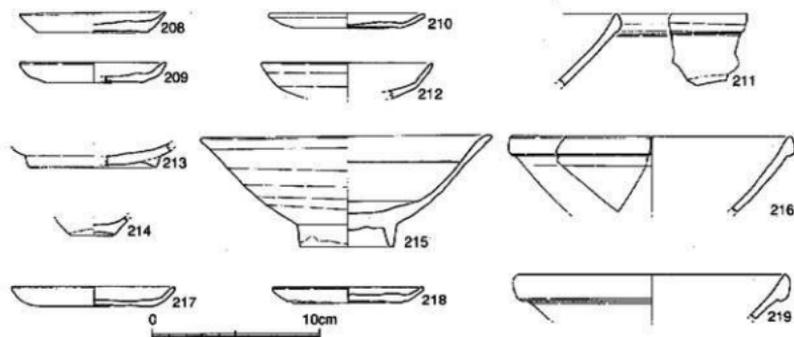
SE041 (第27図) 調査区北西のB-1区に位置する。壁面の大半は擾乱に切られるが、掘り方は現況で、径2.1~2.6mの不整な円形を呈する。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。検出面からの深さ約1.5mまでを掘り下げた上で、更に井筒を据える径約0.7m、深さ約0.3mの円形の掘り込みを行なう。その内部は湧水するが、木桶等の木質は確認できなかった。底面の標高は約0.7mを測る。

出土遺物 (第27図195~199) 195・196は土師器杯である。共に回転糸切り底で、板状圧痕はない。195の体部は大きく開き、復元口径は14.0cmを測る。197は土師器碗である。高台はヨコナデにより貼付するが、外底部には回転糸切り痕を残す。内底部は



第29図 SK002・008・014 実測図 (1/40)

出土遺物(第27図200~204) 200・201は土師器である。共に外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。200は完形の小皿で、復元口径は8.8cmを測る。淡黄灰色を呈する。201は復元口径15.2cmを測る丸底環である。202は白磁碗Ⅳ-1類である。203は方形の縦耳を有する滑石製石鍋の口縁部片である。外面にはノミによる割痕が認められる。204は瓦を整形したと考えられる上球である。淡黒灰色を呈し、重量は9.3gを測る。他に回転糸切り底の土師器、瓦器、中国陶器の細片が少量



第30図 SK002・008・014川上遺物実測図 (1/3)

出土している。以上の出土遺物より12世紀中頃の遺構と考えられる。

SE270 (第28図) D-2区で検出した井戸で、SD029に南半部上半を切られる。掘り方は小形の円形プランで、径は1.7~1.8mを測る。深さ1.6mまでを掘り下げた上で、更に井筒最下部を掘える径約0.7mの円形の掘り込みを行なう。その上面では径0.5mを測る円形を呈する木質の腐食した痕跡が認められた。また、内部は湧水するが、底面の標高は約0.8mと推定される。

出土遺物 (第28図) 205は復元口径8.2cmを測る土師器小皿である。回転糸切り底で、板状圧痕を有する。206は土師器碗である。内面には丁寧なナデを施す。207は平瓦で、四面には目の粗い布目と縄紐の痕跡が残る。凸面には二重の斜格子目の叩きを施す。焼成は須恵質である。他に回転ヘラ切り底の土師器、白磁の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の井戸と推定される。

## 2) 土坑 (SK)

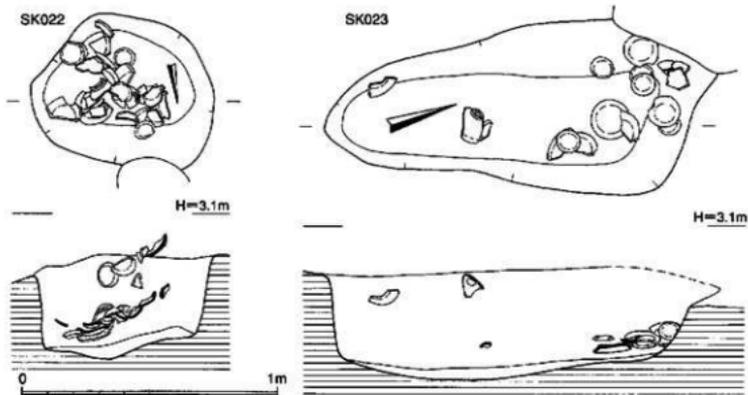
井戸同様に12世紀後半から13世紀が上体を占め、総じて小規模なものが多い。またSK042・043・045・046・047は底面近くに角礫を配置した土坑で、出土遺物は少量であるが、中世後半期の所産と推定される。

SK002 (第29図) 調査区の南端部、E-6区に位置し、SE005を切る。検出当初は井戸と考え、掘削を進めたが、底面が湧水点に達してないことや、井筒の痕跡が認められないことから土坑とした。径2.1~2.3mを測る不整な円形プランを呈し、深さは1.2mを測る。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。

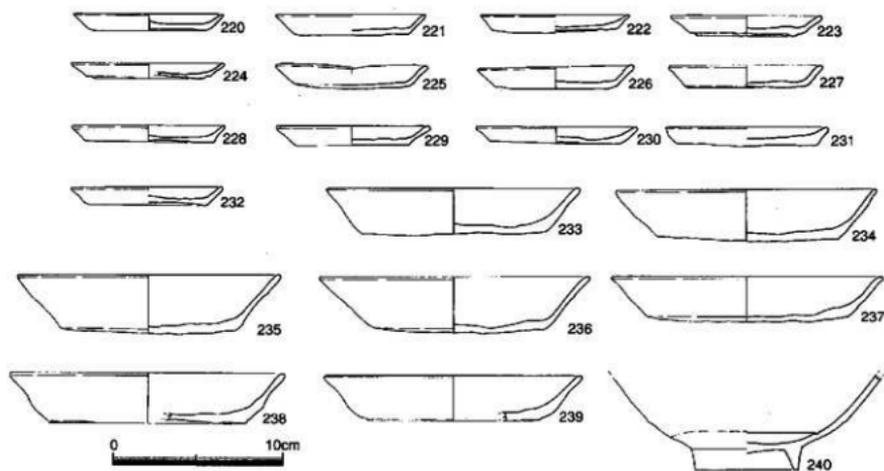
出土遺物 (第30図208~212) 208~210は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径は8.5~9.3cmを測る。211・212は白磁である。211は碗Ⅳ類で、灰白色不透明な釉が内面および外面の体部上半に施される。212は皿Ⅰ-a類である。体部上半で緩く屈曲する。他に瓦器、龍泉窯系青磁等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半から13世紀前半の遺構と推定される。

SK008 (第29図) D-5区で検出した楕円形プランの土坑で、SE006の東端部を切る。長径1.65m、短径0.8m、深さ0.7mを測る。断面は船底形を呈する。覆土は黒褐色砂質土を主体とし、下層では黄褐色砂が混じる。

川上遺物 (第30図213~216) 213は瓦器碗である。断面三角形の低い高台を貼付する。内面はへ

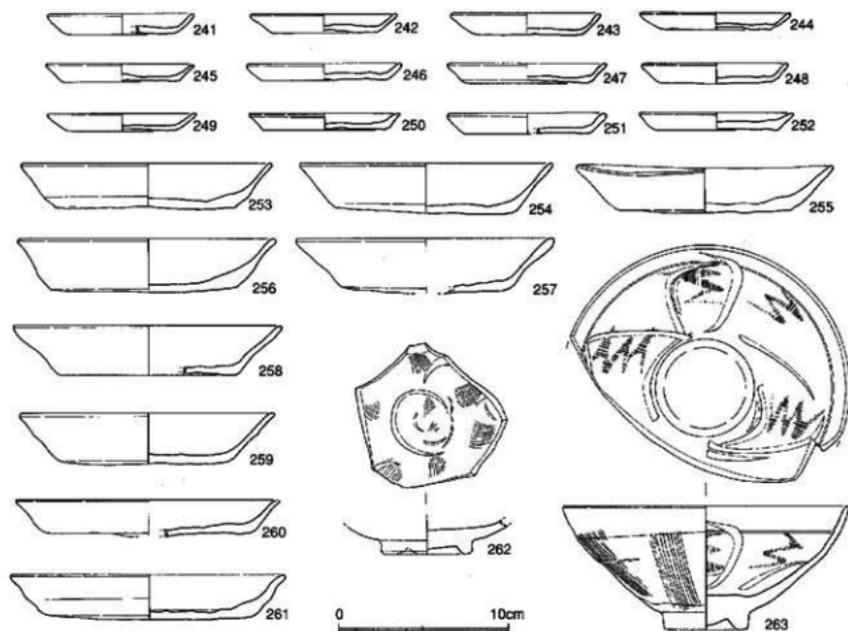


第31図 SK022・023 実測図 (1/20)



第32図 SK022出土遺物実測図 (1/3)

ラ研磨を施す。214～216は白磁である。214は上げ底をなす小壺である。外底部および内面は露胎である。釉はやや黄味をおびた白色である。215は碗Ⅴ-4・a類で、内面上位に沈線、見込みに段を有する。灰白色の釉が高台際まで施される。上層出土である。216は碗Ⅳ類である。他に回転糸切り底の土師器小皿・坏、須恵質土器、中国陶器、滑石製石鍋等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の土坑と考えられる。



第33図 SK023 出土遺物実測図 (1/3)

**SK014** (第29図) D-5区で検出した。不整な長方形プランを呈し、長さ1.7m、幅1.3m、深さ1.15mを測る。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平川である。覆上は暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなし、少量の炭化物が混じる。

出土遺物(第30図217~219) 217・218は回転糸切り底の土師器小皿である。218には板状圧痕が認められる。復元口径は順に9.4、8.8cmを測る。217は器面の風化が著しい。219は白磁碗Ⅳ類で、器面にはピンホール、貫入が認められる。他に回転糸切り底の土師器杯、須恵質土器、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類、瓦等の細片が出土した。これらの遺物から13世紀前半の遺構と推定される。

**SK022** (第31図) E-4区に位置する小形の土坑で、SK023を切る。径0.6~0.7mを測る不整な円形プランを呈し、深さは0.4mである。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は東側に傾斜する。覆土は黒褐色砂質土である。土師器小皿・杯を主体とする遺物が東側から流れ込んだ状態で出土した。接合により比較的完形近くに復元できた個体が多く、短期間における廃棄であろうと推察される。

出土遺物(第32図) 220~232は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.8~9.4cmを測り、平均は8.9cmである。221・232を除いて板状圧痕が認められる。233~239は土師器杯である。いずれも外底部は回転糸切り底で、235・239を除いて板状圧痕を有する。口径は14.6~16.0cmで、平均は15.4cmを測る。240は白磁碗Ⅴ類である。灰オリーブ色の釉が内面および外面体部上半にかけられる。見込みには沈線が巡る。他に丸瓦、滑石製石鍋片、鉄釘等が出土した。これらの出土遺物から

12世紀後半の土坑と考えられる。

**SK023** (第31図) SK022に切られる土坑で、E-4区で検出した。平面プランは不整な隅丸の長方形を呈し、長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.45mを測る。覆土はSK022と類似した黒褐色砂質土である。土師器小皿・坏を主体とする遺物が北側の底面上で出土した。完形に近い個体が多い。

出土遺物 (第33図) 241~252は土師器小皿である。外底部はいずれも回転糸切りで、241~247は板状圧痕を有する。口径は8.5~9.2cmを測り、その平均は8.8cmである。241の内外面には煤の付着が認められる。253~261は回転糸切り底の土師器坏である。259~261を除いて板状圧痕を有する。口径は14.6~16.0cmを測り、平均は15.1cmである。262は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3類である。内面に片彫りおよび櫛状工具により施文を行なう。263は同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類で、外面には櫛目を放射線状に配する。体部内面には片彫りおよび櫛状工具による施文を有し、L線部下には沈線が1条巡る。オリブ黄色の釉が体部下半まで施される。他に土師器碗の細片が出土している。以上の出土遺物からこの土坑は12世紀後半に位置付けられる。

**SK027** (第34図) D-4区に位置する隅丸長方形プランの土坑である。長さ1.9m、幅1.2m、深さ0.35mを測り、底面には凹凸がある。北側および南側には約0.2mの間隔をもって一辺10~20cmの角礫が各4個近接して配置される。各礫の底面はほぼ同一レベルに位置する。

出土遺物 (第35図264・265) 264は中国陶器の鉢で、萐筍底である。淡赤褐色を呈する胎土の内外面にオリブ黄色の釉が施される。265は管状土鏝で、両端部を欠損する。他に回転糸切り底の土師器、須恵質土器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、龍泉窯系青磁等の細片が少量出土している。これらの出土遺物から12世紀後半から13世紀の遺構と推定される。

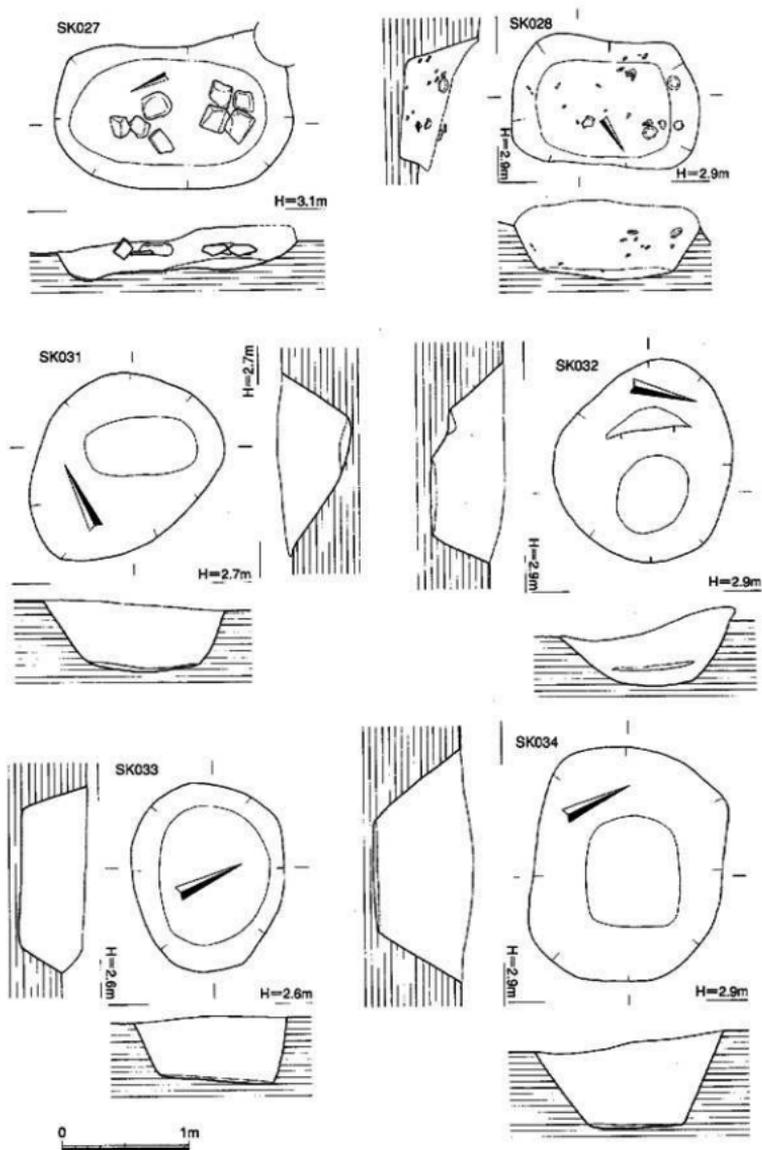
**SK028** (第34図) E-3区で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.5m、幅1.05m、深さ0.65mを測る。錆色の著しい鉄釘が10数本出土おり、木棺墓とも考えられるが、その出土位置が不規則であることや、土器類の出土状況から埋骨遺構として認定するにはやや消極的にならざるを得ないことから、ここでは土坑として報告する。

出土遺物 (第35図266~273) 266は完形の土師器小皿である。北側上面において倒置状態で出土した。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。口径7.7cm、器高1.2cmを測る。267~269は回転糸切り底の土師器坏である。口径は12.0~12.5cmを測る。267は完形品で、板状圧痕が認められる。西側の上面で出土した。270・271は白磁である。270は口弁の皿Ⅹ類で、やや青味のある白色釉を施す。271は碗Ⅰ-1類で、見込みは釉を輪状にカキ取り、段状の沈線が巡る。釉色は明オリブ灰色である。272は青白磁碗の体部下半である。内面には型押しによる草花文を有する。内外面共に貫入が認められる。273は復元口径28.0cmを測る滑石製右鍋で、口線下に巡る罫は細身である。外面には煤の付着が著しい。他に上述した鉄釘の他に白磁碗Ⅴ類、須恵質土器等の細片が出土した。これらの遺物から13世紀後半から14世紀初頭の遺構と考えられる。

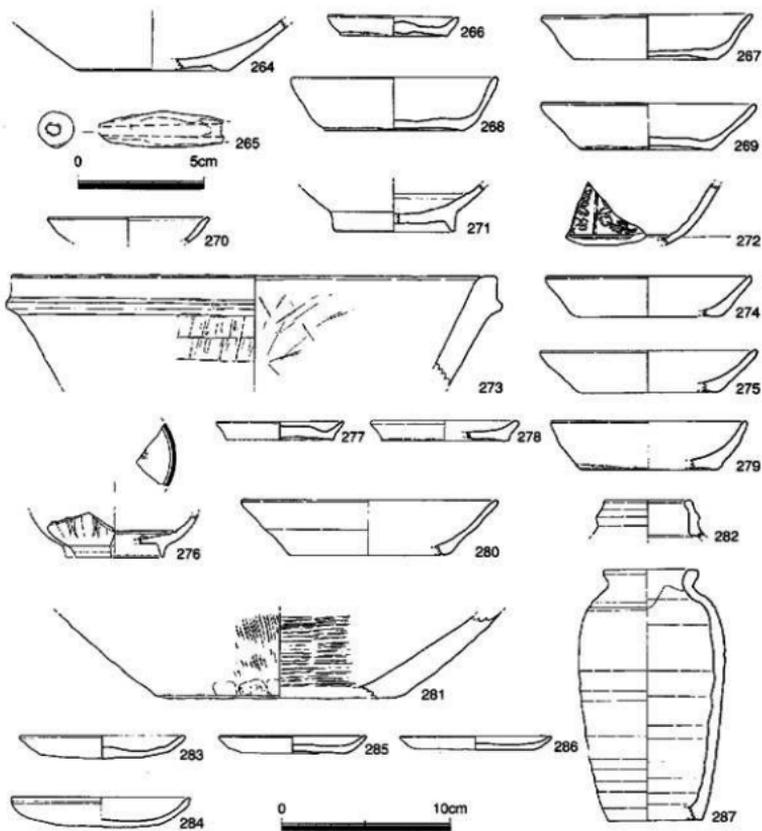
**SK031** (第34図) E-3区に位置する不整楕円形の土坑である。長径1.6m、短径1.3m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈する。覆土はやや灰色がかった黒褐色砂質土で、やや粘性がある。

出土遺物 (第35図274~276) 274・275は回転糸切り底の土師器坏で、共に板状圧痕は認められない。復元口径は順に12.0、12.6cmである。276は龍泉窯系青磁坏Ⅲ-4・b類である。丸味のある体部外面には不鮮明ながら鎗蓮弁文を有する。見込みには沈線を2条配し、中央には双鱼文と思われる貼付けが僅かに遺存する。壘付きは露胎で、赤褐色を呈する。他に須恵質土器、中国陶器、瓦等が少量出土している。これらの出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭に位置付けられる。

**SK032** (第34図) E-3区、SK031の北側に隣接する。径1.4~1.6mを測る不整な円形プランを



第34图 SK027·028·031·032·033·034 实测图 (1/40)



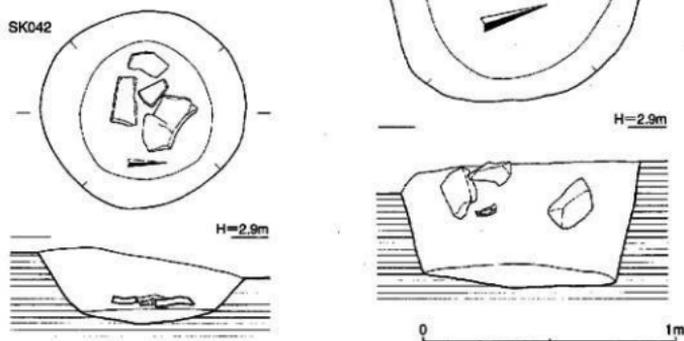
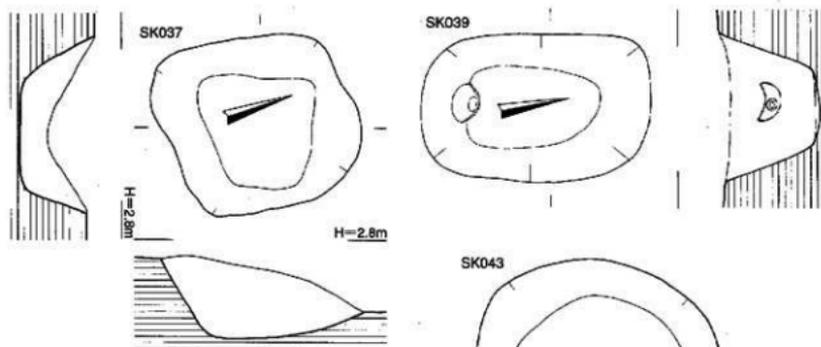
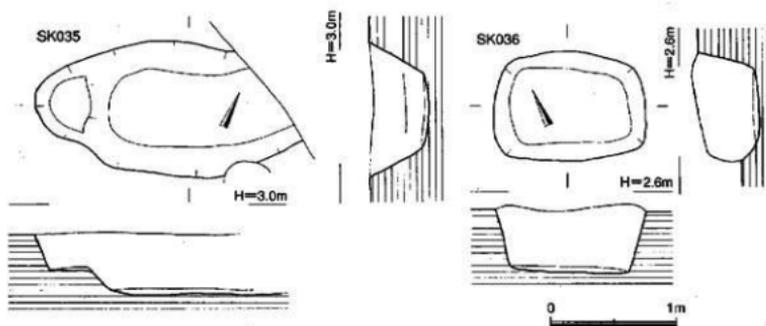
第35図 SK027・028・031・032・033・034 出土遺物実測図 (265は1/2、他は1/3)

なす土坑で、西側に狭いテラスを有する。底面は平坦で、深さは0.6mを測る。覆上はSK031に類似する。

出土遺物(第35図277) 土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。復元口径は7.4cm、器高は1.1cmを測る。他に瓦器、中国陶器、白磁が出土しているが、いずれも細片である。土師器の法量から14世紀前半代の遺構と推測される。

SK033(第34図) D-3区に位置する楕円形プランの土坑である。長径1.5m、短径1.2m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形をなす。覆上はやや粘性のある黒灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第35図278~282) 278~280は回転糸切り底の土師器で、板状圧痕はない。278は小皿で、復元口径8.4cmを測る。279・280は坏で、復元口径は順に11.4、15.0cmである。281は瓦質土器



第36図 SK035・036・037・039・042・043 実測図 (SK039・042・043は1/20、他は1/40)

の鉢である。内外面共に刷毛目調整を行うが、外面には粗いナデ、指オサエを施す。282は青白磁梅瓶の口縁部である。他に中国陶器、龍泉窯系・同安窯系青磁等の細片が出土した。これらの出土遺物から14世紀代の遺構と推定される。

**SK034** (第34図) D-3区で検出した。不整な隅丸長方形プランを呈し、長さ1.9m、幅1.5m、深さ0.8mを測る。断面は逆台形をなす。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第35図283~287) 283~286は土師器小皿である。283・284は回転ヘラ切り底で、共に板状圧痕はない。284はヘラ切り痕をナデ消す。復元口径は順に9.6、10.4cmを測る。285・286の外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。復元口径は順に8.6、8.8cmを測る。287は中国陶器の瓶である。口縁部上面は平坦で、軸をカキ取る。外面および口縁部内面には灰オリーブ色の釉がかけられる。露胎部は赤褐色を呈する。他に瓦器、白磁碗Ⅳ類、同安窯系青磁等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

**SK035** (第36図) D-3区に位置する土坑で、SD029に切られる。現況では胴張りの隅丸長方形を呈し、残存長2.1m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。西側には平坦面を有し、断面は逆台形をなす。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第37図288・289) 共に回転糸切り底の土師器である。288は復元口径9.2cmを測る小皿で、外底部には板状圧痕を有する。289は坏で、内底部にはナデを加えない。復元口径は12.0cmである。板状圧痕は認められない。他に瓦器、中国陶器、龍泉窯系青磁の細片が出土した。遺構の時期は出土遺物が少量のため、断定できないが、坏の法量から13世紀後半代と推定される。

**SK036** (第36図) D-3区で確認した隅丸長方形の土坑である。長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.5mを測る。覆土は粘性のある黒灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第37図290~293) 290・291は回転糸切り底の土師器小皿である。共に板状圧痕はない。復元口径は順に8.8、8.6cmを測る。292は土師質土器の羽釜である。内面には刷毛目調整を行う。293は軒丸瓦である。内区の大半は欠失するが、界線に接して巴文の尾端部が認められる。他に龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、白磁皿類等の細片が出土しており、13世紀後半の遺構と考えられる。

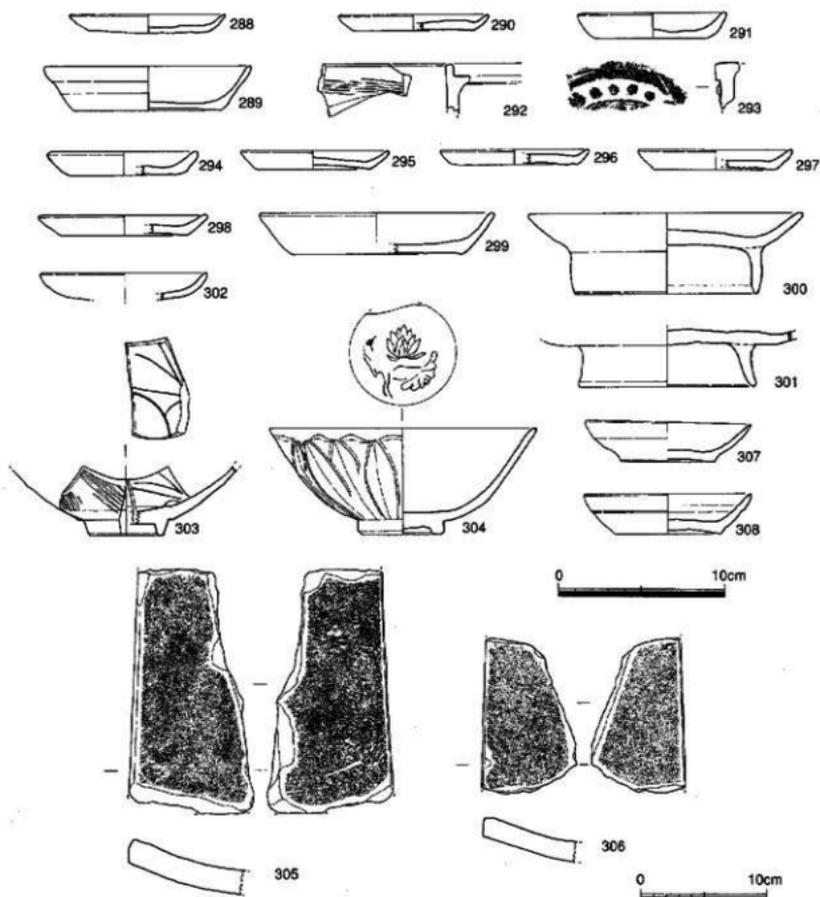
**SK037** (第36図) D-2区に位置し、SD038を切る。北側壁面は撓乱により削平される。現況では一辺1.4~1.5mを測る不整な方形プランを呈し、深さは0.6mである。覆土は淡褐色砂質土である。

出土遺物(第37図294~303) 294~298は回転糸切り底の土師器小皿である。294・295には板状圧痕が認められる。復元口径は8.6~10.0cmで、平均は9.1cmを測る。なお、295は完形品である。299~301は坏である。299の外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。復元口径は14.0cmである。300・301は高台付の坏cである。外底部の切り離し法はナデおよび器面風化により不明である。300の復元口径は16.0cmを測る。302は瓦器皿である。外底部にはナデを施す。303は同安窯系青磁碗Ⅲ類で、体部外面には片彫りによる沈線を有する。内面にはヘラ状工具による施文が認められる。他に中国陶器、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、瓦等が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半の土坑と考えられる。

**SK039** (第36図) 調査区の北西端のA-1区で検出した隅丸長方形プランの小形土坑である。長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.35mを測る。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第37図304) 南側の覆土中位において出土した龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・c類である。体部外面に鎮蓮弁文、見込みにには印花文を有する。淡緑色の釉が高台際までかけられる。他に土師器小皿、白磁の細片が少量出土した。13世紀前半から中頃の遺構に位置付けられる。

**SK042** (第36図) E-1区に位置する小形の円形土坑である。径0.8m、深さ0.3mを測る。底面



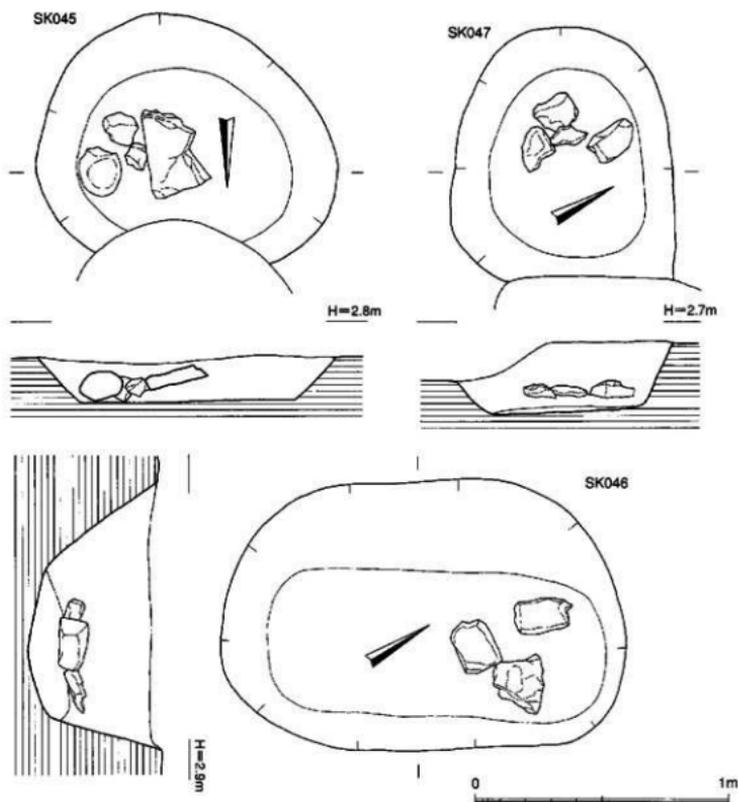
第37図 SK035・036・037・039・042・043 出土遺物実測図 (305・306は1/4、他は1/3)

からやや浮いた同一レベル上で、角礫1個および平瓦片3点が確認できた。

出土遺物(第37図305・306) 共に上述した平瓦である。側面はヘラ削り、両面にはヘラナデ調整を加える。土師質の焼成で、煙しは施されない。他には土師器の細片が少量出土したのみである。15～16世紀の所産であろうと推測される。

SK043(第36図) D-1区で検出した土坑である。径1.0～1.1mを測る円形プランを呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。上層では角礫3個を検出した。

出土遺物(第37図307・308) 共に回転糸切り底の土師器坏で、板状圧痕はない。内底部までヨ



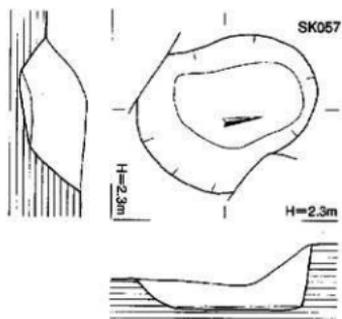
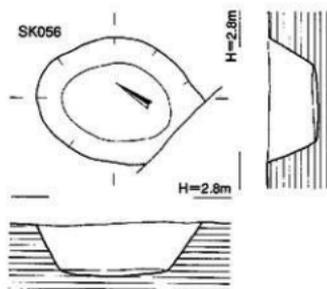
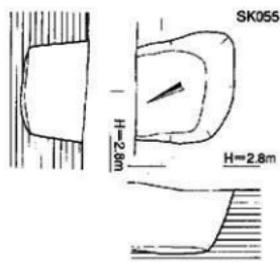
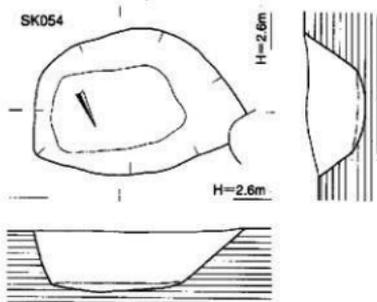
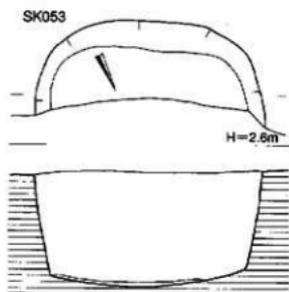
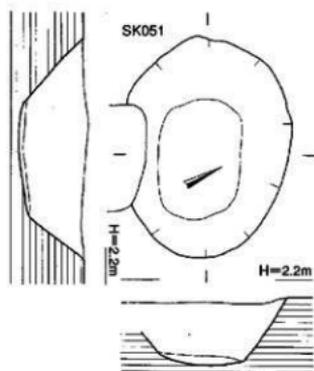
第38図 SK045・046・047 実測図 (1/20)

コナデ調整である。順に口径は9.9、10.0cm、器高は2.5、2.4cmを測る。他に能泉窯系青磁Ⅳ類の細片が出土している。これらの出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

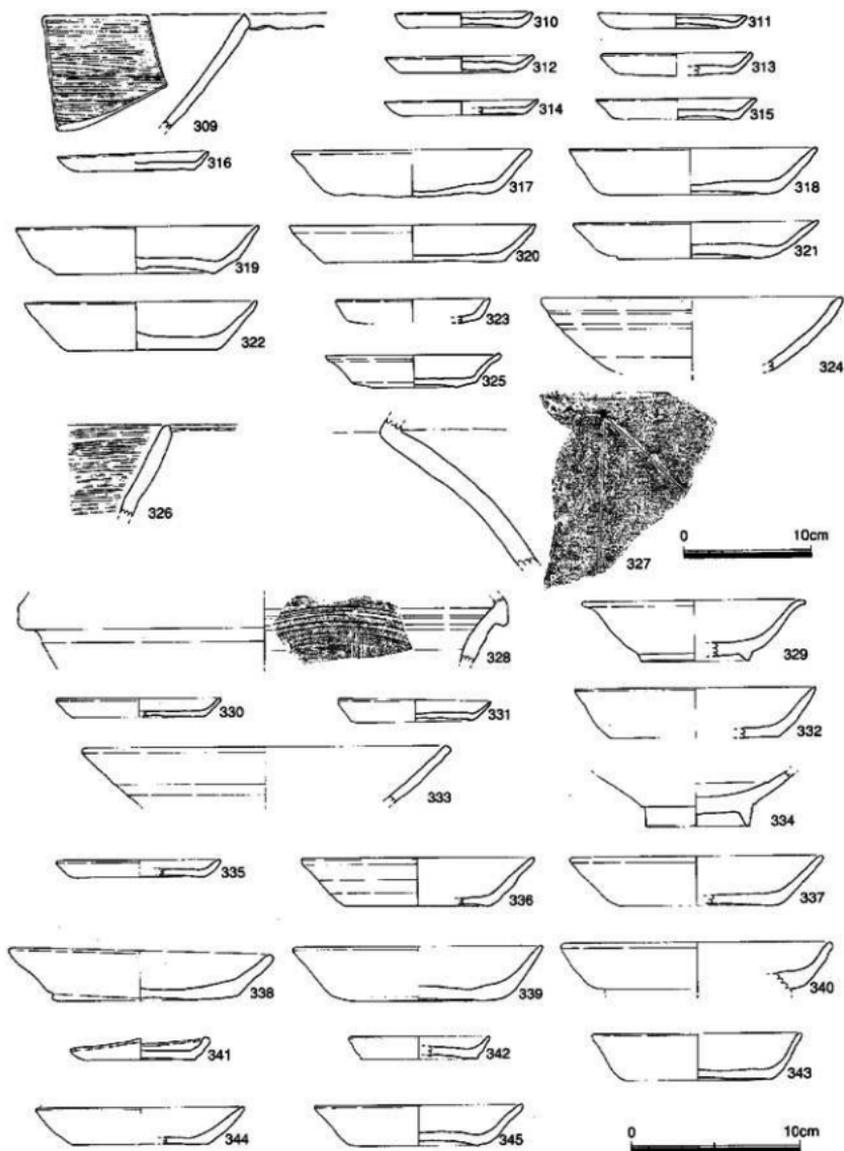
**SK045** (第38図) D-1区に位置する。北側を別遺構に切られるが、径1.2mの円形プランをなすものと考えられる。深さは0.2mで、東側には角礫4個を設置する。出土遺物には土師器等が少量あるが、いずれも細片である。

**SK046** (第38図) D-1区、SK045の内約4mで確認した。長さ1.6m、幅1.1mを測る隅丸長方形プランの土坑である。断面は船底形を呈し、深さは0.5mを測る。北東側の底面上において一辺約10~20cmの角礫3個を検出した。

出土遺物(第40図309) 土師質土器の鍋で、小振りな玉縁状の口縁部を呈する。内面は横方向の刷毛目、外面には煤が付着する。他に回転糸切り底の土師器、青磁等の細片が少量出土した。15~16世紀代の遺構と考えられよう。



第39图 SK051 · 053 · 054 · 055 · 056 · 057 实测图 (1/40)



第40図 SK046・051・053・054・055・056・057 出土遺物実測図 (327・328は1/4、他は1/3)

**SK047** (第38図) C-1区に位置する。東側を別遺構に切られるが、0.9~1.1mを測る楕円形プランの土坑であると考えられる。東側底面のやや浮いた位置に角礫4個がほぼ同一レベル上に据え置かれる。土師器、瓦等の細片が出土したが、いずれも細片である。

**SK051** (第39図) B-1区で確認した楕円形プランの土坑で、南側を近世土坑に切られる。長径1.8m、短径約1.3m、深さ0.5mを測る。覆土は粘性のある黒灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第40図310~325) 310~322は回転糸切り底の土師器で、遺存良好な個体が多い。310~316は小皿で、316のみに板状圧痕が認められる。復元口径は8.2~9.5cmで、平均は8.9cmを測る。317~322は坏で、317・318を除いて板状圧痕を有する。復元口径は13.7~14.6cmで、平均は14.3cmを測る。323・324は瓦器である。323は皿でヨコナデを施す。324は碗で、内面は平滑にヘラ研磨を行う。325は同安窯系青磁皿I-2類で、外底部には不鮮明ながら墨書が残る。釉は明緑灰色を呈する。以上の出土遺物から13世紀前半の土坑と考えられる。

**SK053** (第39図) B-1区の調査区外に位置し、北側は調査区外に延びる。現況で、幅1.9m、深さ0.9mを測り、壁面の立ち上がりは急である。覆土は褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第40図326~327) 326は土師質の鍋である。口縁部と体部の境界内面には稜を有する。内面には横方向の刷毛目を施す。327は備前焼大甕の胴部片で、外面にはヘラ状工具による記号が認められる。内面は板状工具によりヨコナデ調整を行う。他に青磁、瓦の細片が出土した。これらの遺物から16世紀代の遺構であると推測される。

**SK054** (第39図) C-1区で検出した不整隅丸長方形の土坑である。長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(第40図328~329) 328は備前焼播鉢である。内面には7条の播目が認められる。口縁端部は欠失する。329は端反りの白磁皿である。青味がかかった釉が施されるが、曇りおよび外底部は露胎で、橙色に発色する。他に回転糸切り底の土師器、瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から16世紀代の遺構に位置付けられる。

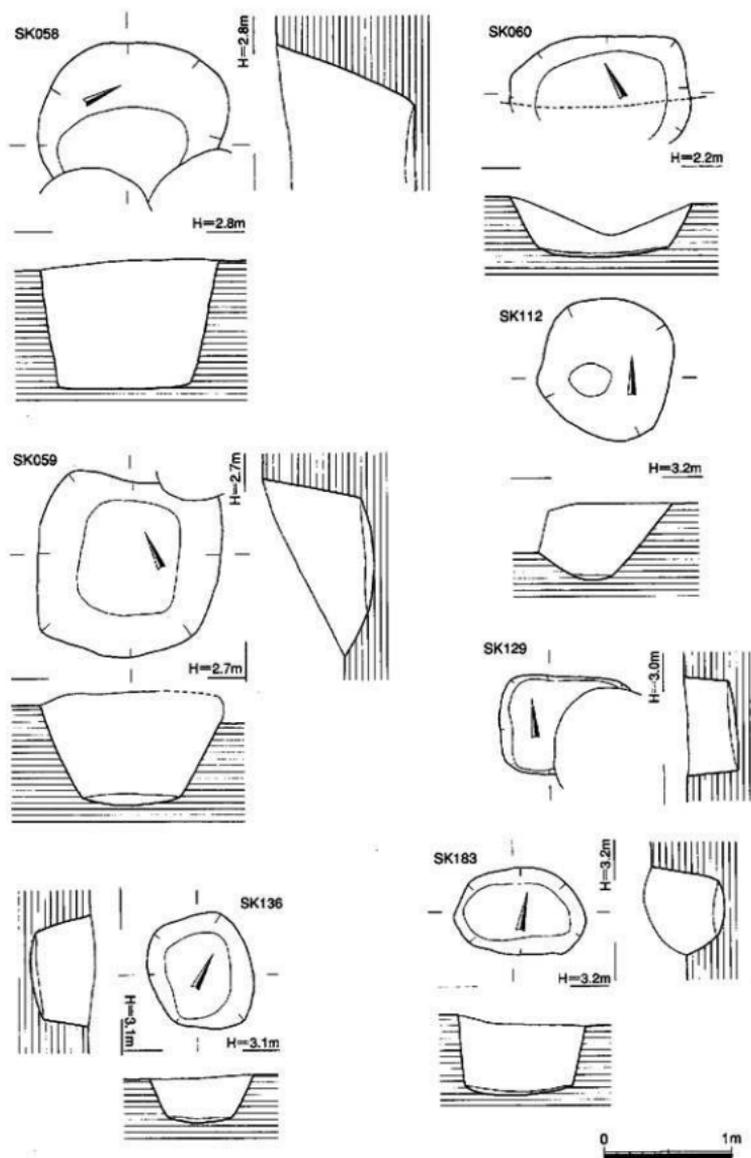
**SK055** (第39図) C-1区の調査区外で確認した。北側が調査区外に位置するため、全容は不明であるが、現況で幅0.9m、深さ0.5mを測る。覆土は黒褐色砂質土である。

出土遺物(第40図330~334) 330~332は回転糸切り底の土師器である。330・331は小皿で、板状圧痕を有する。復元口径は順に9.4、8.8cmを測る。332は復元口径14.0cmを測る坏で、板状圧痕はない。333は瓦質土器の鉢である。内外面共にヨコナデを施す。334は白磁碗V類である。見込みには段状の沈線が巡る。以上の出土遺物から12世紀後半から13世紀初頭の遺構と考えられる。

**SK056** (第39図) C-1区に位置し、南側はSD048に切られる土坑である。楕円形の平面プランで、長径は推定で1.4m、短径は1.0mを測る。深さは0.45mで、断面は逆台形を呈する。

出土遺物(第40図335~340) 335~339は回転糸切り底の土師器である。335は復元口径9.4cmを測る小皿で、板状圧痕はない。336~339は坏で、復元口径13.6~15.2cmを測る。336を除いて板状圧痕は認められない。340は高台付の坏cであるが、高台は基部のみが僅かに遺存する。復元口径は15.6cmである。他に須恵質土器、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の遺構に位置付けられる。

**SK057** (第39図) C-1区の調査区コーナーに位置する。SD048に切られるため、遺構の大半はその溝底で確認した。また、北東端をSK059にも切られる。現況では楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.0m、深さ0.5mを測る。覆土はやや粘性のある灰茶褐色砂質土を主体とする。



第41图 SK058·059·060·112·129·136·183 夹测图 (1/40)

出土遺物（第40図341～345） いずれも回転糸切り底の土師器である。341・342は小皿で、板状圧痕を有する。口径は順に8.1、8.4cmを測る。343～345は坏で、343のみ板状圧痕が認められる。復元口径はいずれも12.4cmを測る。他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類、同安窯系青磁、瓦等の細片が出土している。これらの遺物から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK058（第41図） D-1区で検出した。東側を攪乱および別遺構に切られるため、遺構の形態は不明であるが、径1.5m前後の円形もしくは楕円形のプランを呈するものと推測される。深さは約1.0mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第42図346～348） いずれも土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、346には板状圧痕が認められる。復元口径は8.8～9.2cmを測る。他に白磁、瓦の細片が少量出土した。土師器の法量から12世紀後半から13世紀初頭の上坑と考えられる。

SK059（第41図） C・D-1区に位置する方形プランの土坑で、一辺は約1.4mを測る。SK057同様にSD048に切られるため、その溝内で確認した。なお、SK057を切っている。深さは0.9mを測り、底面は平坦である。覆土は黒褐色砂質土を呈する。

出土遺物（第42図349） 白磁皿Ⅲ-1類である。体部下半で屈曲し、口縁部は開く。灰オリープ色の釉を高台際までかけるが、見込みの釉は輪状にカキ取る。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器、白磁碗Ⅴ類等の細片が出土した。SK057との前後関係から13世紀中頃以降の所産であろう。

SK060（第41図） D-1・2区に位置し、SK057・059に南接する。両者同様にSD048に切られる。また、南半部の壁面はSD049に切れ、遺存しない。現況では長さ1.4m、深さ0.5mを測る。覆土は淡灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第42図350～355） 350～353は回転糸切り底の土師器である。350・351は小皿で、復元口径は順に9.2、8.4cmである。351には板状圧痕が認められる。352・353は坏で、板状圧痕はない。復元口径は14.8、11.6cmを測る。354は土師質土器の鍋で、口縁部は逆「L」字状を呈する。口縁部上面および体部下半の内外面には刷毛目を施す。他はナデもしくはヨコナデ調整を行う。外底部の一部には煤が付着する。355は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類で、蓮弁文の鎚は鈍い。他に中国陶器、滑石製石鍋等の細片が出土した。以上の遺物から13世紀前半から中頃に属する土坑と考えられる。

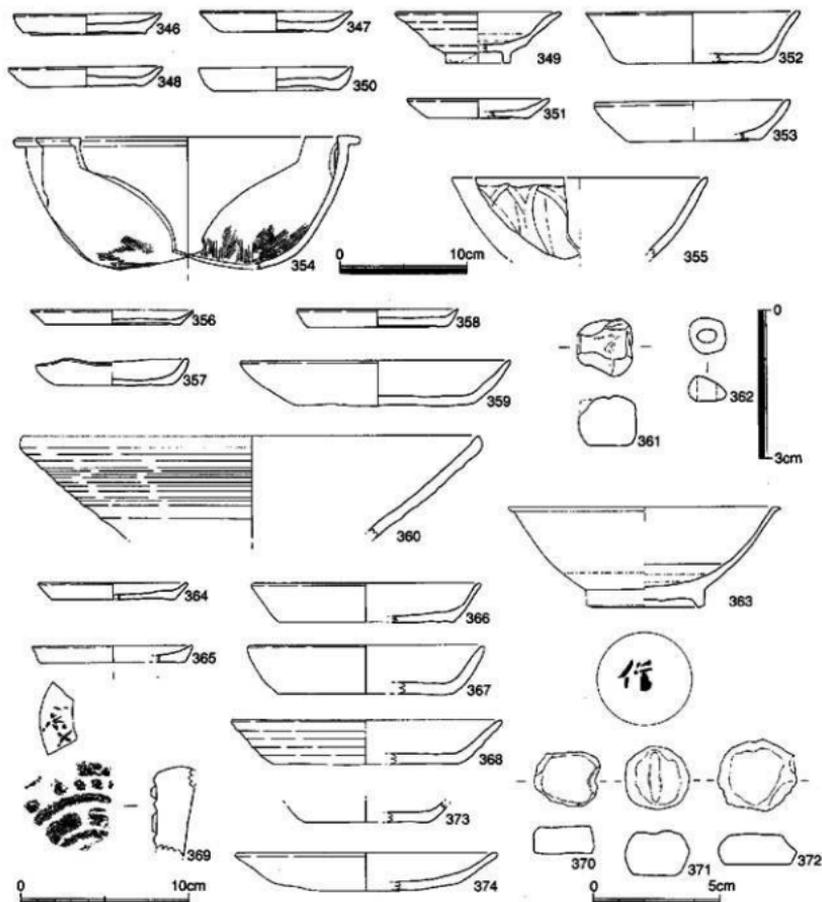
SK112（第41図） D-6区で検出した径約1.1mの円形プランの上坑である。壁面は鉢状にすぼまり、深さは0.6mを測る。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第42図356～361） 356～358は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、358を除いて板状圧痕を有する。復元口径は9.0～9.6cmを測る。357の口縁部は焼き垂む。359は口径16.0cmの上師器坏で、外底部には回転糸切り痕および板状圧痕が認められる。360は東播系須恵土器の鉢である。口径は27.0cmに復元でき、内外面共にヨコナデを施す。361は滑石製の未製品である。部分的に欠損するが、立方体を意識した成形を行っている。他に白磁碗Ⅳ類、同安窯系青磁碗等の細片が出土している。以上の出土遺物からこの土坑は12世紀後半の所産と考えられる。

SK129（第41図） D-5区に位置する小形の土坑で、東側を別遺構に切られる。現況で、幅0.8m、深さ0.4mを測る。覆土はやや粘性のある黒灰褐色砂質土である。

出土遺物（第42図363） 底面上で出土した白磁碗Ⅲ-1類である。口縁端部は短く外反し、上面を水平にする。外底部には墨書で「僧」が記される。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半の遺構に比定される。

SK136（第41図） D-5区で確認した隅丸方形プランの小形土坑である。一辺約0.8～0.9m、深さ0.35mを測る。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とする。

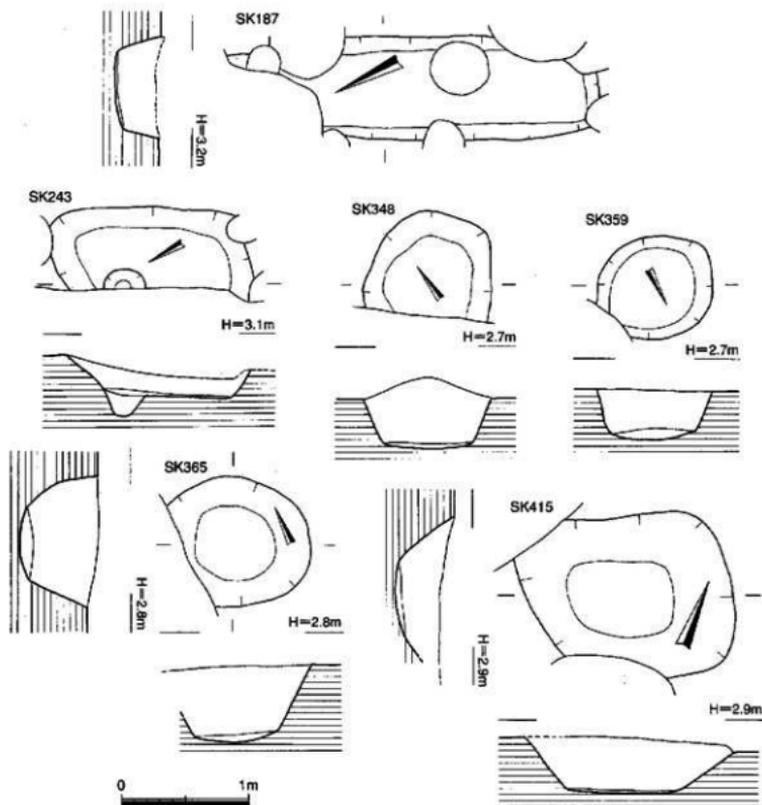


第42図 SK058・059・060・112・129・136・183・187 出土遺物実測図  
 (362は1/1、361・370～372は1/2、354・369は1/4、他は1/3)

出土遺物(第42図362) 径0.75cmを測るガラス製の小玉である。光沢のある灰白色を呈する。他に土師器小皿、瓦器等の細片が出土している。12世紀から13世紀代に属すると推定される。

SK183(第41図) E-4区で検出した。不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.6mを測る。壁面は直立気味に立ち上がる。

出土遺物(第42図364～372) 364～368は回転糸切り底の土師器で、364・368には板状圧痕が認められる。364・365は小皿で、復元口径は順に8.8、9.4cmである。365の外底部には墨書が記されるが、文字内容は不明である。366～368は坏である。復元口径は13.6～16.0cmを測る。369は土師質の



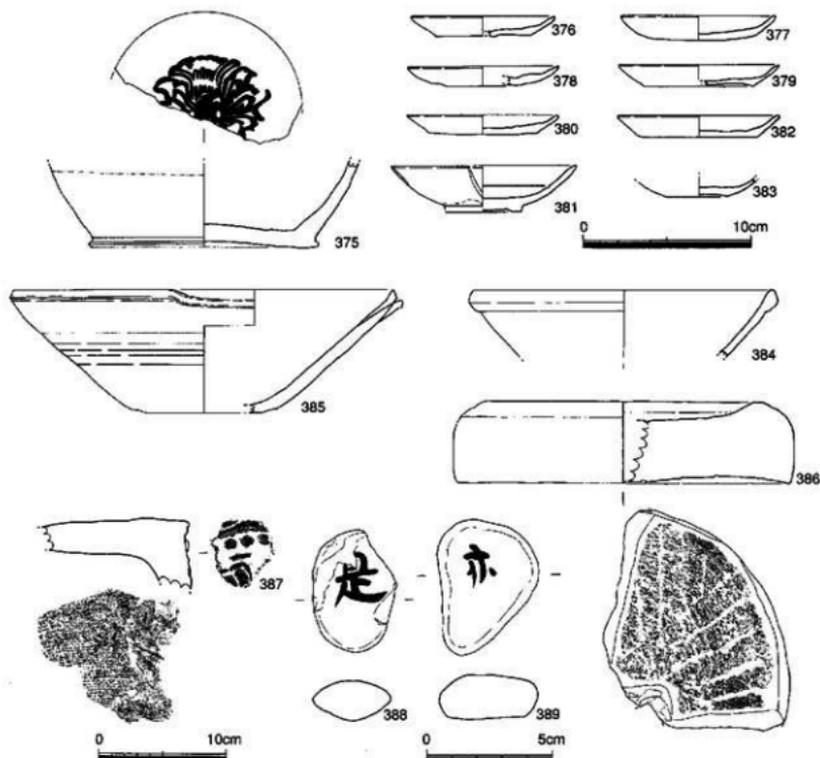
第43図 SK187・243・348・359・365・415 実測図 (1/40)

軒丸瓦片である。内区の界線間に方形の文様を配する。370～372は平瓦を加工した瓦玉である。370は方形状の整形を意識したものと考えられる。他に土師器碗、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土している。12世紀後半から13世紀代の遺構であろう。

**SK187** (第43図) D・E-4区に位置し、SK022に北東部を切られる。また、攪乱や他遺構にも切られるため、遺構の遺存は不良であるが、幅0.85m、長さは推定で約2.7mの長方形プランの土坑と考えられる。深さは0.35mで、断面は逆台形を呈する。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物** (第42図373・374) 373は土師器小皿で、口縁部を欠失する。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。374は回転ヘラ切り底の土師器碗で、板状圧痕を有する。復元口径は15.6cmを測る。他に瓦の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

**SK243** (第43図) E-4区の調査区際で確認した土坑で、東側は調査区外に位置する。現況で



第44図 SK243・348・359・365・415 出土遺物実測図 (388・389は1/2、385～387は1/4、他は1/3)

は、南北長1.6m、深さ0.3mを測る。底面にはビット状の掘り込みを有する。

出土遺物(第44図375) 中国陶器の広州窯系黄釉盤である。見込みには印花文を有する。釉はオリブ色で、体部外面下半および外底部は露胎である。胎土は淡黄橙色で、白色砂粒が混じる。他に回転ヘラ切り底の土師器、白磁の細片が少量出土した。12世紀前半から中頃に属する遺構であろう。

SK348(第43図) C-1区で検出した土坑で、南側をSD048に切られる。東西幅1.0m、深さ0.6mを測る。底面は平用である。

出土遺物(第44図376～381) 376～380は土師器坏である。376～378は回転ヘラ切り底で、378を除いて板状圧痕が認められる。復元口径は8.6～9.2cmを測る。379の外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。復元口径は9.5cmである。380の外底部は器面の風化により切り離し技法は不明である。381は白磁皿Ⅱ-1・a類で、体部内面の中位に段状の沈線が巡る。灰白色の釉が内面および外面の高台際まで施される。以上の出土遺物からこの遺構は12世紀中頃に属する。

SK359(第43図) C-1区で確認した径約0.9mを測る円形プランの小形土坑である。深さは0.4

mで、黒褐色砂質土を主体とする。

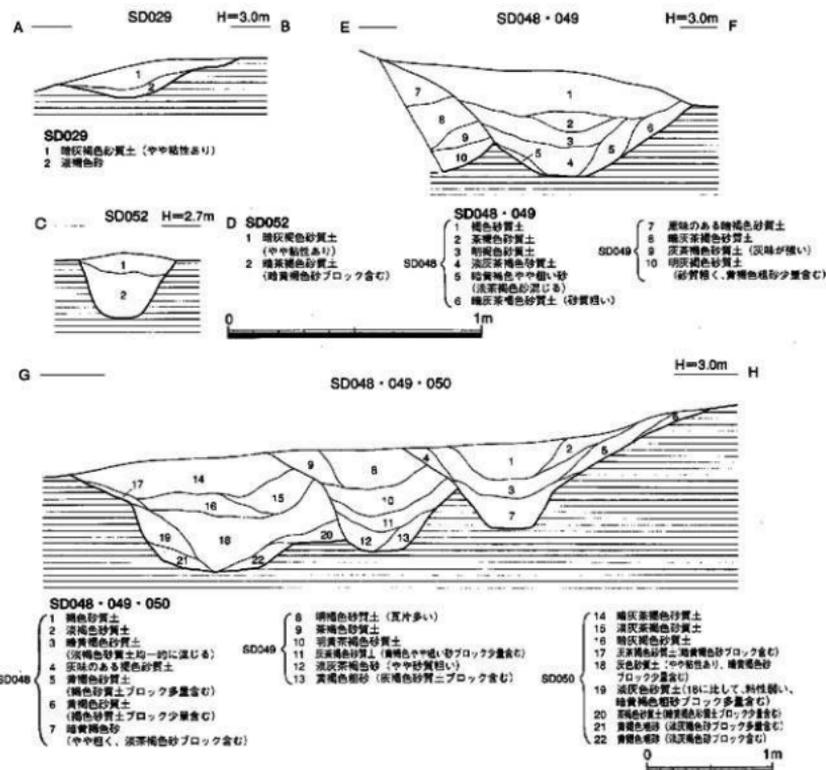
出土遺物(第44図382~385) 382は回転ヘラ切り底の上師器小皿で、板状圧痕を有する。復元口径は9.6cmを測る。383は青白磁の皿で、外底部は露胎である。内外面に貫入が入る。384は白磁碗Ⅳ類で、軸は黄味がかった灰白色を呈する。385は東播系須恵質土器の片口鉢である。復元口径は30.0cmを測る。口縁部には自然釉が付着する。他に回転糸切り底の土師器、瓦器等の細片が出土している。これらの遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK365(第43図) C-1区に位置する円形プランの土坑である。西側を別遺構に切られるが、径は約1mを測るものと推定される。深さは0.6mを測る。

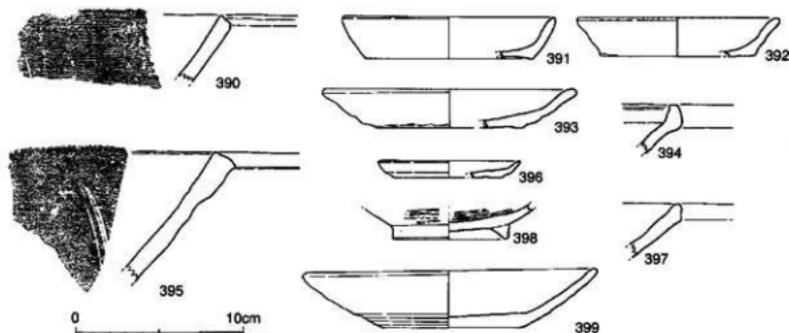
出土遺物(第44図386) 凝灰岩製の白で、復元最大径は26.6cmを測る。幅約0.3cmの擦り口が約1.5cmの幅広の間隔をもって彫り込まれる。皿受けは浅く、方形のこぼれ目が遺存する。上面および側面の一部に被熱の痕跡が認められる。他に回転糸切り底の土師器、白磁の細片が少量出土した。

SK415(第43図) D-1区に位置し、西側壁面の一部をSK046に切られる。長さ1.6m、幅1.3mの隅丸長方形を呈する。深さは0.45mを測る。

出土遺物(第44図387~389) 387は軒丸瓦で、外区には径0.8cmの低い珠文を配し、内区には複弁と思われる蓮花文を有する。丸瓦四面には布目が残る。388-389は河原石にそれぞれ「是」「亦」を



第45図 SD029・048・049・050・052 実測図(SD052は1/20、他は1/40)



第46図 SD025・029・038・385 出土遺物実測図 (1/3)

墨書で記す。他に回転ヘラおよび糸切りの土師器、斜格子目叩きの平瓦等の細片が出土した。12世紀中頃の遺構であろう。

### 3) 溝 (SD)

12世紀中頃から近世に至る溝 9 条を確認した。いずれも現在の周辺地割 (N-60°-W) と類似しており、中世前半期の地割方向が連続と影響していることが看取される。

**SD021** (第 5 図) D・E-5 区に位置する南北方向の溝で、幅、深さ共に約 0.35 m を測り、断面は「U」字形を呈する。南端部が攪乱に切られるため、全長は不明であるが、現況では約 5 m が遺存する。土師器、瓦器、白磁が少量出土したが、いずれも細片である。

**SD025** (第 5 図) D-4 区で検出した南北方向の溝で、幅約 0.4 m、深さは 0.1~0.2 m を測る。南端部は SD021 北端部の西約 1 m に位置する。溝の中央は攪乱により断絶するが、その北側では延伸部分が確認できた。更に北側は攪乱により消失するため、全長は不明であるが、現況での長さから 8 m 以上と推定される。

**出土遺物** (第 46 図 390) 土師質土器の播鉢片で、播目の端部 1 条が遺存する。外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。他に土師器、白磁等の細片が少量出土した。

**SD029** (第 5・45 図) D・E-2・3 区で確認した東西方向の溝で、SE270、SK035 を切る。北東部は攪乱により削平される。また、両端部共に調査区外に延びるため、全長は不明であるが、現存長は約 12 m を測る。中央部では幅約 1.4 m、深さ 0.3 m を測り、南側には平坦面を有する。

**出土遺物** (第 46 図 391~395) 391~393 は回転糸切り底の上師器環である。393 のみに板状圧痕が認められる。復元口径は順に 12.4、11.8、14.6 cm を測る。394 は東播系須恵質土器の鉢で、口縁部は「く」字状を呈する。395 は瓦質土器の播鉢である。横方向の刷毛目調整後に、播目を入れる。他に中国陶器、白磁等の細片が出土した。これらから 13 世紀後半の溝と考えられる。

**SD038** (第 5 図) C・D-2 区に位置する東西方向の溝で、SK037 に切られる。幅 0.3~0.5 m、深さ 0.1~0.2 m を測り、断面は「U」字形を呈する。覆土は淡黒褐色砂質土である。西側は調査区外に延伸し、東側は攪乱により消失する。現存での長さは約 7 m を測る。

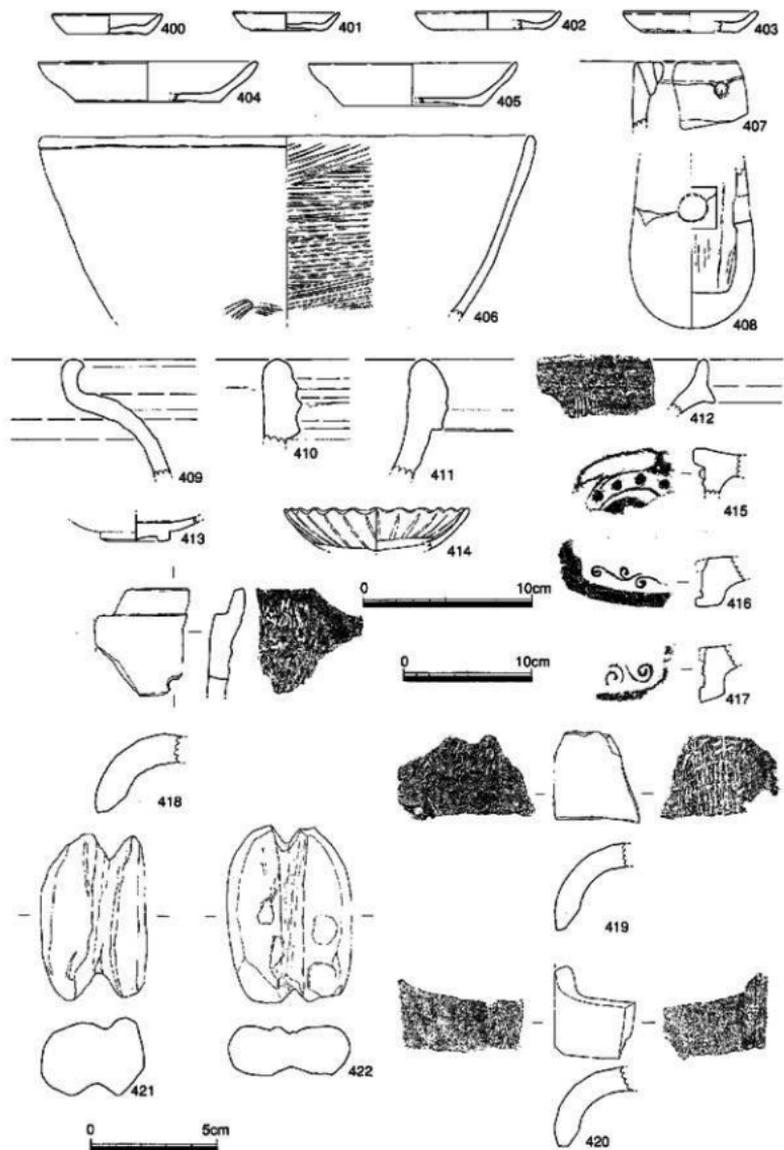
**出土遺物** (第 46 図 396・397) 共に細片である。396 は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕はない。復元口径は 8.2 cm を測る。397 は東播系須恵質土器の口縁部片である。他に細片の中国陶器、

瓦等が出上している。SK037との前後関係から12世紀後半に下限を設定し得る。

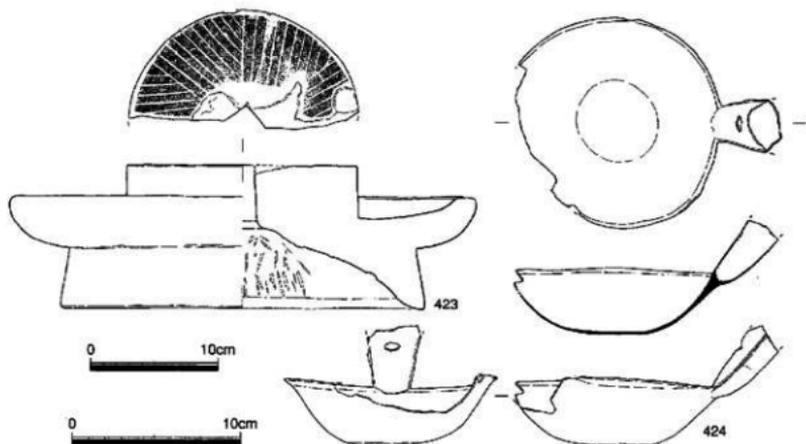
SD048・049・050 (第5・45図) A-E-1・2区を東西方向に延びる中世後半期の溝である。検出時には1条の溝(SD030)として掘削を進めたが、調査途中で3条の重複であることが判明した。また、上層観察によって3者の前後関係を把握した(第45図G-H)。これによって当初最も南側に掘削された溝(SD050)は埋没後にその北側に掘り直され(SD049)、更にその埋没後、再度北側に掘り替えられている(SD048)ことが判明した(SD050→049→048)。断面はいずれも逆台形状を呈し、深さはSD050が約1.0m、SD049が0.8m、SD048が0.65mと新しくなるにつれて浅く掘削されている。最も新しいSD048の幅は2.5mを測る。いずれも東西両端部は調査区外に延伸するため、全長は不明であるが、SD048は約37mを確認し得た。溝底のレベルは東西での大きな差は認められない。図化および遺物取り上げは、当初の検出面上での識別が不可能であったため、重複が明確に判明する段階まで掘り下げた上で行った。なお、上層から出土した遺物の大半はSD030として登録している。以下に報告する出土遺物は各遺構の帰属が明確な下層資料を主体としたが、明確な時期差を抽出し得る遺物は認められず、15世紀後半から16世紀前半にかけて連続的に掘削された溝と推定される。

SD048出土遺物(第47・48図) 400~405は回転糸切り底の土師器である。400~403は小皿で、いずれも板状圧痕はない。復元口径は6.4~8.4cmを測る。404・405は坏で、復元口径は順に12.8、12.2cmである。共に板状圧痕を有する。406・407は土師質土器の鍋である。407は口縁部を「コ」字状に折り返し、焼成前に上面からの穿孔を行う。406は内面および外面下半に粗い刷毛目を行なう。器面には煤が付着する。408は土師器の飯ダコ壺である。外面は丁寧なナデ、内面にはシボリ痕が残る。体部上位には焼成前に施された外面からの穿孔を有するが、上半は欠失する。409~412は備前焼である。409は壺、410・411は大甕、412は播鉢である。413は白磁皿で、やや粗い白色の胎土に濁った白色の釉が体部下半まで施される。また、見込みの釉は輪状にカキ取る。414は青磁の菊皿で、外面は片形り、内面は線彫りにより花卉を施す。内外面共に貫入が多い。415~420は瓦である。415は軒丸瓦片で、外区の珠文は高く、内区には巴文の尾部が遺存する。煙しを加える。416・417は唐草文を配する軒平瓦で、煙しは施されない。418~420は丸瓦である。いずれも凸面は縄目叩きの後、ナデを加える。凹面には布目が認められ、419には縄紐の痕跡が残る。418には煙しを行なっている。421・422は滑石製の有溝石鏝である。重量は順に76.8、86.4gを測る。423は砂岩製の茶臼下臼である。7分画と推定され、9本の副溝を有する。その擦り目は幅0.15cmで、0.6~0.7cmの間隔で彫り込まれる。芯棒孔は方形を呈し、一辺約2cmを測る。外面は研磨により仕上げられるが、台座の内面にはノミによるハツリ痕が残る。受け皿の径は36.8cmを測る。424は青銅製の杓子である。器壁は薄く、厚さは0.1~0.2cmを測る。皿部は変形によりやや不整な円形を呈し、その径は12.5~13.5cmである。また、端部は鈍く外反する。柄装着袋部には木製柄を固定するために、壺により外面から十字方向に穿孔を行っている。また、袋部の側面には甲張りが遺存する。他の出土遺物として、明代染付の細片や多数の瓦片がある。

SD049出土遺物(第49図) 425・426は回転糸切り底の土師器小皿である。425は板状圧痕がなく、内底部までヨコナデされる。復元口径は順に6.5、7.8cmを測る。427~429は土師質土器である。427は風炉の口縁部片で、口縁下には板木口により列線文を施す。428は鍋で、内外面に刷毛目調整を施し、外面には指による粗いナデを加える。煤が僅かに付着する。復元口径は29.2cmを測る。429は播鉢である。内面は刷毛目、外面はナデ調整を行い、器面に煤の付着が認められる。堅緻な焼成である。430・431は瓦質土器で、430は茶釜、431は鉢である。430の肩部には沈線を配し、印花文



第47図 SD048 出土遺物実測図(1) (421・422は1/2、415~420は1/4、他は1/3)

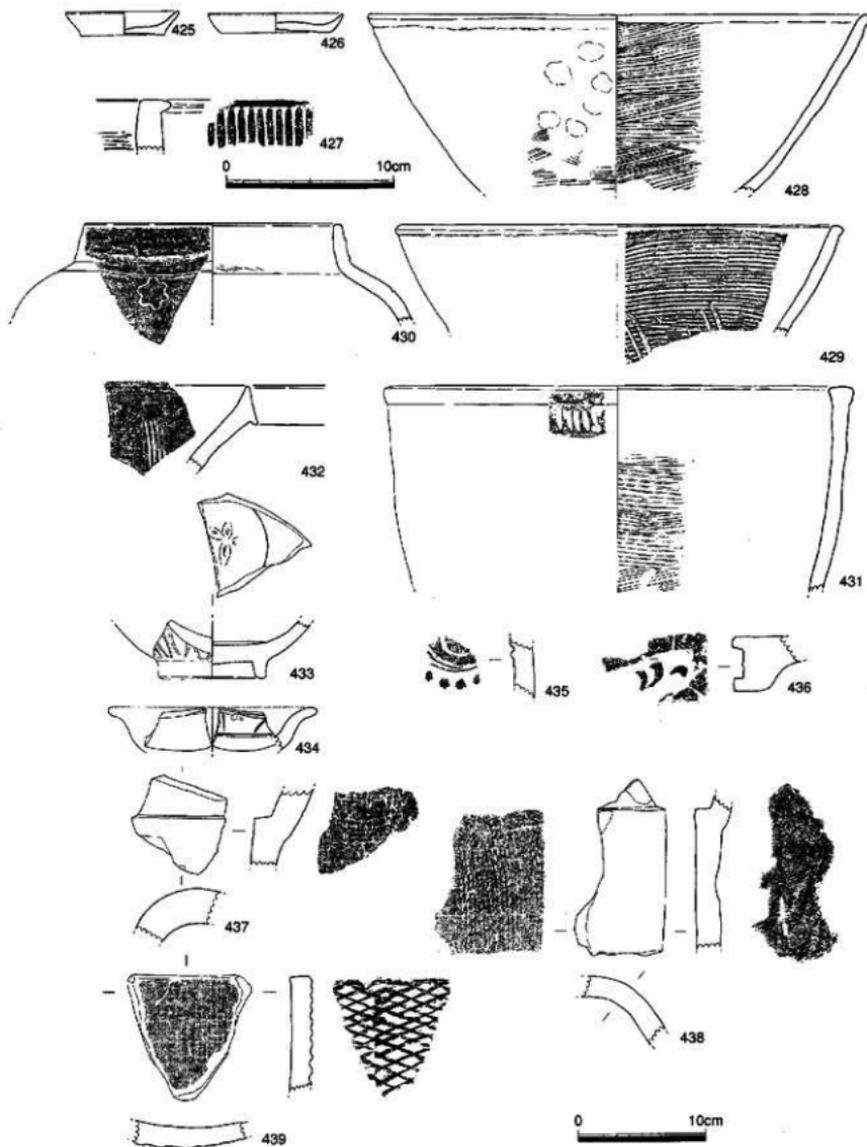


第48図 SD048 出土遺物実測図。(2) (424は1/3、423は1/4)

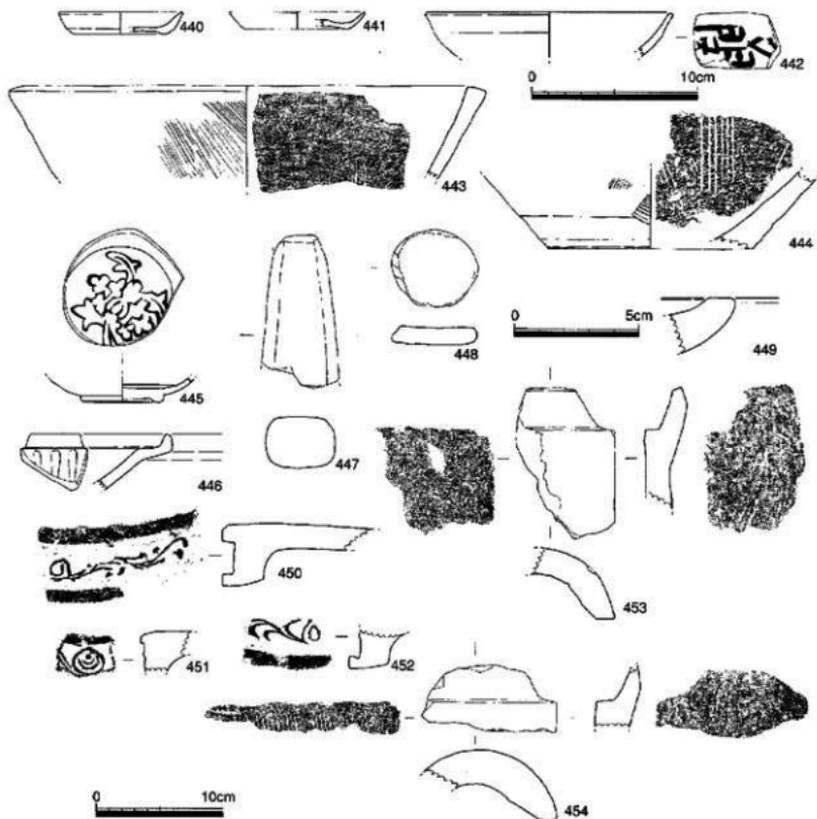
を有する。431は口縁部を肥厚させ、口縁下には5条の短い列線状のスタンプを施す。432は備前焼の播鉢である。433・434は明代の龍泉窯系青磁である。433は碗で、外面には蓮弁文を有する。施釉が厚いため、不鮮明であるが、見込みには沈線および印花文が認められる。淡緑色の釉が全面に施されるが、外底部の釉は輪状にカキ取る。434は稜花皿の細片で、内面には丸彫りによる区画文を有する。外面には気泡が入る。435～439は瓦で、いずれも焼しは施されない。435は軒丸瓦で、内区には巴文の頭部と尾部が部分的に遺存する。436は軒平瓦である。器面の風化が進む。437・438は丸瓦で、438の凸面には縄目叩きを残し、布目が認められる。また、共に凹面には布目が認められ、437には縄紐痕を有する。439は平瓦である。凹面には細かい布目、凸面には斜格子目の叩きを施す。

SD050出土遺物(第50図) 440・441は土師器小皿である。共に回転糸切り底で、板状圧痕はない。復元口径は順に7.2、8.0cmを測る。440は内底部までヨコナデを施す。442は復元口径14.4cmを測る土師器杯である。外面には墨書で「□問□?」が記される。443は土師質土器の播鉢である。内外面共に刷毛目調整を行うが、外面にはナデを加える。444は瓦質土器の播鉢である。刷毛目調整後に揉目を施す。外面にも刷毛目が残るが、ナデを施している。445は白磁皿である。胎土は灰白色で、高台近くまで施釉される。見込みには沈線が巡り、型押しによる花文を有する。内外面共に貫入が多く認められる。446は明代の龍泉窯系青磁の盤である。口縁部は鏝形を呈し、内面には陰刻の蓮弁文を配する。くすんだオリーブ灰色の釉が厚く施される。447は棒状の上製品で、両端部は欠損する。両面は鈍く面取りを行なう。土師質の焼成である。448は土師器の小皿もしくは杯の底部を整形した瓦玉である。回転糸切りの痕跡が残る。449は砂岩製の茶臼下臼の受け皿端部である。450～454は瓦で、いずれも焼しを施さない。450～452は唐草文を配する軒平瓦である。451は中心飾りに丸味のある宝珠形を用いている。453・454は丸瓦である。454の凸面には縄目叩きを残す。また、共に凹面には布目が認められる。

SD052(第5・45図) B-1区に位置する近世の溝である。現況では西端で「L」字形に折れ、南



第49図 SD049 出土遺物実測図 (435・436・437・438は1/4、他は1/3)



第50図 SD050 出土遺物実測図 (448は1/2、450-454は1/4、他は1/3)

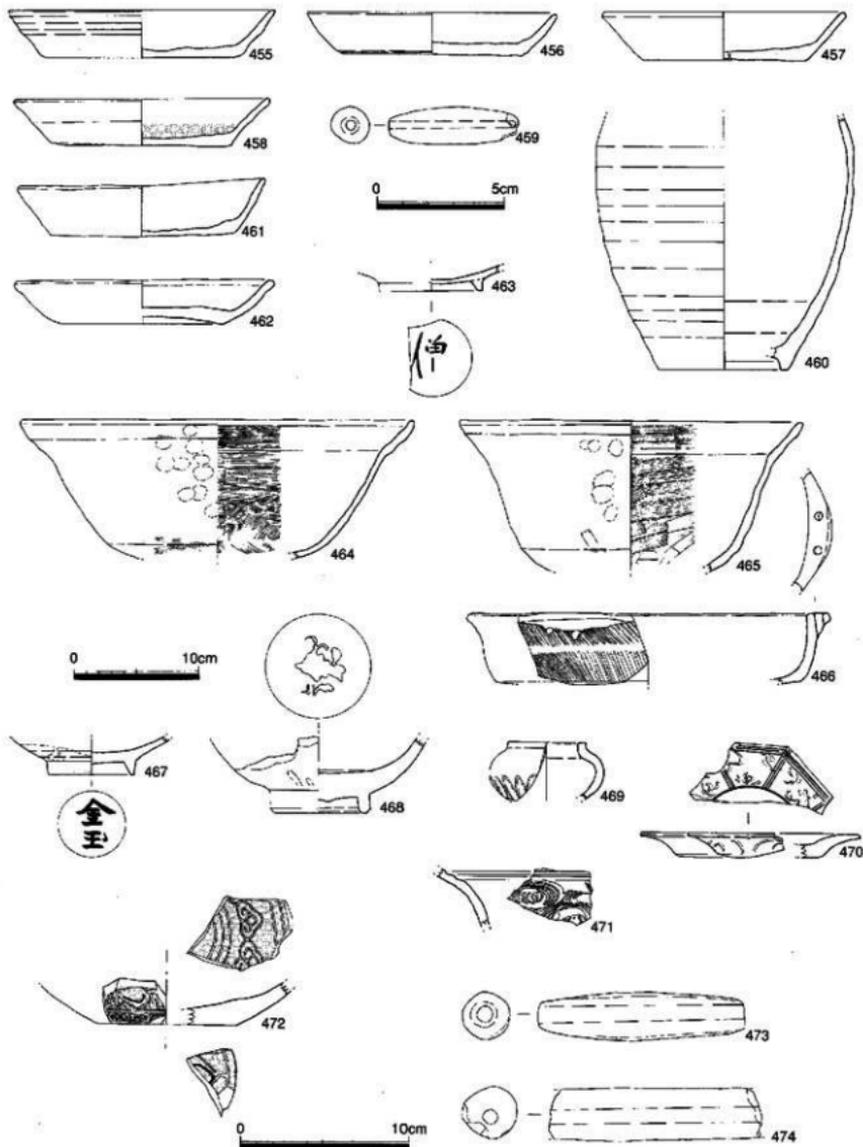
側に延びるが、攪乱によりその延長は不明である。幅0.4~0.6m、深さ0.2~0.3mを測り、断面は「U」字形を呈する。肥前系の陶磁器が少量出土している。

**SD385** (第5図) C・D-1区で確認した東西方向の溝で、SK415に切られる。幅約0.5m、深さ0.2~0.3mを測る。覆土は淡茶褐色砂質土を主体とする。

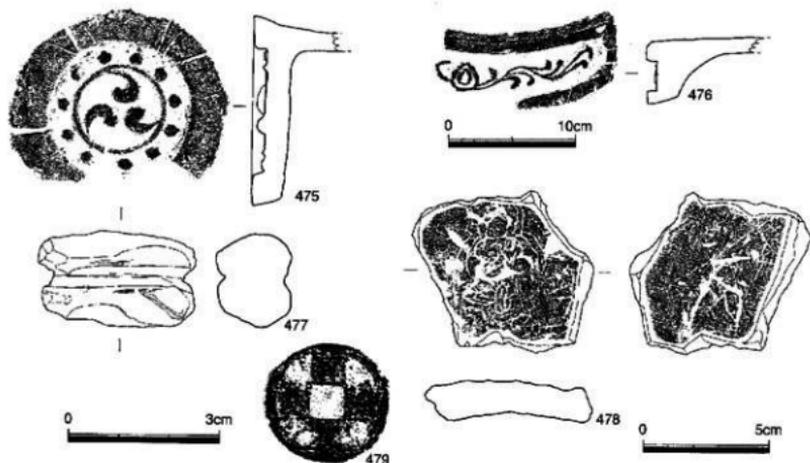
出土遺物(第46図398・399) 398は土師器碗である。外底部は高台貼付の際にヨコナデを加えるが、回転糸切り痕が残る。体部はヘラ研磨を行う。399は土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。口径は16.7cmを測る。他に回転ヘラ切り底の土師器細片が出土しており、12世紀中頃の溝と考えられる。

#### 4) その他の遺物(第51・52図)

ここではピットおよび遺構検出面で出土した遺物の一部をとりまとめて報告する。455~460はピ



第51図 ビット・遺構検出面出土遺物実測図(1) (459・473は1/2、464~466は1/4、他は1/3)



第52図 ビット・遺構検出面出土遺物実測図(2)(479は1/1、477・478は1/2、他は1/4)

ット出土の遺物である。455～457はE-5区のSP148から出土した土師器坏である。455は回転ヘラ切り底、他は回転糸切りである。いずれも板状圧痕を有する。復元口径は順に15.8、14.6、14.0cmを測る。458はE-4区のSP244から出土した土師器坏である。外底部は回転糸切り底で、板状圧痕はない。内面の体部下半以下には赤色顔料を塗布する。復元口径は14.8cmを測る。459はD・E-4区のSP248出土の管状土鍾である。端部を僅かに欠失する。460はE-6区、SP122出土の中国陶器の瓶で、胎土には黒色砂粒が目立つ。全面に淡オリブ褐色の釉がかけられる。外面の下位に目跡が残る。461～479は検出面出土の遺物である。461・462は土師器坏で、461の外底部は回転ヘラ切り、462は回転糸切りで、板状圧痕を有する。463は瓦器碗で、外底部には墨書で「價」が記される。464～466は土師質土器の鍋である。464・465は口縁部と体部の境界で屈曲し、内面には稜を有する。口縁部は僅かに内湾して立ち上がる。内面および外面下半には細かい刷毛目、外面の上半には指オサエが残る。外面には煤の付着が著しい。466は口縁部に鐙を張り付け、焼成前に上面から2個の穿孔を施す。外面には粗い刷毛目、内面はヨコナデを行なう。467は白磁碗Ⅵ型である。体部下半は露胎で、外底部には墨書で「金玉」を記す。468は明代の龍泉窯系青磁碗である。釉は髹付きを越えて、高台内面途中まで施される。見込みには沈線が巡り、印花文を有する。また、外面には不鮮明ながら、片彫りによる短い縦線が2本単位で、3箇所認められる。469は龍泉窯系青磁の小壺で、外面には陰刻による蓮弁文を有する。口縁端部の釉は施釉後に削り取る。470は青磁の八角皿である。内外面に片彫りおよび線彫りにより施文が行われる。471は青白磁の梅瓶の胴部片である。472は李朝粉青沙器で、象嵌が施される。壺であろう。473・474は管状土鍾である。474はヘラナデにより鈍く面取りされる。475は軒丸瓦で、外縁は幅広である。内区には小振りな巴文を配する。476は軒平瓦で、宝珠形の中心飾りから唐草文を派生させる。478は滑石製石鍋片を再利用したもので、内外面に線刻が施され、外面には如来像を描く。479は唐代の銅銭「開元通寶」(初鑄年:621年)である。両面共に錆化がすすむ。

### 3. 結語

今回の調査で確認した遺構を5期に大別し、その分布状況や時期的な変遷についてまとめを行いたい。本文中で記述した個別の遺構時期および以下に用いる時期区分は山本信夫氏の土師器および輸入磁器の編年観<sup>1)</sup>に拠っている。土師器法量変遷を基軸として、土師器の外底部の切り離しに回転ヘラ切りおよび糸切りの双方が認められ、白磁の出土頻度が高い時期をⅠ期(12世紀中頃)、続いて回転糸切り底のみとなり、龍泉窯系青磁Ⅰ類(Ⅰ-5類を除く)および同安窯系青磁が主体となるⅡ期(12世紀後半)、龍泉窯系青磁Ⅰ-5類が主体を占め、龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁Ⅳ類を含まないⅢ期(13世紀前半から中頃)、前述の龍泉窯系青磁Ⅲ類、白磁Ⅳ類が主体となるⅣ期(13世紀後半から14世紀前半)とする。また、14世紀後半から16世紀の陶磁器組成や土師器編年の細分化は途上にあるため、明代青磁や備前焼(Ⅳ・Ⅴ期)、瓦質土器の出土遺構をⅤ期(15~16世紀)として大きくまとめた。なお、今回の調査ではⅠ期以前の回転ヘラ切りの土師器および白磁のみで組成される11世紀後半から12世紀前半の遺構はSK243に可能性を指摘し得る程度で、皆無に等しい。

Ⅰ期では調査区南端部を主体として、井戸(SE005・009・013等)が掘削されるが、SE044・270、SK348等の分布から北側にも遺構の広がりが認められ、該地における広範囲の集落化が認められる。また、以後のⅡ期~Ⅳ期にも共通するが、調査区内では掘立柱建物を構成する柱穴群のまとまりがなく、調査区南半部の井戸の検出状況から、その東西いずれかに建物群が展開するものと推測される。

Ⅱ期においてもⅠ期の南端部の井戸に重複して、SE006・010が分布し、調査区南側の3・4区付近にもSE024・026やSK022・023の小規模な廃棄土坑が認められる。また、北側にもSK037・056等が分布する。Ⅰ期と類似した生活遺構の分布を呈していることから、該地での集落経営が継続していることが看取される。

Ⅲ期でも調査区南半部にSE004・007・020等がⅠ・Ⅱ期の井戸に重複して築かれる。また、これらの遺構群から距離を置いてSE041、SK039・051・057・060等が北側に分布するが、前代の集落域とに大差はないものと推定される。

Ⅳ期の遺構は南側に集約化(縮小化)される傾向にある。前代同様に南端部にSE001・003・018の井戸が掘削されるものの、遺構分布はD・E-2・3区のSD029を北限としている。なお、その南側にはSK028・031・036等の土坑が分布している。なお、以後のⅤ期には井戸に代表される生活遺構が認められず、Ⅳ期は該地における集落の解体期に相当しよう。

Ⅴ期の遺構は調査区北側に偏在して分布する。SD048・049・050を南限とし、その北側に底面に礎を配置したSK042・043・046等他の土坑が認められる。この3条の溝は15世紀後半から16世紀前半代に連続的に掘り直された空堀状の遺構で、その方位はN-60°-Wにとり、現在の箱崎地区の地割方向に類似する。また、その規模から建物の区画に用いられたと推定され、その建物は出土遺物から瓦葺きであった可能性が高い。時代は近世に下るが、該地には「筑前国続風土記附録」所載の箱崎八幡宮内によると同宮南門南側の道路を隔てて寺院が描かれ、また、その東西には堂や坊が付設されている。絵図によると今回の調査区は寺城西側に該当するが、この該期の遺構群をこれらに関連させることは絵図よりの時間的隔絶から推測の域を出ないため、今後の周辺調査を持って検討を加える必要がある。また、上述した礎配置の上坑は柱穴根石とも考えられるが、建物復元には至っていない。なお、第2次調査では東側の坊と推定される建物地業遺構が検出されている。

以上の遺構変遷から該地では12世紀中頃に集落が形成され、14世紀前半をもってその機能を終了させる。15世紀以降は箱崎宮を中核として建立された寺域に取り込まれた可能性が高い。

#### 註

- 1) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真福社1995年  
山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』1990年

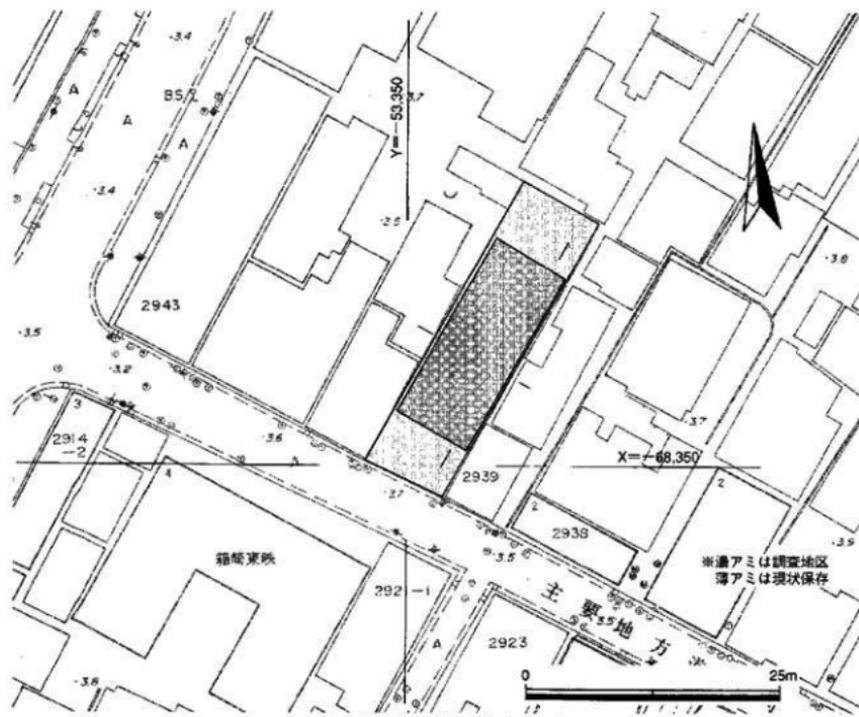
## IV. 第19次調査の記録

### 1. 調査の概要

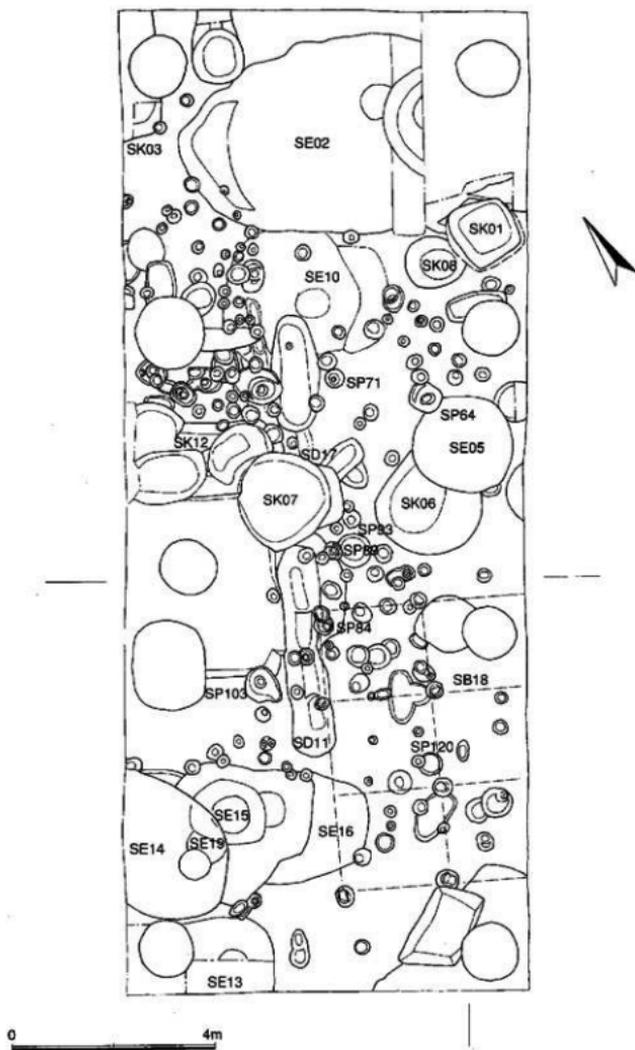
箱崎遺跡群は博多湾岸に形成された南北に延びる砂丘上に立地する。この砂丘は博多遺跡群がのる砂丘とも一連の砂丘であり、砂丘鞍部等によって各遺跡群の境界が引かれているものと考えられる。箱崎遺跡群は923年創建の管崎宮をほぼ中心として南北1000m、東西500mの範囲に展開する遺跡群である。現状の標高は3.5～4.5mであるが、砂丘の旧地形についてはII章を参照していただきたい。今回の対象地は砂丘の西側斜面北よりに位置し、推定される遺跡の西端部分に近い位置にあたる。

対象地近辺は古い地割に沿った町屋が残るところで、各区画は道路に面して奥に細長い区画を形成している。対象地もこれに沿うもので間口8.5m、奥行き30.4mの区画である。調査対象範囲は区画内の東寄り部分である。なお調査前の現況標高は3.5mである。調査に先行して矢板工事及び基礎杭の打設工事を行なった。この後重機により表土の除去・搬出を行い、遺構面である黄白色の風成砂上面を露出させた。なお西側半分は遺構面上層に堆積する褐色砂で掘り下げを止め、人力により約20cm程掘り下げを行い、遺構面を露出させた。遺構面は標高2.1mの黄白色砂であるが、数10cm下位には粗砂がバンド状に認められるやや不安定な状況である。また調査範囲内での遺構面の傾斜は見られなかった。検出遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ピットである。出土遺物からおおよそ12世紀後半以降から14世紀代までの遺構が主体となる。

なお遺構番号は01からの通し番号とし（欠番あり）、遺構略号を頭に付けて呼称する事とする。



第53図 調査区位置図 (1/500)



第54网 調査区全体図 (1/100)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 掘立柱建物 (SB)

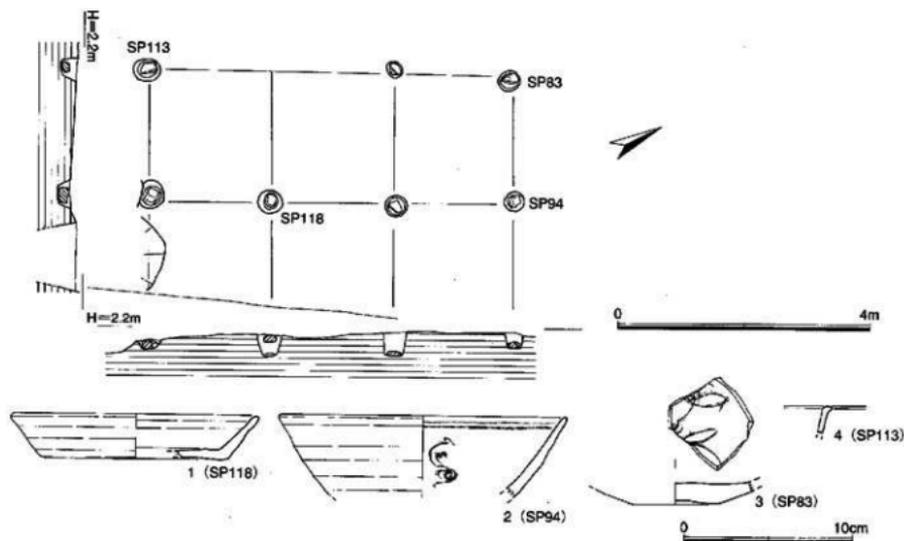
**SB18** (第55図) 調査区北側で検出する。ピット内に根石が残っており、大半は底面直上に据えられている。根石には比較的平たい自然石を用いている。遺構の配置から規模についてはさらに大きくなる可能性がある。現状では梁行1間(柱間2m)、桁行3間5.7m(柱間1.9m)が確認されている。主軸方位はN-28°-Eで、現況の区画からは6°西に振れている。SD11と主軸方位を同じくするがこれを切っている。出土遺物及び切り合い関係から12世紀後半～13世紀前半代に位置付けられる。

出土遺物(第55図) 1は土師器環である。口径14.5cm程度に復元でき、外底面は糸切りである。2・3は龍泉窯系の青磁である。2はI-4類の碗で内面に飛雲文を片彫りする。3はI-1a類の皿で見込み部分にヘラによる片彫りの花文を有する。また外底面は露胎となる。4は口縁部を外反させる白磁破片である。

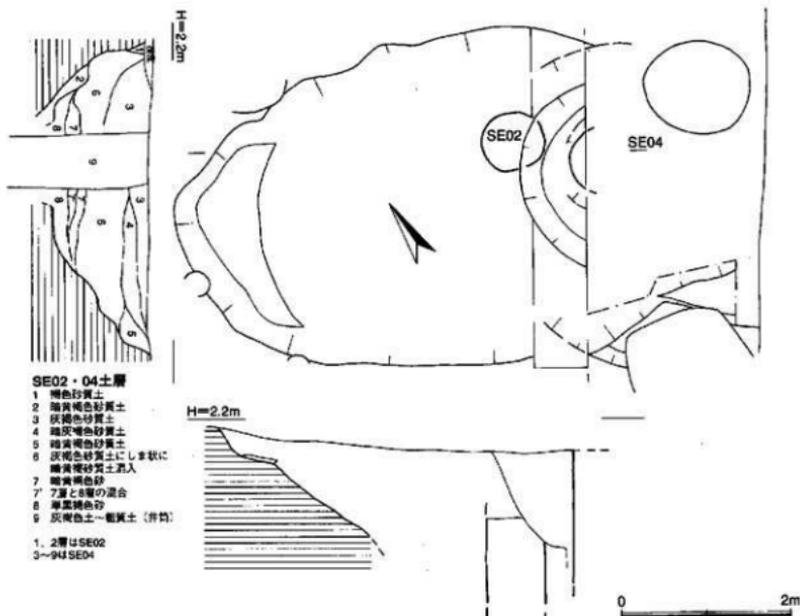
### 2) 井戸 (SE)

井戸は10基を検出する。調査区の南端部分と北端部分に偏って検出されている。いずれも板材で作る桶を井筒とするが、井筒の最下位しか残存していない。

**SE02** (第56図) 調査区北端で検出する。切り合い関係はSE02→SE04となる。掘り方は東側をSE04によって欠失しているが東西長5m以上、南北長4mの長楕円形を呈する。掘り方壇土は検出面から30cmほどは暗褐色土で以下は褐色砂である。掘り方の東側に寄ったところで標高1mで木製の板材を組んだ井筒(内径70cm)が痕跡的に確認できた。井筒部分を標高0m付近まで掘り下げたが底面は確認できず、湧水のためこれ以下は掘り下げ不能であった。残存する板材は腐食し



第55図 SB18実測図及び出土遺物実測図 (1/80, 1/3)

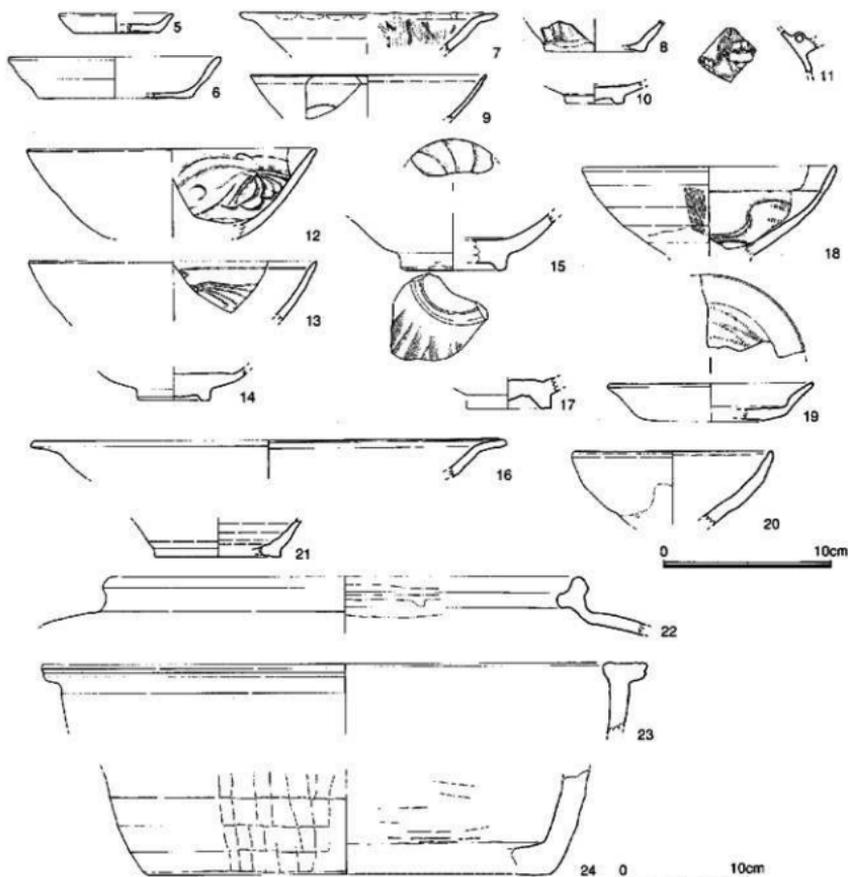


第56図 SE02・04実測図 (1/60)

ていて現状で不明瞭であるが厚さ1cm、板材の幅は10cm程度である。出土遺物から13世紀の後半代に位置付けられる。

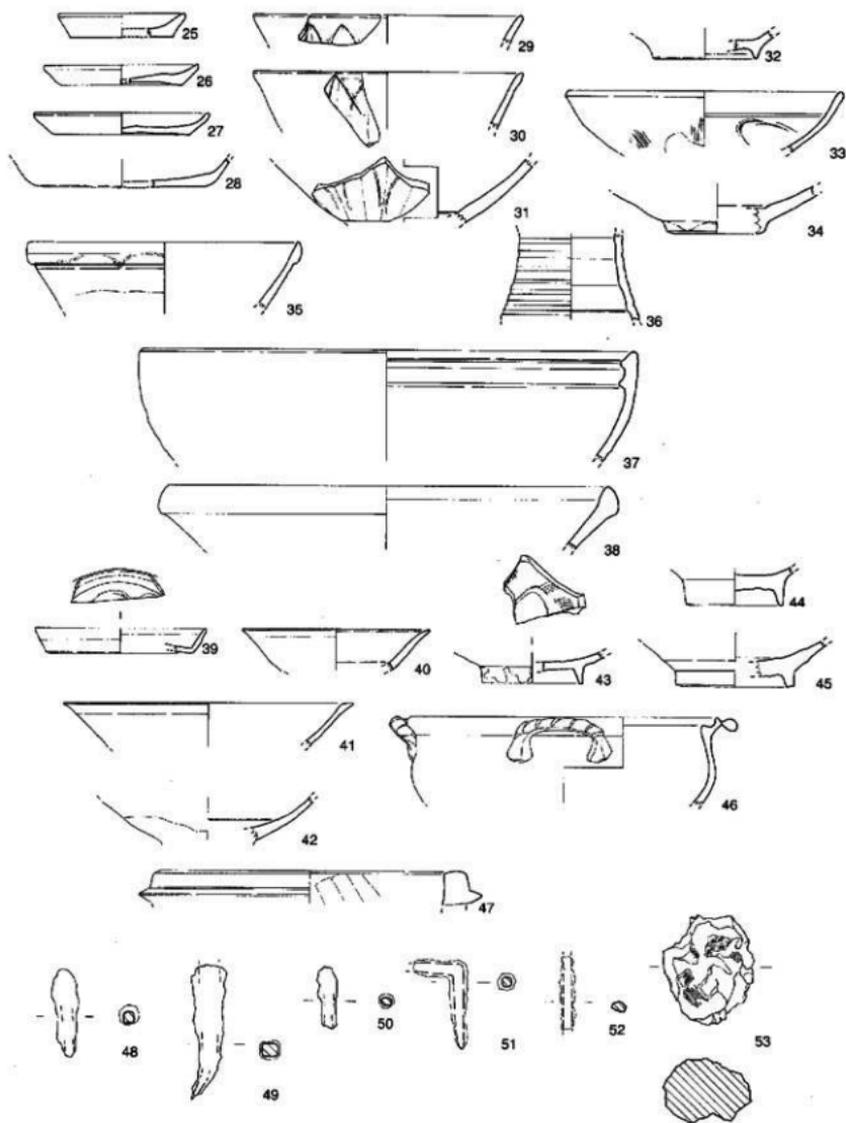
出土遺物 (第57図) 5・6は上師器でこの2点が井筒内の出土である。いずれも外底面は糸切りにより、5には板状圧痕は認められない。口径は8.6、12.4cmである。7・8は青白磁である。7は口縁部を輪花につくり、内面には櫛状工具による施文を施す。8は体外面のみには施釉され、高台および内面は露胎となっている。また外面には蓮弁を削り出している。9～12は白磁である。9は口ハゲの碗である。外面に線彫りの文様が残る。10は内底の釉を輪状にかきとっている。11は小型の壺把手部分である。外面に梨押し文様を施す。12～19は青磁である。12～16は龍泉窯系である。12・13は内面に片彫りの草花文を施す。14は無文で高台径は小さい。15は外面に欄干が入り内面には片彫りの文様を施す。16は皿類の杯である。17～19は同安窯系の碗・皿である。20は天日茶碗である。胎土は暗灰色を呈する。21～23は陶器である。23は内面に平行の当て具痕跡が残る。24は滑石製の石鐙である。

SE04 (第56図) 調査区北端で検出する。SE02を切るが、当初これとの切り合いが確認できておらず同時に掘り下げている。東側は土砂崩落の恐れがあり一段掘り下げた後未掘となっているため掘り方の西側に片寄った位置にある井筒(復元内径80cm程度)の一部までを掘り下げている。井筒は痕跡的でおそらくSE02同様の板材によるものと考えられる。標高0.7mで湧水があり、掘り方についてはこの直上まで、井筒についても標高0.2mまで掘り下げを行ったが完掘には至らなかった。東側の掘り下げ部分から鉄釘がまとまって出土しているがこれは井戸上面の他の遺構を掘り下げた可能性がある。出土遺物及びSE02との切り合い関係から13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられる。

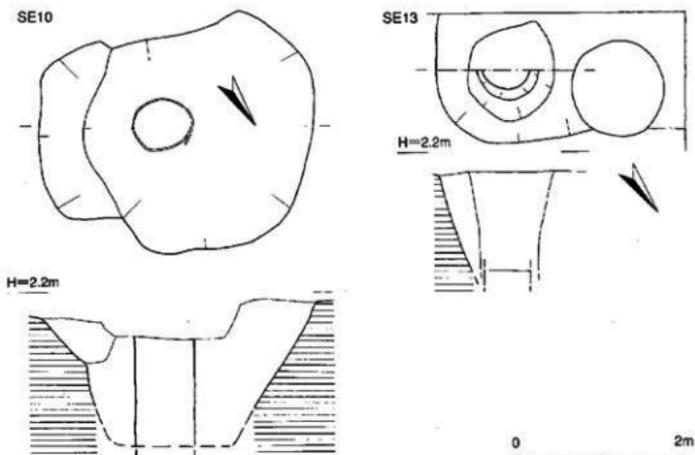


第57図 SE02出土遺物実測図 (5~20は1/3、21~24は1/4)

出土遺物 (第58図) 25~38はSE04掘り方出土で39~53は東側の未掘部分からの出土である。25~28は土師器である。外底部はいずれも糸切りで、28のみに板状瓦痕が残る。29~32は龍泉窯系青磁である。32は皿類の碗である。33・34は同安窯系の青磁碗である。35はⅣ類の白磁碗である。36は緑釉の水注であろうか。外面にガラス質の緑色釉が施される。また外面に窯滓が付着する。37は陶器の押鉢である。38は土師質の鉢である。口縁端部は玉縁につくる。39は青白磁の皿である。内面にヘラ彫りの文様を施す。40~45は白磁である。40は口ハゲの皿である。露胎部分には黒色の鉄錆が全体に付着する。41~45は碗である。46は肥前陶器の把手付き鉢である。把手部分には緑色の釉が施される。47は滑石製の石鍋である。48~52は鉄釘である。53は完形の椀形鍛冶滓である。裏



第58图 SE04出土遺物実測図 (1/3)

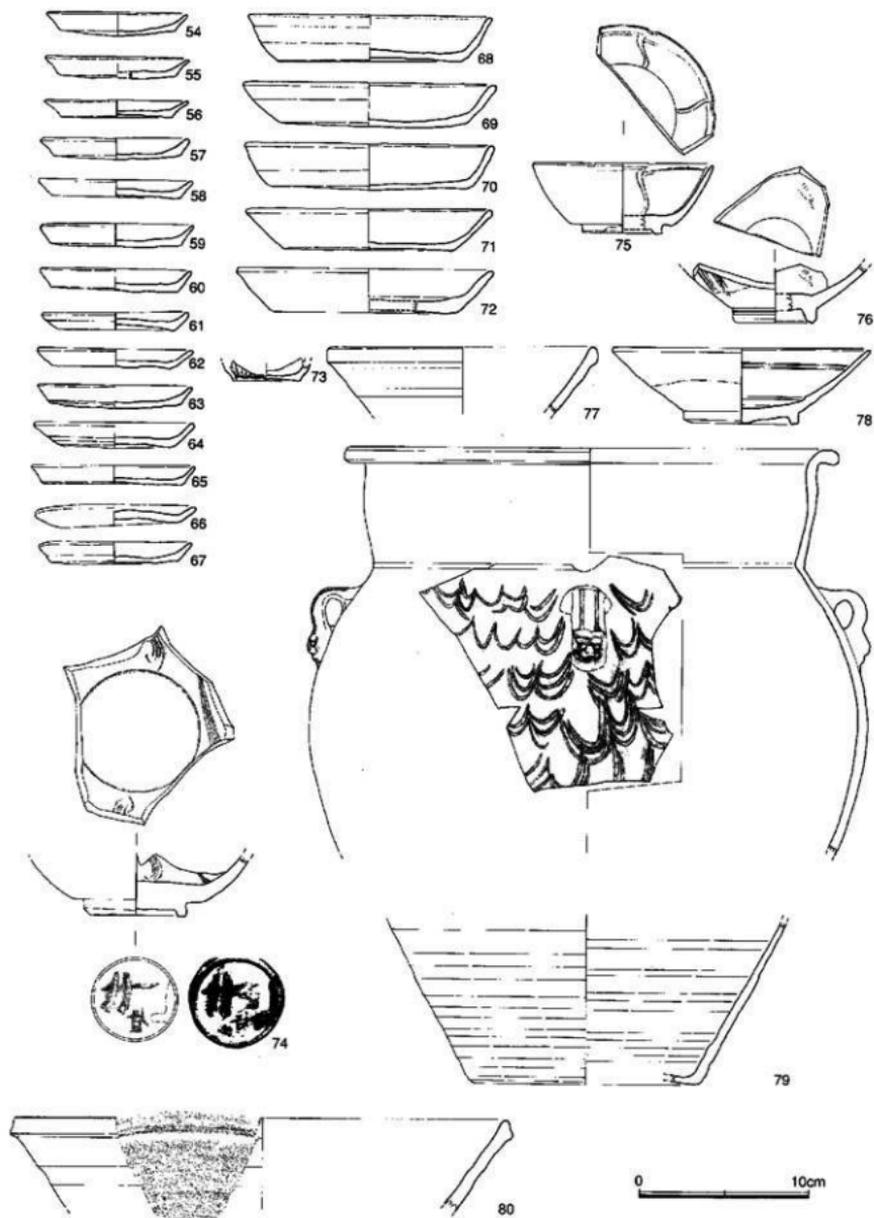


第59図 SE10・13実測図 (1/60)

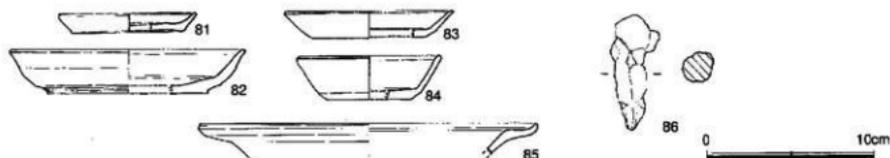
面に特に木炭をかみこんでおり小さな瘤状の突起が多い。重量は166gを測る。

SE10 (第59図) 調査区北側で検出する。SD17→SE10→SE02・SK09の関係となる。掘り方はやや不整形となっているが本来は径3.3m程度の円形と考えられる。掘り方の理上は淡黒色砂である。井筒(内径70cm)は検出面から確認できたが木質は湧水レベルである標高0.8mから遺存している。井筒木質は厚さ3cm、幅10cm、長さ40cm程度の板材を組んだものである。なお板材の下端部はV字状にカットされている。掘り方については井筒直上まで、井筒内についても標高0.2mまで掘り下げを行ったが湧水により完掘には至らなかった。また井筒内から投棄された貝殻等の残滓が多く出土している。出土遺物から13世紀前半に位置付けられる。

出土遺物(第60図) 74・80以外は井筒内出土である。54～67は土師器皿である。口径は8.5～9.4cmを測るが9cm前後のものが主体を占める。外底面はいずれも糸切りで、61以外はすべて板状圧痕を有する。68～72は土師器環である。口径は14.4～15cmである。外底面はいずれも糸切りで板状圧痕を有する。73は青白磁の合子である。内面及び体外面に施釉される。74・75は龍泉窯系の青磁である。74は掘り方出土でⅠ-2類の碗である。体内面に草花文を施す。また外底に墨書が残る。75は口縁部を輪花にする小碗で内面を2本一組のS字沈線で分割する。釉調は青白色である。76はⅠ-1・b類の同安窯系青磁碗である。77・78は白磁碗である。77はⅣ類である。78は完形でⅢ-2類である。内底の釉は輪状にかきとる。また内面の沈線は一部二重となっている。79は褐釉陶器の把手付き壺である。胴部はSK07上層との接合資料である。また形状・胎土・調整などからSP89出土の底部とSK12-A出土の口縁部も直接接合はしないものの同一固体の可能性が非常に高いと考えられるため復元して図示した。生地は外面暗赤褐色、内面黄白色を呈する。口縁端部は外方に引き出し丸く仕上げる。また底部はやや上げ底である。胴部には2箇所以上に獸面の把手が貼り付けられ、胴部外面上半部分には3本一組の波状文様が施されている。なお文様は器面に向かっ



第60图 SE10出土遺物夾測図 (1/3)

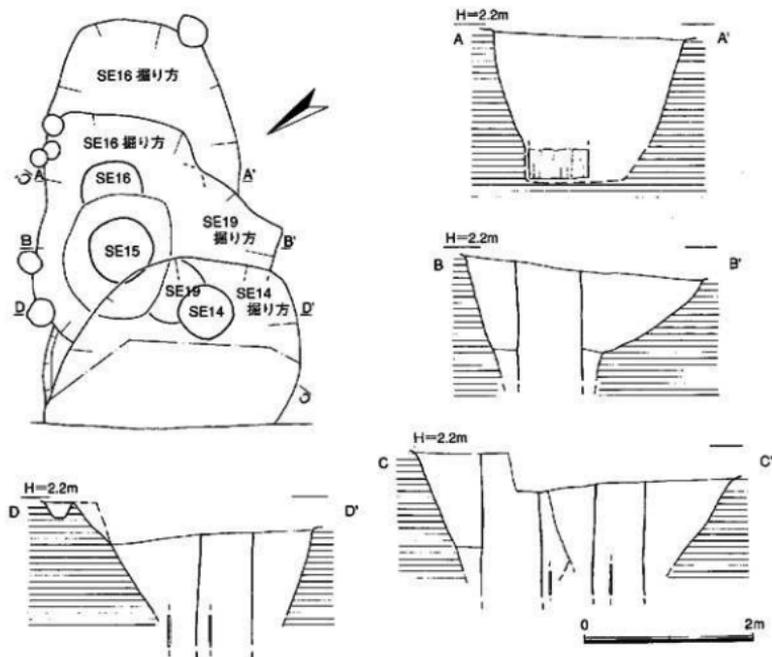


第61図 SE13出土遺物実測図 (1/3)

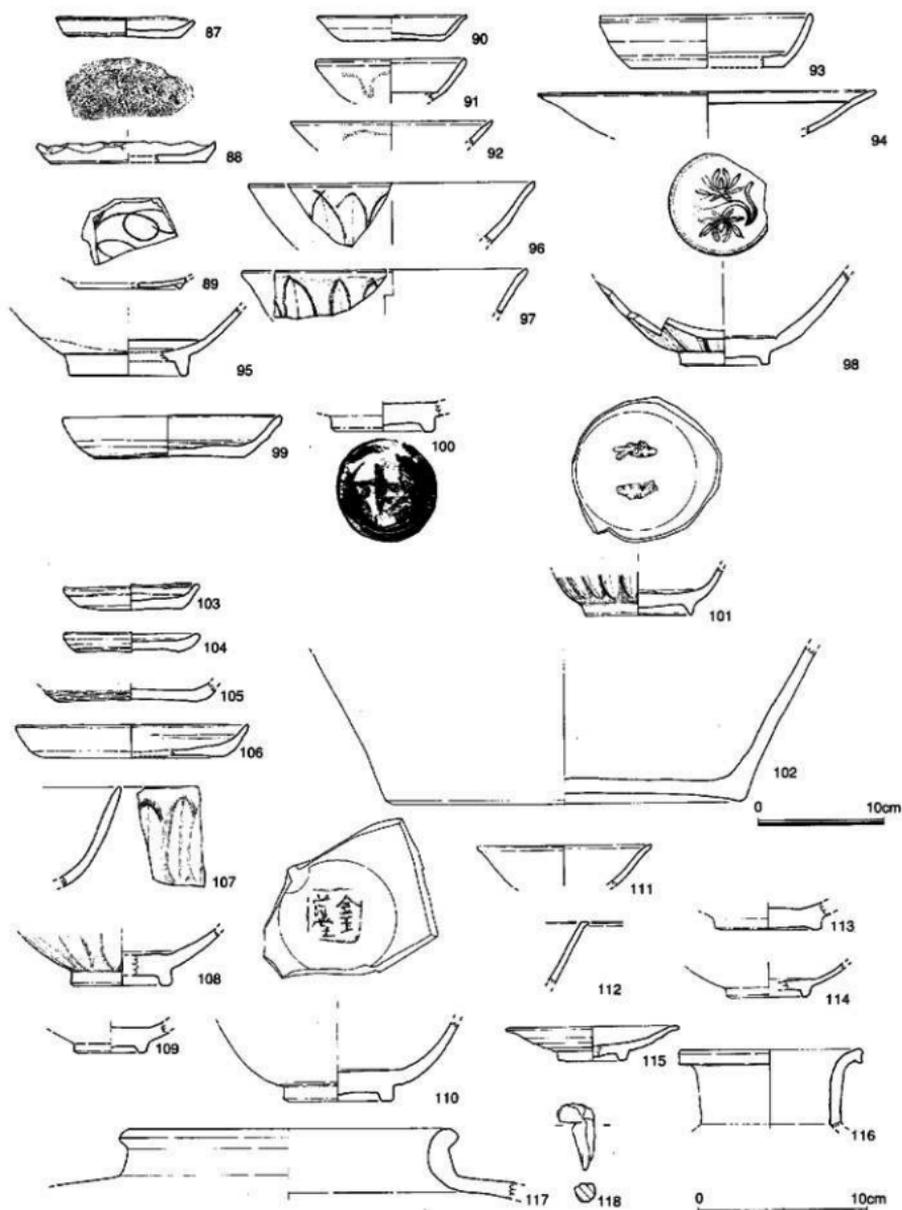
で左横方向に施文され、上部から下部の順に行なわれている。波状の一単位は上部より下部のほうが大きくなる。内面には淡褐色の釉を横刷毛により粗く塗布している。外面の釉は剥落が著しく剥落部分は灰色を呈している。80は須恵質の鉢である。口縁部は土縁に成形する。

SE13 (第59図) 調査区南端で検出する。掘り方の理上は褐色砂である。井筒部分 (内径60cm) は埋土暗灰色土で、検出面で確認できたが木質自体は湧水レベルである標高0.8mで確認できる。井筒は他の井戸同様板材を組んだものと考えられる。井筒検出直後に崩落が始まったため以下の掘り下げは行っていない。出土遺物から13世紀後半に位置付けられる。

出土遺物 (第61図) 81・82は土師器皿・坏である。外面は糸切りで板状匠痕は認められない。83・84は口ハゲの白磁皿である。83は全面施釉で、84は体部下半から露胎となる。85は龍泉窯系Ⅲ



第62図 SE14～16・19実測図 (1/60)



第63図 SE14・15出土遺物実測図 (87~101、103~118は1/3、102は1/4)

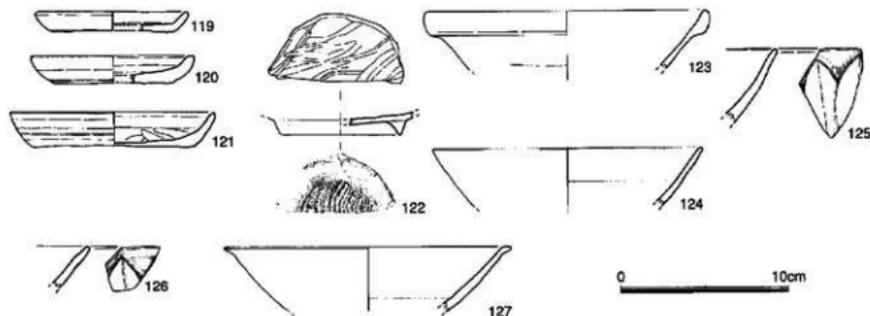
類の青磁坏である。86は鉄釘である。錆により全面に砂粒が付着しており形状の詳細は不明瞭である。

**SE14** (第62図) 調査区南端で検出する。SE16・SE19→SE15→SE14の関係となる。掘り方はやや不整形となっているが本来は2.5m前後の隅丸方形に近い形と考えられる。掘り方の埋土は検出面から1mが黒褐色土で、それ以下が淡黒色砂質土である。井筒(内径70cm)は掘り方の西端に寄り、埋土は暗灰色土である。井筒は幅7cm程度の板材を組んだものが標高0.7mで確認できる。掘り方については井筒直上まで、井筒内についても標高0.4mまで掘り下げを行ったが湧水のため完掘には至らなかった。出土遺物から13世紀後半～14世紀初頭頃に位置付けられる。

出土遺物(第63図 87～98) 87・88は土師器である。いずれも外底面は糸切りをおこない板状圧痕は認められない。87は皿で口径8cmである。88は坏の口縁部外縁を意図的に敲打し打ち欠いている。また内底面には焼成前にジグザグ模様様の線刻が行なわれている。89は畿内産の瓦器碗である。胎土は精良で白色を呈し、器壁は薄手に仕上げる。高台は低く断面三角形である。内底見込み部分は細かな平行のミガキの後に暗文状に連結輪状のミガキを行なう。90～94は口ハゲの白磁である。90～93は平底を呈する。90は全面施釉を行い、93は体部外面下半から露胎となる。95は冒類の白磁碗である。96～98は外面に蓮弁を有するⅠ～5類の龍泉窯系青磁碗である。98は内底見込みに草花文を陰刻している。

**SE15** (第62図) 調査区南端で検出する。SE16・SE19→SE15→SE14の関係となる。掘り方はやや不整形となっているが東西長3m、南北長2m程度の隅丸長方形に近い形と考えられる。掘り方の埋土は検出面から40cmが黒褐色砂質土で、それ以下が淡黒色砂である。井筒(内径80cm)は掘り方のやや西側に寄り検出面から確認できる。井筒木質桶湧水レベルである標高0.7mで確認できる。掘り方については井筒直上まで、井筒内についても標高0.4mまで掘り下げを行ったが完掘には至らなかった。出土遺物及び切り合い関係から13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられ、SE14に近接した時期が考えられる。

出土遺物(第63図 99～118) 99～102は井筒出土である。99は土師器の坏である。外底面は糸切りを行い板状圧痕はない。100・101は龍泉窯系青磁碗である。100は底部破片で高台畳付きまで施釉する。外底には墨書有する(「十」か)。101はⅢ-4類の坏である。外面には蓮弁を削り出し、内底面には双鱼文を貼り付ける。102は陶器の底部である。2次的に熱を受け器面がやや荒れている。



第64図 SE16・19出土遺物実測図(1/3)

る。103～118は掘り方出土である。103・104は土師器皿である。外底は糸切りで板状圧痕はなく、口径は7.8cmを測る。105・106は土師器杯である。外底面は糸切りで板状圧痕が残る。107～110は龍泉窯系青磁である。107・108は外面に蓮弁を有する。108の釉調は淡い青緑色である。109は小碗で釉調は108より更に青みが強い。110は内底面に「金玉満堂」のスタンプがある。111～116は白磁である。111は口ハゲの皿である。114は高台付きまで施釉する。見込み外縁の圏線は削りによるものである。115の皿は見込み外縁に圏線を巡らせる。116は壺の口縁部である。117は陶器壺である。生地は暗赤褐色を呈し、暗オリーブ色の灰釉が内外面に塗布される。胎土には微砂粒を含み破断面には薄く延びた気孔が残る。118は頭部が曲がった鉄釘である。

SE16 (第62図) 調査区南端で検出する。SE16・SE19→SE15→SE14の関係となる。掘り方は一辺2.5m前後の隅丸長方形に近い形と考えられる。掘り方の埋土は検出面から10cmが暗灰色土で、それ以下が褐色砂である。井筒(内径60cm)は掘り方の東端に寄りSE19の井筒を切っている井筒は上面から確認できるが、桶の板材は湧水する標高0.8mで確認できる。掘り方については井筒直上まで、井筒内についても標高0.4mまで掘り下げを行ったが湧水により完掘には至らなかった。出土遺物は少量であるが切り合い関係などから13世紀の前半～中頃と考えられる。

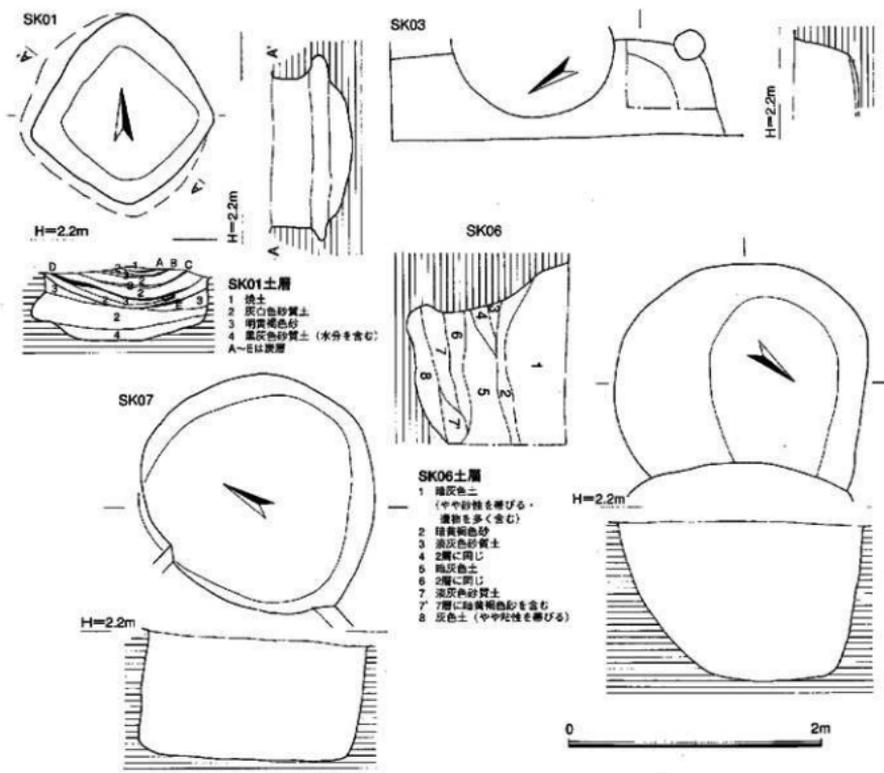
出土遺物(第64図 119～125) 119～121は土師器皿・杯である。外底面は糸切りで119には板状圧痕が残る。122は瓦器碗である。内底には暗文状に粗い横方向のミガキが行なわれる。外底面には底面整形時の圧痕が残る。またその上からヘラ記号上の細い刻線が施される。123・124は白磁碗である。123はⅣ類、124はⅤ類であろうか。125は龍泉窯系青磁碗Ⅰ～5類である。

SE19 (第62図) 調査区南端側で検出する。SE16・SE19→SE15→SE14の関係となる。SE14井筒桶確認時にこれに切られる木質痕跡を確認したためSE19として遺物を取り上げた。掘り方は周辺の井戸に破壊されており不明瞭である。後の隅丸長方形に近い形と考えられる。井筒(内径80cm)は検出直後の湧水によりほとんど掘り下げを行っていない。標高0.8m以下は未掘である。出土遺物は少量で時期は不明瞭ながら13世紀中頃～後半に比定しておきたい。SE16よりも後出するものであろうか。

出土遺物(第64図 126・127) 126は外面に幅の狭い蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗Ⅰ～5・b類である。127はⅤ類の白磁碗である。

### 3) 土坑(SK)

SK01 (第65図) 調査区北側で検出する。平面形は一辺1.2～1.3mの略方形を呈する。壁はほぼ直立するが底面のやや上位で3方に10～20cmの抉り込みがある。底面は中央に向かって傾斜している。埋土の観察によって土坑掘削後に黒灰色砂質土を10cmほど充填しその上面に灰白色砂質土(2層)、明黄褐色砂をいれて土坑平面は円形、断面がボール状になるように整形している。また断面には現れていないが東側では厚さ5cm程度の粘土がこの部分に貼り付けられていることから、この上面を使用時の床面としていと考えられる。この粘土は被熱の痕跡が残っておらず、青白色を呈している。この床面直上に焼成に伴うと考えられる炭層Eが形成され、その上面には2・3層が被せられ再度床面を作り変えている。同様の繰り返しで検出面までに炭層A～Eで示される5枚の焼成面が確認できる。なお炭層はD層以外はそれぞれ前面に広がるのではなく最大でも厚みは3cm程度で途切れながら広がっている。炭層E以上の壁体部分がほとんどないため壁面・底面には被熱の痕跡がないが、形状等より土師器の焼成遺構と考えられる。この際炭層Eを境としてこれ以上が焼成部分にあたり、床を張り直して焼成を行ったものと考えられる。またこれより下の部分については下部構造として捉えることができる。炭層Eより上層埋土からは土師器皿破片が多く出

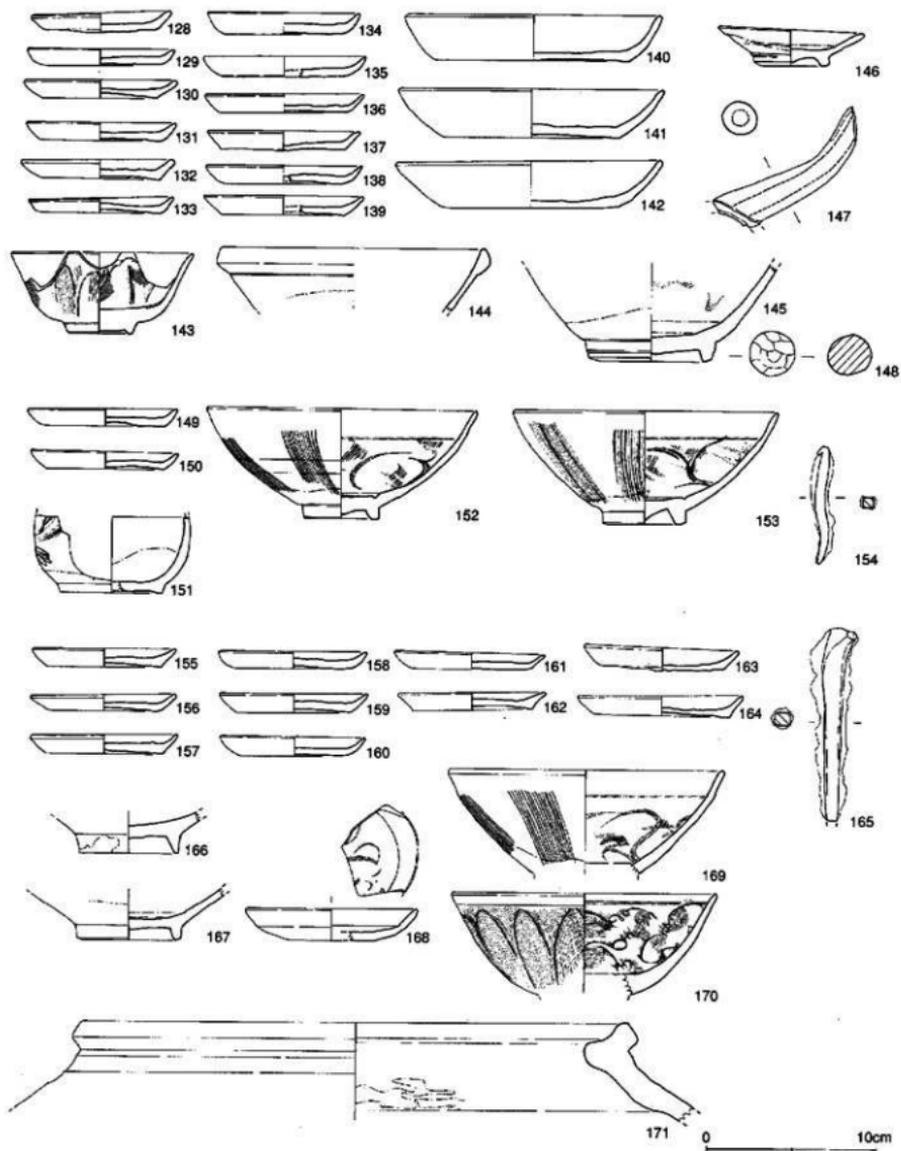


第65図 SK01・03・06・07実測図 (1/40)

土し、炭層D直下からは完形の土師皿が数個体出土している。また下部構造の埋土中・掘り方床面からも土師器環・皿が出土している。また焼成の方法としては掘り方を含め壁面に被熱痕跡がなく埋土中からも最上面の1層を除いて焼土がほとんどないことなどから土師器環・皿を焼成するための上部を開放させる形態の焼成遺構と考えられる。出土遺物は土師器を中心に多く出土しており、図示し得ないが印花の魚藻文を施す青白磁の皿も下層から出土している。出土遺物から13世紀前半と考えられる。

出土遺物 (第66図) 遺物は検出面～炭層D上面までを上層 (149～154)、炭層D～炭層E上面までを中層 (155～165)、これ以下を下層 (166～171) として取り上げた。128～148は中央に設定したトレンチ出土の遺物である。

128～139は土師器皿である。口径は8～9.4cmとばらつくが9cm前後のものが多い。外底面はすべて糸切りで130、135～138には板状圧痕がない。140～142は土師器環で口径15cm強である。143



第66图 SK01出土物実測图 (1/3)

は龍泉窯系の小型の碗で口縁部は緩やかに外反する。釉は明青緑色を呈し厚く塗布される。外面に蓮弁を削り出し上から櫛目を施す。内面はへら状工具と櫛状工具による蕉葉文を施す。144～147は白磁である。144はⅣ類碗、145はⅤ類碗、146は完形の皿Ⅲ類である。147は木注の注口である。148は完形の土球で径2.6cm、重量16gを測る。

149・150は土師器小皿で口径は8.5、8.8cmである。外底糸切りで板状圧痕を残す。151は上半部を欠損しているため器形が不明であるが碗もしくは小型の壺であろうか。欠損部分は内面に段がつき接合部分であろう。高台は蛇の目状となり、体部は丸みを帯びる。胎土は白色精良である。外面は外底部まで白色の化粧土を施し、高台との境近くまで透明釉を塗布する。内面には化粧土はなく内底やや上部まで釉が塗布されている。体部外面には鉄絵による文様を施す。磁州窯系であろうか。152・153は同安窯系青磁碗Ⅰ～Ⅱ類である。154は長さ7cmの鉄釘である。錆化が進むが完存品で頭部を曲げ、全体にS字に湾曲している。

155～164は土師器皿であり、いずれも完存に近い。口径は8.3～9.6cmを測るが8.5cm前後が主体である。外底面糸切りで156以外は板状圧痕が残る。165は壺状の鉄器である。長さ11cmを測り断面は長方形を呈する。

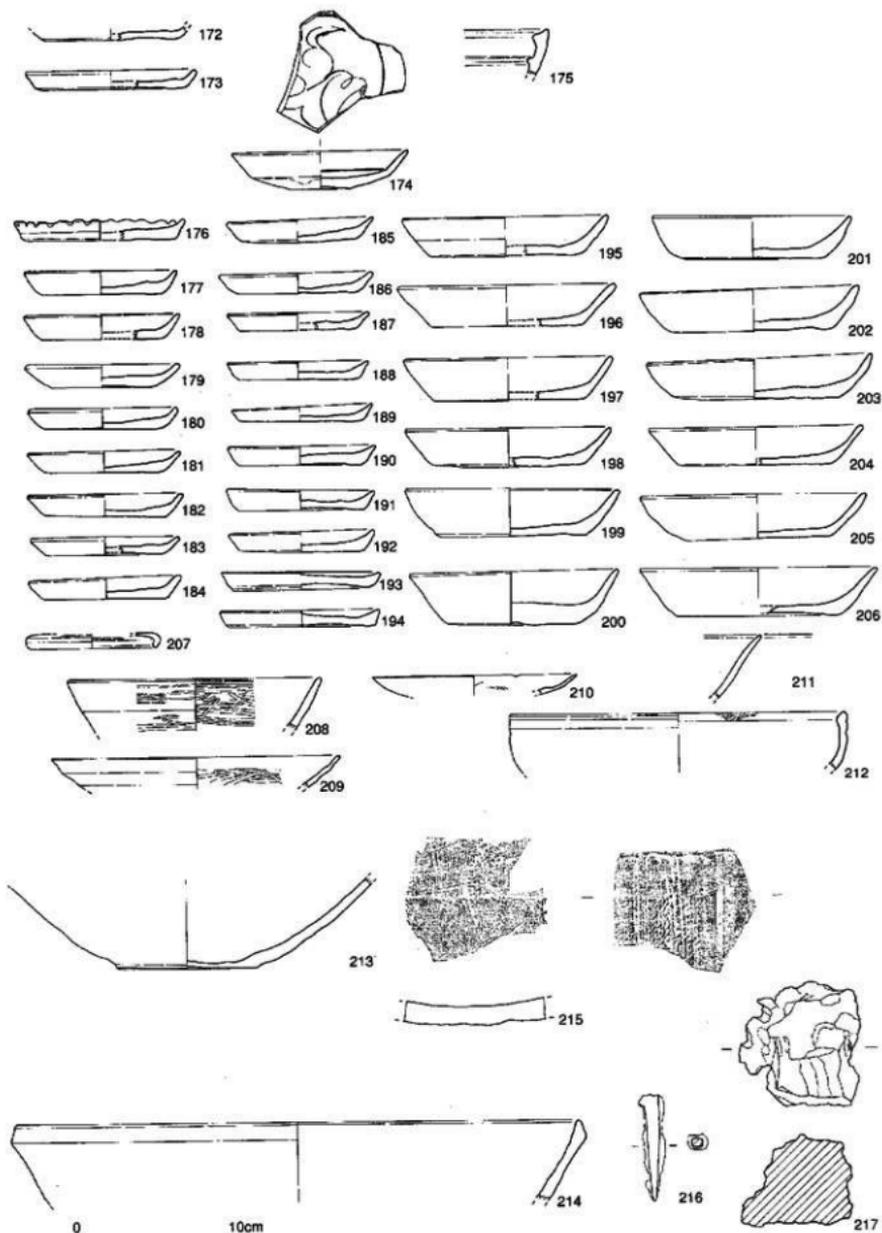
166～168は白磁である。166はⅤ類、167はⅥ類の碗である。168はⅢである。外底面が露胎となる。169は同安窯系青磁碗である。SE04出土遺物と接合する。170は龍泉窯系青磁碗である。外面は蓮弁の上から櫛目を入れ、内面は櫛・へら状工具により施文する。171は陶器壺の口縁部である。

**SK03** (第65図) 調査区北側コーナー部分で検出する。上坑の南側隅しか掘り下げていない。平面は(長)方形を呈すると考えられる。一部分のみの掘り下げであるが検出面からの深さ50cmを測り、床面は平坦である。埋土は黄味を帯びた灰白色砂質土である。出土遺物は少量で時期不明であるが12世紀後半以降のものである。

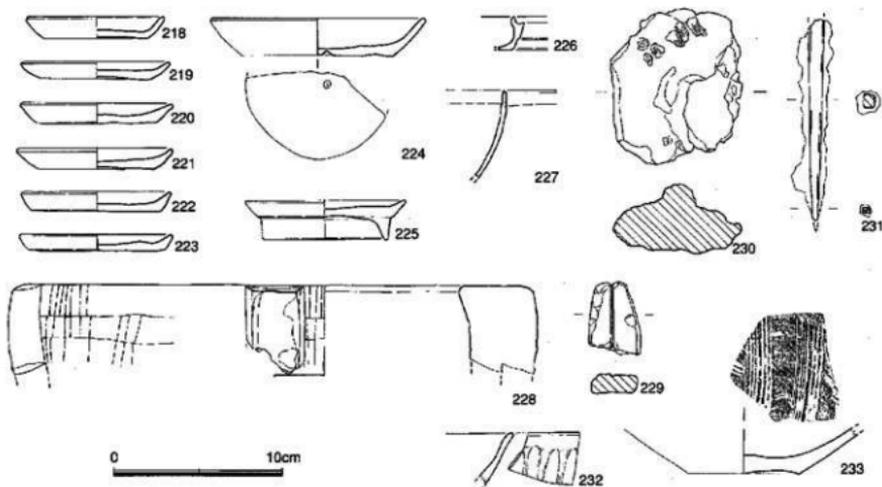
出土遺物(第67図 172～175) 172・173は土師器皿である。外底面糸切りで板状圧痕が残る。復元口径は10cm弱である。174は白磁皿である。釉は外面の屈曲部付近まで塗布されている。175は陶器の鉢口縁部である。無釉で蓋受け状の段を有する。

**SK06** (第65図) 調査区中央で検出し、東側を近世以降の井戸(SE05)により壊される。平面はややいびつであるが径2mの略円形を呈すると考えられる。壁は不規則に湾曲し底面付近で20cmほど抉りこんでいる。また底面は南側に向かって深くなる。出土遺物は1層から大半が出土している。13世紀中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物(第67図 176～217、第68図) 176～217は土坑を半壊した時に出土したものであるが上述のように大半が1層の出土である。218～231は1層出土、232・233は2層以下の出土である。176～194は土師器皿である。176は焼成前に口縁部を刻んで鉤歯状に作っている。口径は8.0～9.2cmで8.5～8.8cmが主体を占める。外底面は糸切りで、176・179・182・187・188・190・191・193・194が板状圧痕を残さない。195～206は土師器杯である。口径11.6cm～14.0cmを測る。199・202・204・205は板状圧痕を残さない。207は土師器の蓋である。外面には横方向のへらミガキを行なう。208・209は瓦器である。208は口縁部のみが黒化する。210は青白磁の皿である。内底に櫛状工具による施文がなされ、口縁部は輪花に仕上げる。211は口ハゲの白磁皿である。212は陶器の鉢である。胎土には砂粒が多く、釉は黄白色を呈する。213・214は須恵質の鉢である。215は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には縄目のたたき痕跡が残る。216は長さ6.3cmを測る鉄釘である。217は鍛冶滓である。表層は一部ガラス質化するが、全体にがさつき、木炭痕が付着する。鍛造薄片は認められない。



第67図 SK03出土遺物実測図及びSK06出土遺物実測図(1)(1/3)



第68図 SK06出土遺物実測図(2) (1/3)

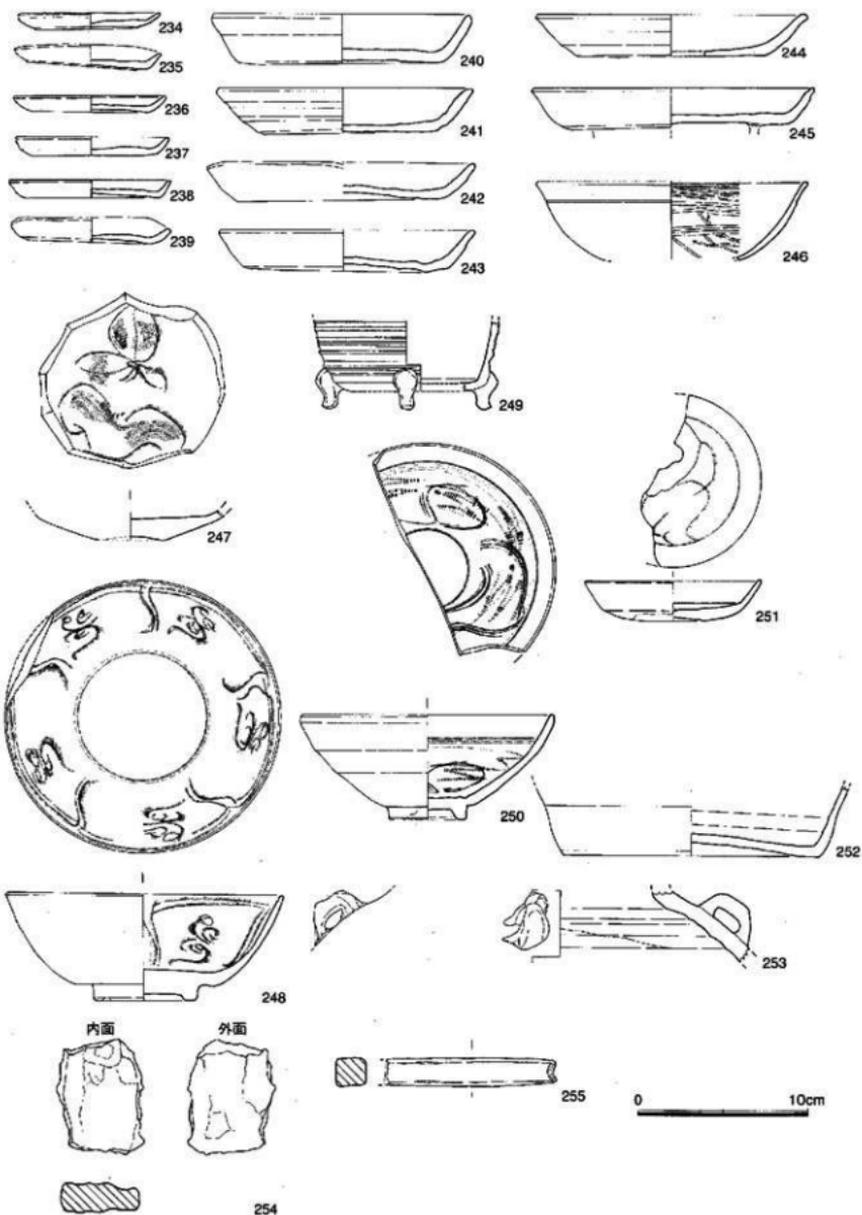
218～223は上師器皿である。底面は糸切りで218～221は板状圧痕を残す。224は土師器杯である。糸切りで板状圧痕を残す。225は高台杯の皿である。皿部口径9.5cmで高台は直立し細く高い。226・227は青白磁である。226は合子身である。蓋受け部分と外面下半から底部が露胎となる。227は口ハゲの碗である。228は滑石の石鍋である。229は石鍋転用の石鍾である。230は完存品の椀形鍛冶滓である。表面暗褐色を呈し木炭痕が残る。重量148gである。231は長さ12cmを測る鉄針である。

232は龍泉窯系の碗である。口縁部は反転してわずかに外反する。また外面に幅の狭い蓮弁を削り出す。233は陶器のすり鉢である。

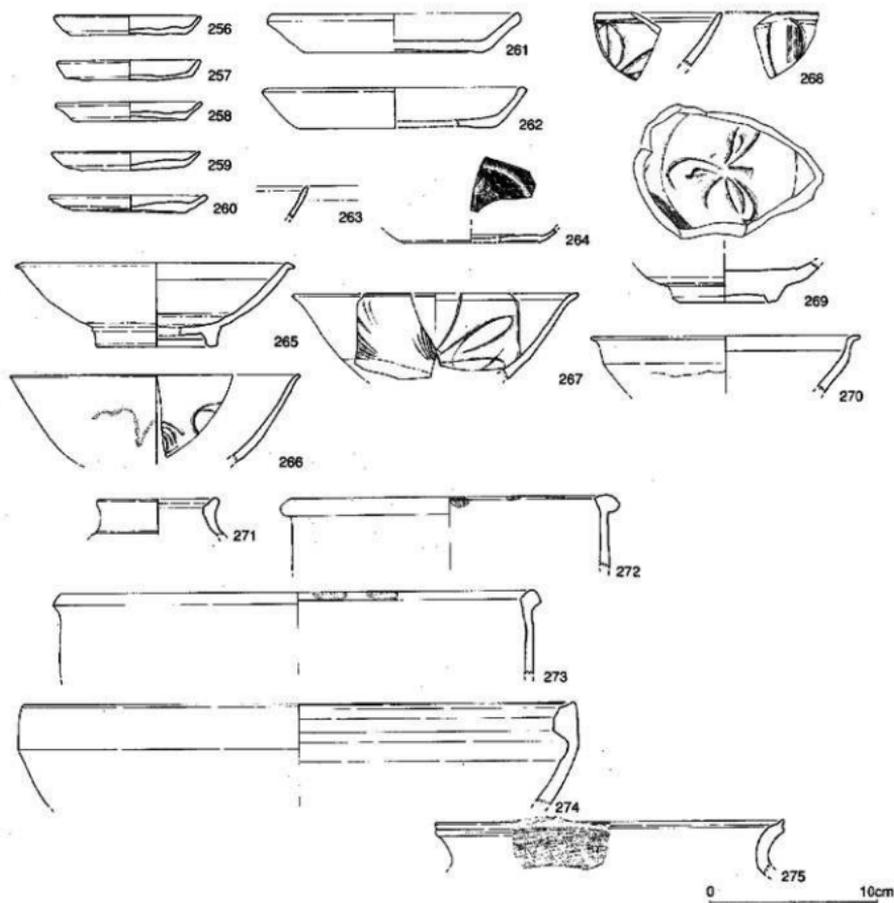
**SK07** (第65図) 調査区中央で検出する。当初SK12を切るものとして掘り下げを行ったが、途中で切りあいが逆転することが平面的に確認できた。径2mの円形を呈し、深さは90cmを測る。西側の壁が一部オーバーハングし、床面は平坦である。埋土は暗褐色土である。出土遺物は検出面から60cmまでを上層、以下を下層として機械的に取り上げている。13世紀前半の遺構であろう。

出土遺物(第69・70図) 234～255は上層出土、256から275は下層出土である。

234～239は上師器皿である。口径は8.3～9.2cmで9cm前後が主体である。外底糸切りで234・238には板状圧痕が認められない。240～244は上師器杯である。口径15.0～15.8cmを測り、いずれも外底糸切りで板状圧痕を残す。245は高台付きの杯である。口径16.3cmを測り、外底糸切りで板状圧痕を有する。内外面に2次的な被熱の痕跡が残る。246は瓦器碗である。外面口縁下に沈輪が巡り、内面には暗文状のミガキを行なう。247・248は龍泉窯系青磁である。247は内底にへう及び櫛状工具による花文を施す。外底は露胎である。248はI-4類のほぼ完形の碗である。249は脚を有する香炉である。全面にオリブ灰色の釉を施すが、2次的な被熱で一部変色している。外面に3本単位の横線が巡る。250は同安窯系I-1・a類の青磁碗である。251は白磁皿である。内底に線彫りの花文を施す。252は陶器底部である。やや上げ底で内面には黄白色の釉を施し、外面は露



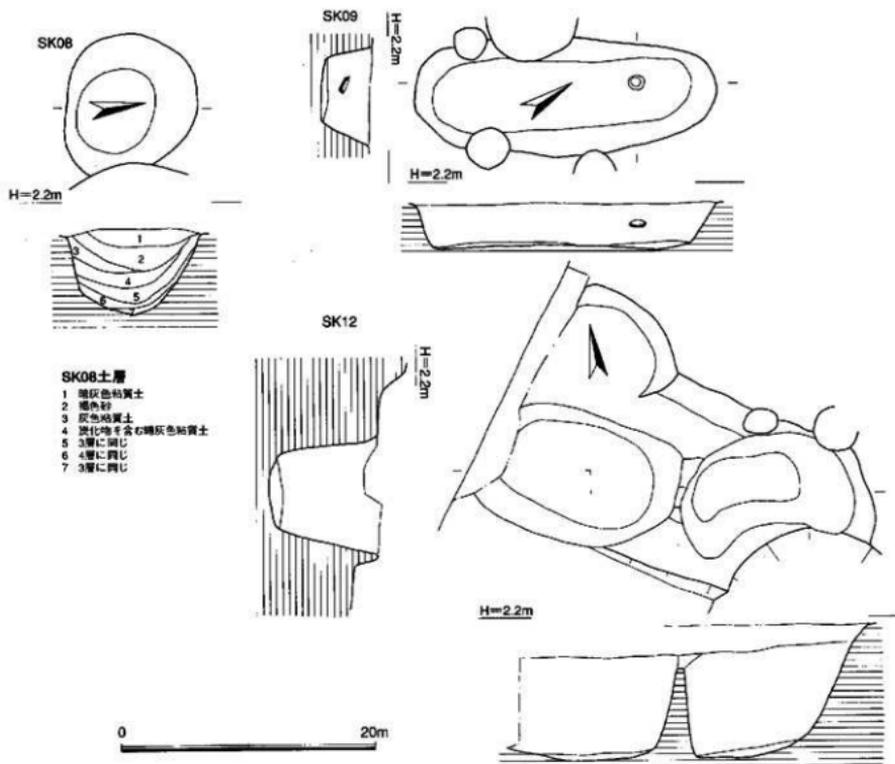
第69图 SK07出土遺物実測図(1)(1/3)



第70図 SK07/出土遺物実測図(2)(1/3)

胎とする。253は褐釉陶器の把手部分である。254は厚さ1.5cmの伊壁である。内面1/3はガラス質化し、外側1/3は酸化し赤化している。胎土にはスサ・砂粒を含む。255は片岩製の石製品である。断面1.5×1.8cmの長方形を呈し、先端部はややすばまる。先端のくぼみには擦痕が残り、緊縛した痕跡が確認できる。また中ほどにはかすかなくぼみがあり横方向にも緊縛した可能性が考えられる。重量は65gである。石錘もしくは硨石模造品か。

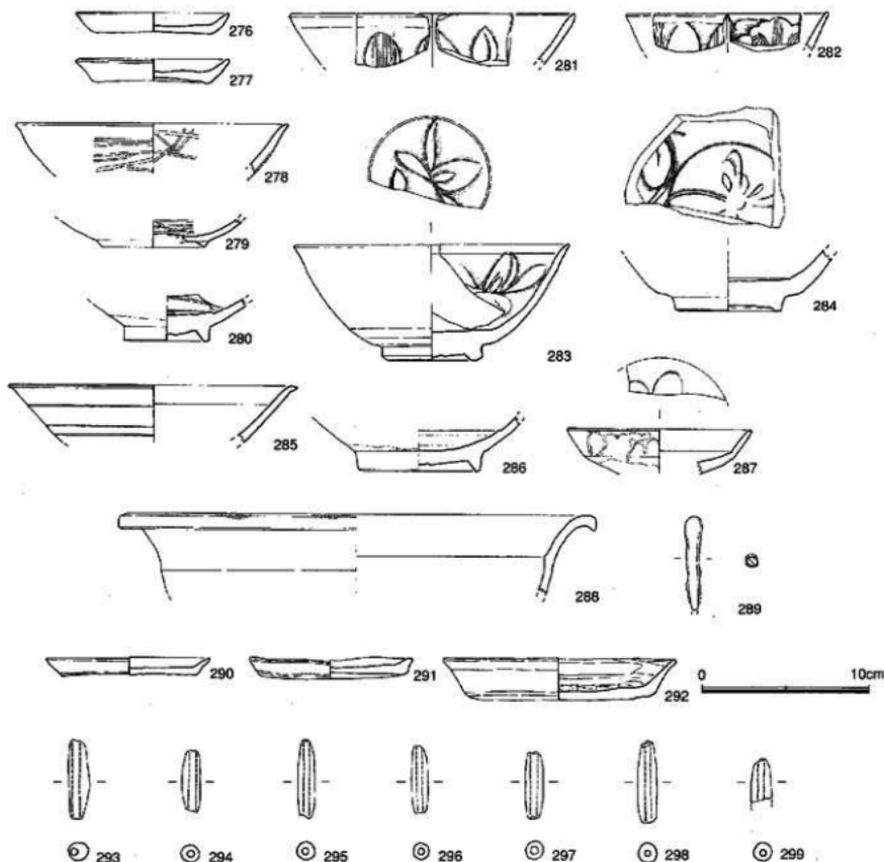
256-262は土師器皿・坏である。いずれも糸切りで板状圧痕を残す。263は口ハゲの青白磁の皿か。264は型造りの白磁皿である。内面に魚鱗文を印花している。265・266は白磁碗である。265は



第71図 SK08・09・12 実測図 (1/40)

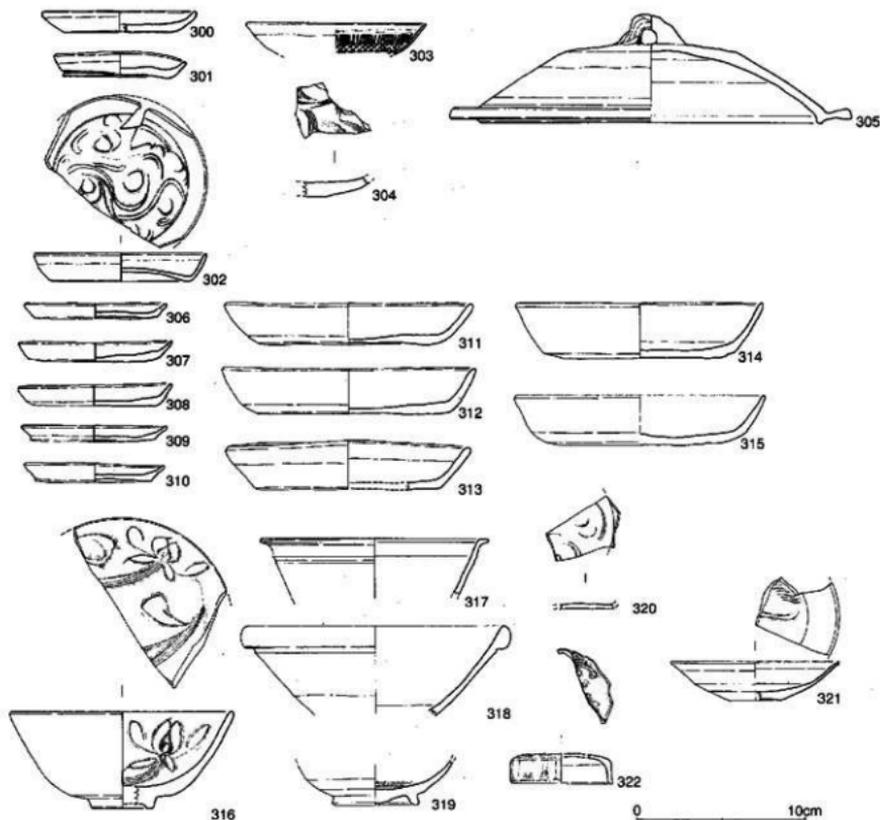
種類。266は内面に櫛及びへら状工具により施文する。267は同安窯系青磁碗である。外面は櫛描き、内面はへら描きで施文する。体部下半は露胎で釉調は灰オリーブ色を呈する。268～270は龍泉窯系青磁である。268はⅠ-6類の碗である。269は内底にへら描きの花文を有する。270は口縁端部を外方に引き出す小碗である。271・272は褐釉陶器である。271は壺の口縁部でSK12出土遺物との接合資料である。273はオリーブ色の軸が掛かり、口縁部内面に日跡の痕跡が残る。274は無釉陶器の鉢である。275は混入品であるが古墳時代後期の土師器甕である。口縁端部は上に摘み上げ、口縁部外面を横なでし、屈曲部を作っている。頸部外面には横なで前のたたき痕跡が残っている。箱崎遺跡群内では現在までの調査例から古墳時代後期の遺構・遺物は非常に検出例が少ないが、該期の遺構が砂丘尾根線より海側を中心として存在する可能性が考えられる。

SK08 (第71図) 調査区北側で検出する。SK01に切られる。径1.2mの円形を呈し、深さは70cmを測る。埋土は灰色土と炭化物を含む暗灰色土が互層となっている。位置的な関係及び埋土からSK01との関連も考えられよう。出土遺物から13世紀前半代に位置付けられる。



第72図 SK08・09出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第72図 276~289) 276・277は土師器皿である。口径は9.0、8.8cmを測る。外底は糸切りを行い板状圧痕が残る。278・279は瓦器碗である。278は口縁端部外面を横なでしわすかに外反させる。279は内面に暗文状の横ミガキを行なう。280は回安窯系青磁碗である。281・282は龍泉窯系青磁碗である。281・282は外面蓮弁を削り出し上から櫛目を施す。内面は281がヘラ、282はヘラ・櫛状工具で施文する。283・284は外面無文、内面ヘラ及び櫛状工具による施文を行なう。285~287は白磁である。285は内面に1条、外面に3条の沈線を巡らせる。286は甕類の碗底部である。287は皿で内底に花文が線彫りされる。288は陶器口縁部である。口縁部は外反し端部を垂下させる。頸部内面に稜を有する。釉は黄白色で口縁部外面から内面に塗布される。289は残存長

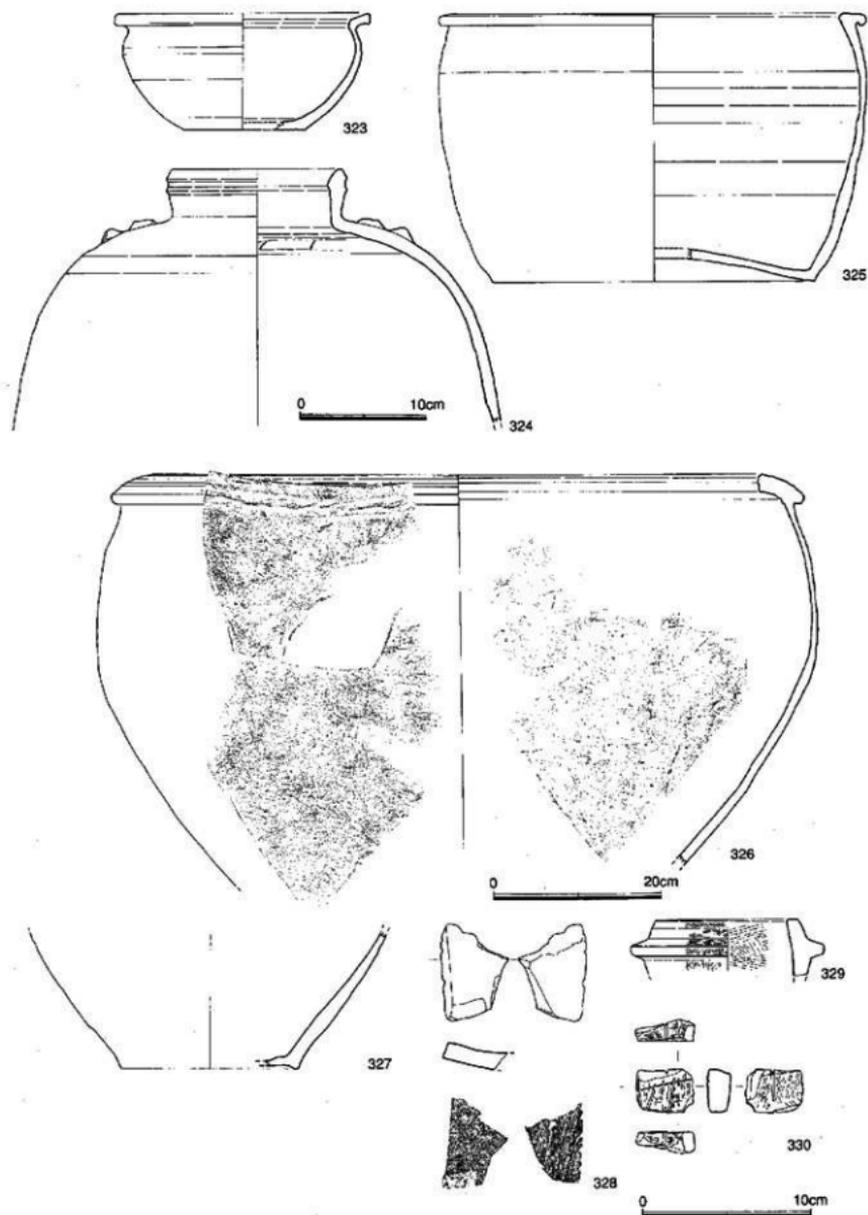


第73図 SK12出土遺物実測図(1)(1/3)

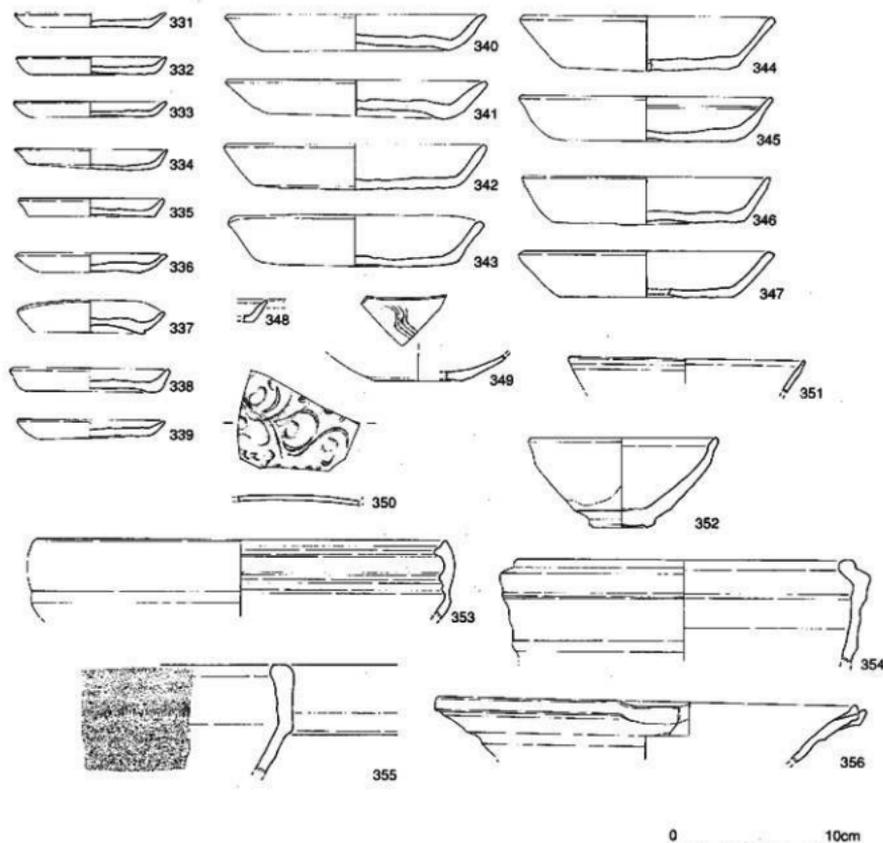
5.6cmの鉄釘である。頭部近くはつぶれて平たくなっている。

**SK09 (第71図)** 調査区中央で検出する。SE10を切る。埋土は灰褐色砂質土で、法量は長軸2.4m、短軸0.95m、検出面からの深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦である。北側の床面から10cmほど浮いて完形の土師皿1個体が出土する。形状から埋葬遺構の可能性が高い。出土遺物及び切り合い関係から13世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

**出土遺物 (第72図 290～299)** 290・291は土師器皿である。口径はともに9.4cmを測り、外底面の調整は糸切りで板状圧痕を残す。291は完存品である。292は据えられていた完形の土師器環である。口径13.6cmで外底糸切りで板状圧痕を残す。293～299は管状土鍾である。比較的まとまった数出上しており、意図的に納められた可能性もある。299のみ欠損品で、あとはほぼ完形である。重量はそれぞれ6g、4g、6g、5g、5g、8g、4gである。



第74図 SK12出土遺物実測図(2) (323、325、327-330は1/3、324は1/4、326は1/6)



第75図 SK12出土遺物実測図(3)(1/3)

SK12(第71図) 調査区中央で検出する。図面上ではSK07に切られているが、本来の切りあいは逆転している。南側を擾乱されているため状態に不明瞭な点もあるが、隅丸方形の掘り方内に平面長円形の土坑を2基近接させて掘り込んでいる。また土坑間は深さ10cmの溝状の掘り込みによってつなげられているようである。2基の土坑はいずれも埋上が暗灰色土である。東側の土坑には上半に焼土・炭化物を含んでいる。出土遺物は2基の土坑を検出するまでの検出面から20cmを上層で取り上げ、各土坑は西側を12-A、東側を12-Bで取り上げた。12-A・B間では接合資料もあり調査時の所見どおり一連の遺構と考えられる。13世紀前半に位置付けられる。

出土遺物(第73・74・75図) 300~305は上層出土、306~330は12-A出土、331~356は12-B

出上である。

300・301は土師器皿である。口径9.0・7.8cmを測る。外底は糸切りで板状圧痕を残す。302・303は口ハゲの青白磁の皿である。302は内面に細いヘラ描きの花文を施す。303は内面に印花を施す。304は龍泉窯系1-2類皿で、外底が露胎となる。305は把手付きの褐釉陶器の蓋である。外面上半部分が施釉される。胎土には砂粒を多く含む。

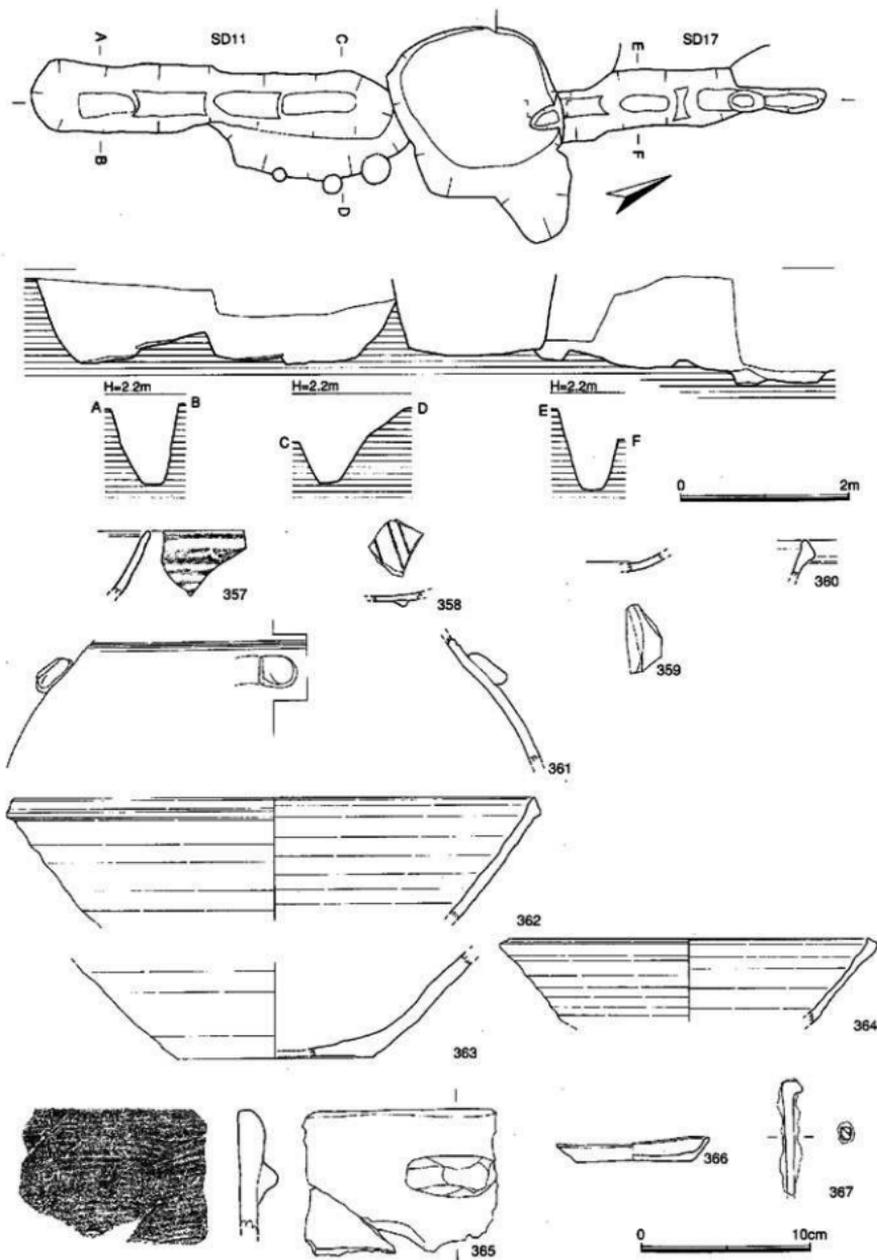
306~310は土師器皿である。口径8.3~9.1cmを測り、外底は糸切りで板状圧痕を残す。311~315は土師器環である。口径14.6~15.0cmを測る。外底は糸切りで板状圧痕を残す。316は龍泉窯系青磁碗である。内面にヘラ描きの花文を施す。317~319は白磁碗である。319は内底に環状の重ね焼きの目跡が残る。320~322は青白磁である。320は平底の底面まで施釉する皿である。内面にヘラ描きの文様を施す。321は皿で外底直上より露胎となる。内面は櫛状T具により施文される。322は合子の蓋である。323~326は陶器である。323は褐釉の鉢で全面に施釉する。324はSK07上層出土資料と接合する。褐釉の壺で外面から内面上半まで施釉する。325はSE10井筒出土資料と接合する。外面上部から内面全体にオリブ黄色の釉を施す。口縁部上面は釉をふき取っており目跡の痕跡も残る。326はSK07上層及び12-B出土資料と接合する壺である。口縁部上面は外傾するL字状に近い。内外面褐釉を施した後に黄白色釉を塗布する。内面には青海波文の当て具痕跡が残る。327は土師質の鉢底部である。328は須恵質の平瓦である。側面は1/3ほどに切れ込みをいれて削りといったような痕跡が残る。凹面には布目、凸面には縦方向の板などの痕跡が残る。329は小型の滑石製石鍋である。330は厚み1cm、幅2.4cm程度の棒状の滑石である。刻みをいれて長さ2cm程度に削り取ろうとしたものと考えられる。破断面には削り取りの痕跡が残る。

331~339は土師器皿である。口径8.7~9.5cmを測るが9cm弱のものが主体である。外底糸切りで337以外は板状圧痕を残す。340~347は土師器環である。口径14.5~15.2cmを測り、すべて外底糸切りで板状圧痕を残す。348~350は青白磁である。348は口ハゲの皿で外底まで施釉する。349は体部最下位から露胎となる。内面に櫛描きの文様を施す。350は内面に細いヘラ描きの花文を有する。351は口ハゲの白磁皿である。352は天目碗である。赤褐色の下釉が釉尻以下に残る。下半は露胎である。353は無釉陶器の鉢である。354は無釉陶器の口縁部である。口縁部は内傾し端部を上へ引き出す。頸部には突帯を巡らせる。胎土には砂粒をほとんど含まない。355は陶器すり鉢である。口縁端部内面から口縁部外面に黒褐色釉を塗布する。356は須恵質の片口鉢である。口縁端部は上方につまみ上げ玉縁を呈する。

#### 4) 溝 (SD)

SD11・17 (第76図) 調査区中央部分で検出する。中央をSK07に切られており、北側をSD17、南側をSD11として遺物を取り上げているが、本来は一連の溝状遺構と考えられる。またSD17部分ではSE10に切られている。主軸方位はN-28°-Eで直線的に延び、SB18と方位を同じくするがこれに切られている。溝幅は0.6m~1.1mを測る。また底面には不規則な凹凸でなく、ステップ状に高まりをもち規則的に高い部分と低くなる部分があるが、SD17の北半部分では全体に低くなっている。形状や方位から溝としての機能より建物に伴う布振り状の掘り込みの可能性も考えられるが、今回の調査では対応する掘り込みも確認できていないため溝状遺構として報告しておく。埋土はSD11が褐色砂、SE17が淡黒色砂である。出土遺物から12世紀後半~13世紀前半に位置付けられる。

出土遺物 (第76図) 357~365はSD11出土、366・367はSD17出土である。357・358は瓦器碗である。358には内面に横方向の平行ミガキが暗文状に行なわれる。359は白磁皿である。外面下半から露胎となる。360はIV類白磁碗である。361は陶器壺で釉調は外面は明オリブ灰色、内面は鈍い

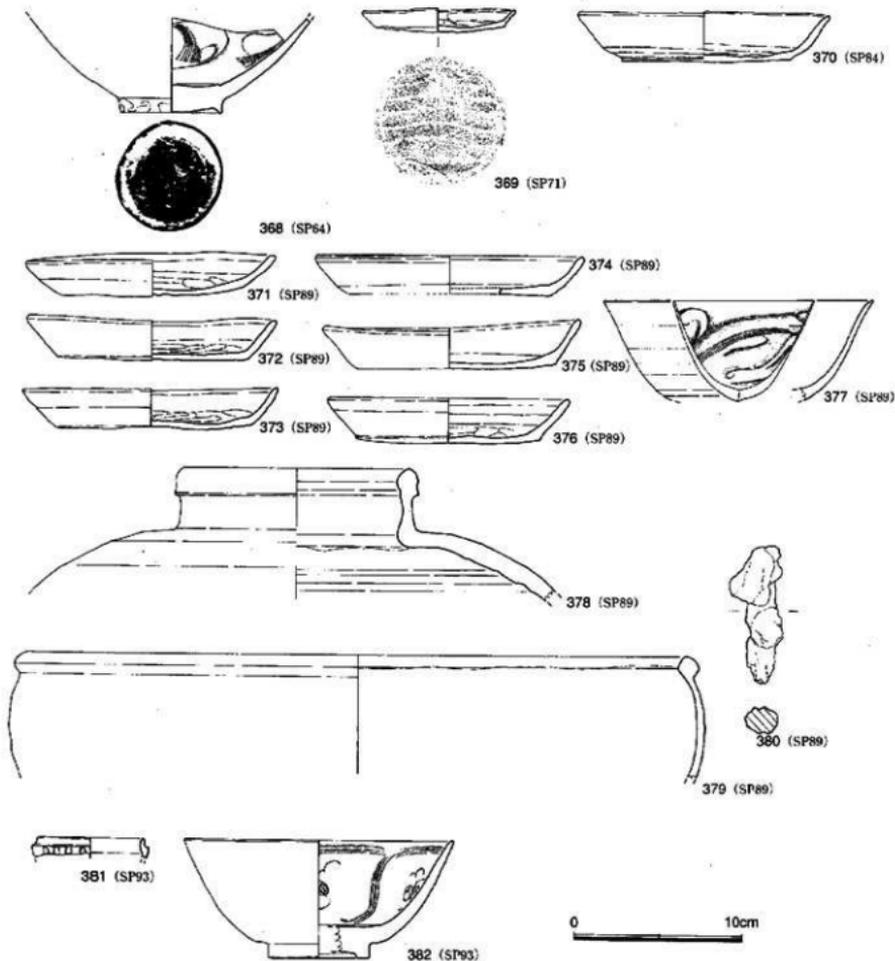


第76图 SD11・17実測図及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

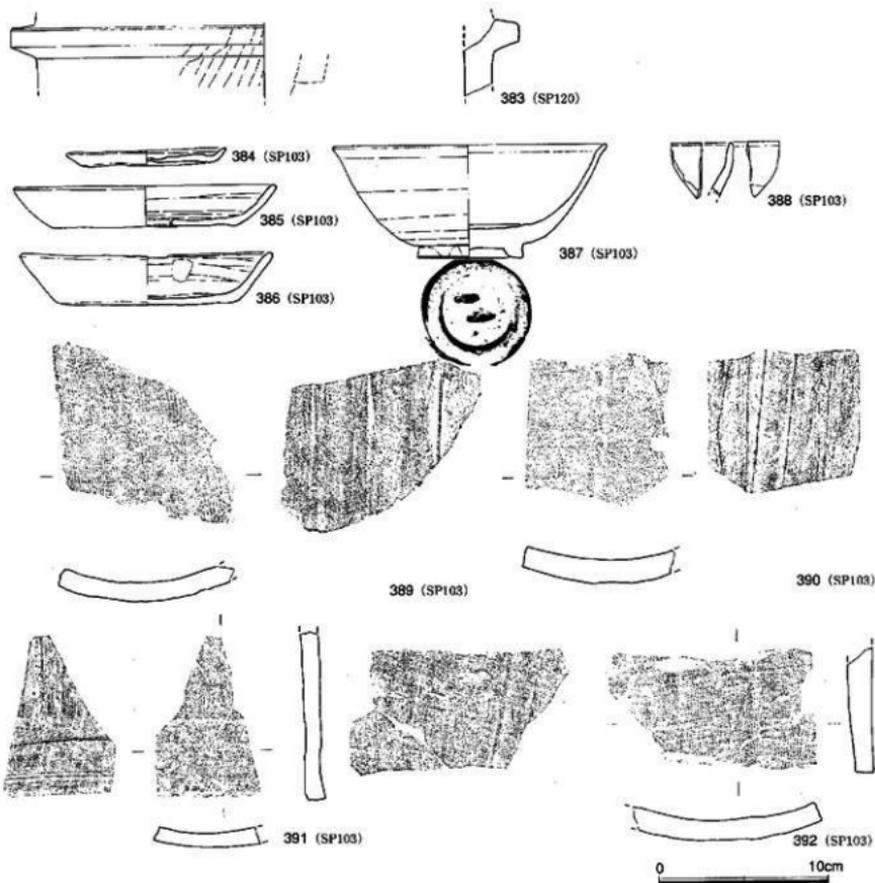
褐色を呈する。肩に横耳がつく。362・363は須恵質の鉢である。362は口縁端部を玉縁上に作る。364は瓦質の鉢である。口縁端部の外面～上面が黒化し他は灰白色を呈する。365は土師質の盤であろうか。内面は横刷毛、外面は横なでを行なう。外面には瘤状の把手を貼り付ける。366は土師器皿である。口径8.8cmを測り、外底は糸切りで板状圧痕を残す。367は長さ7cmを測る鉄釘である。頭部はL字状に屈曲させる。

5) その他の遺物 (第77～79図)

368は白磁碗である。高台は細く低い。釉は高台外面まで施される。判読不能であるが外底に花

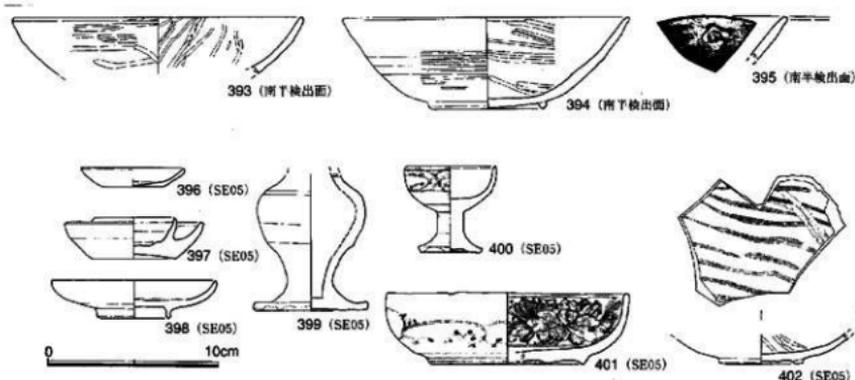


第77図 その他の出土遺物実測図(1) (1/3)



第78図 その他の出土遺物実測図(2)(1/3)

押?が書される。369・370はいずれも完形でピット内から正置された状態で出土した。底部は糸切りで板状圧痕がある。371～380はSP89出土である。このピットからは比較的多くの遺物が出上し、SE10井筒、SK07・12出土遺物と同一の遺物が出土している(79)。371～376は糸切り板状圧痕あり。377は龍泉窯系青磁碗。378は褐釉陶器の壺。379は灰オリーブ色釉を施す陶器の盤で、口縁部上面のみ露胎となりこの部分に目跡が残る。380は鉄釘である。13世紀前半に位置付けられる。381は青白磁の合子である。382は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類。383は滑石製石鏝である。384～392はSP103出土で瓦が出土する。384～386は糸切りで板状圧痕あり。387は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類。



第79図 その他の出土遺物実測図(3)(1/3)

外底面に墨書あり(「二」か)。388は天目碗。389~392は須恵質の平瓦である。凹面には布目が残る。凸面には縦方向の板なを行なうが、391では端部に近いところは板なでの後横なで行なう。また389・390・392の側面は1/3ほど切り離しを行い、以下は割取ったような痕跡が残る。12世紀後半~13世紀前半代か。393~395は南半部分を検出中に掘り下げた時に出土した遺物である。南半部分には遺構面以下20cmほどの包含層が形成されており、ここに含まれるものである。393・394は瓦器碗である。394は内外面に2次的な熱を受け煤が付着している。395は土師器坏で内面に花押状の墨書が残る。396~402は近世の井戸であるSE05出土である。土師器・染付に混入して402の和泉型瓦器碗が出土している。内底面に暗文状の平行ミガキを行なう。

### 3. 結語

今回の調査成果について簡単にまとめておきたい。

出土遺物の傾向としては土師器坏・皿類については基本的に外底面糸切りを行い、輸入陶磁器類では龍泉窯系Ⅰ-Ⅴ類を主体とする時期から口ハゲの青白磁・白磁に代表される13世紀代~14世紀初頭にかかる遺構群が大半を占め、一部12世紀後半代にさかのぼる遺構が少数存在している。この傾向は本調査地点の200m北側に位置し、本調査地点同様砂丘の西側緩斜面上に立地する第11次調査地点と同様の傾向を示している。また14世紀初頭前後に廃絶した集落は現在わずかに名残を残す近世町屋が形成されるまで集落としての機能を有することはなかったようである。箱崎遺跡群内で展開する遺構群の時間的な消長については地点ごとに大きく異なることが指摘されており、砂丘内での時期ごとの遺跡立地を探ることが大きな検討課題となっている。本調査地点のような極めて短期間とも言える集落の存続についても地理的・時事的要因を含め複数の角度から検討する必要がある。

箱崎19次調査では鱒などの微量な動物遺存体は土壌の水洗選別時に採取した。

哺乳類はSE10から偶蹄類の中手骨(左)が出土している。骨の形状からカモシカの骨である可能性が高い。カモシカとしては現生オスの中手骨長が $13.1 \pm 0.37$ cmなのに対し、遠位端関節面をすべて欠きながらも長さ17cmを測り、かなり大柄な個体であったと思われる。魚類はフグ類、マグロ等を確認した。貝類はSE10の井筒からカキ類とフトヘタナリ・フジツボを確認した。カキ殻は被熱白化し細片となる。その他カンザシゴカイ科の棲管が出土しているが、これらフジツボも被熱しており、カキ殻に付着していたものと思われる。これら貝類は通常岩床性の汽水域に生息するが、博多湾に面し多々良川が流れ込む箱崎は生息の条件を満たしており、現地で採集されたものであろう。なお貝類の同定については山崎純男氏の御教示を得た。

参考文献 ANATOMICAL ATLAS OF THE JAPANESE SEROW 杉村誠・鈴木義孝  
アニマ NO.96 (1981年3月号) 平凡社

地区	層位・遺構	時期	大分類	小分類	部位	方位	部分1	遺体長さ	切断	火焼	備考
103(P17)		13世紀前半-13世紀後半	哺乳類	カモシカ?	下脚	左	M1-M2	骨一端	なし	なし	短く少し歪んでいる
103(P17)		13世紀前半-13世紀後半	哺乳類	カモシカ?	踵(上脚?)		踵のふみ	若部	なし	なし	短くなし
SE10	溝の方	13世紀後半	哺乳類	カモシカ?	中手骨	左	遠位端欠	深み	あり	ない	骨質が全長中後部の間に 長文の付着したコウモツ
SE10	井筒	13世紀後半	貝類	カキ類						白熱化	全長約4cmほど
SE10	井筒	13世紀後半	貝類	カキ類						白熱化	全長約4cmほど
SE10	井筒	13世紀後半	貝類	カキ類						白熱化	全長約4cmほど
SE10	井筒	13世紀後半	貝類	カキ類						白熱化	全長約4cmほど
SE10	井筒	13世紀後半	貝類	フトヘタナリ	殻		小片	一部	不明	なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	フジツボ	フジツボ	殻				不明	なし	細部に付着していた。
SE10	井筒	13世紀後半	管巻多毛類	カンザシゴカイ科					不明	なし	細部に付着していた。
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	ワダシ	骨片		骨端のふみ		不明	なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	ワダシ	骨片		骨端のふみ		不明	なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片		骨端のふみ		不明	なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片					なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片					なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片					なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片					なし	なし
SE10	井筒	13世紀後半	魚類	不明	骨片					なし	なし
SK01	伊豆屋	13世紀後半	哺乳類	カモシカ?	踵		踵のふみ	浅部	なし	なし	上腕骨の骨片と

表 出土動物遺存体一覧

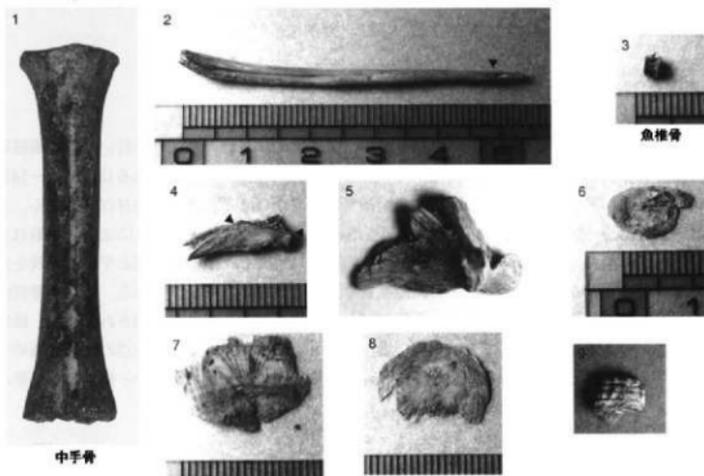


Fig 出土動物遺存体 1カモシカ中手骨 2~8魚類 9フトヘタナリ

# 図 版



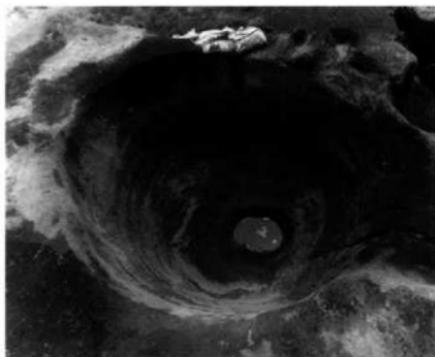
第18次調査作業風景



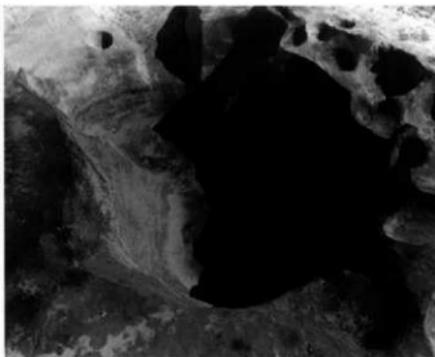
(1) 調査区南側全景 (南から)



(2) 調査区北側全景 (東から)



(1) SE001 (西から)



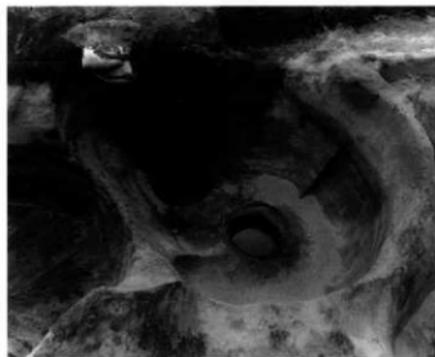
(2) SE005 (北から)



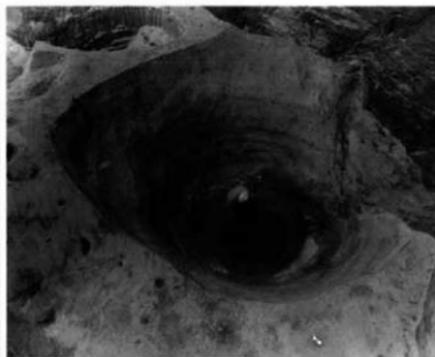
(3) SE006 (東から)



(4) SE009 (北から)



(5) SE010・012 (西から)



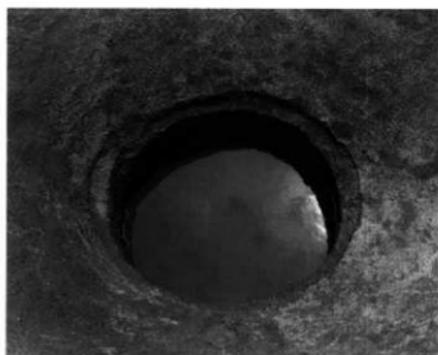
(6) SE011 (北東から)



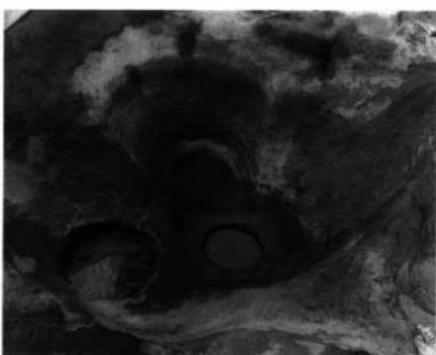
(1) SE013 (北から)



(2) SE015 (北東から)



(3) SE015井筒 (北東から)



(4) SE016 (北から)



(5) SE018 (東から)



(6) SE018井筒 (東から)



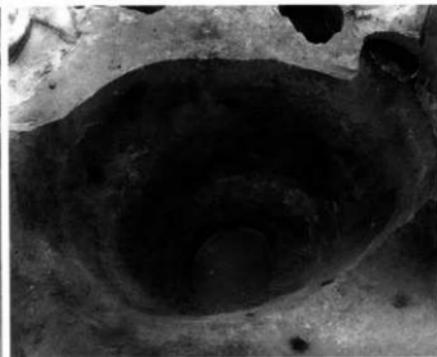
(1) SE019 (東から)



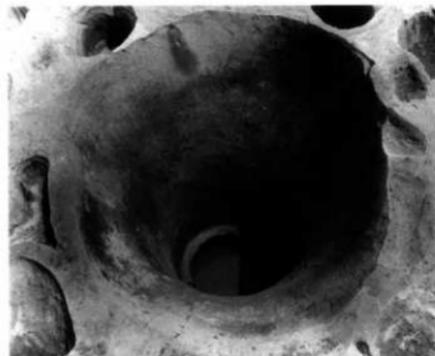
(2) SE024 (東から)



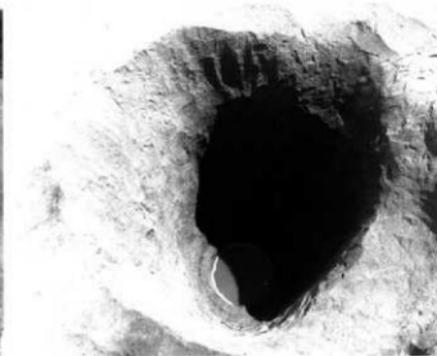
(3) SE026 (南から)



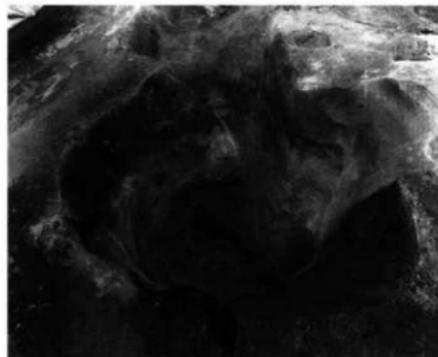
(4) SE041 (東から)



(5) SE044 (東から)



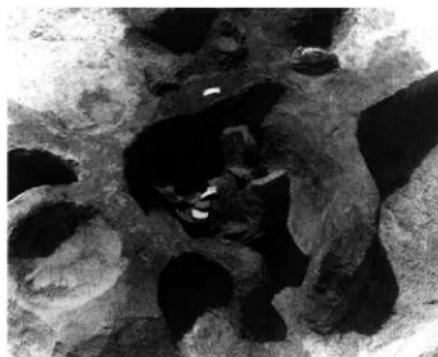
(6) SE270 (北から)



(1) SK002 (北から)



(2) SK014 (北から)



(3) SK022 (北から)



(4) SK023 (北から)



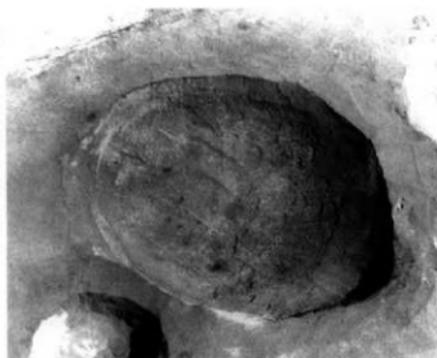
(5) SK027 (北から)



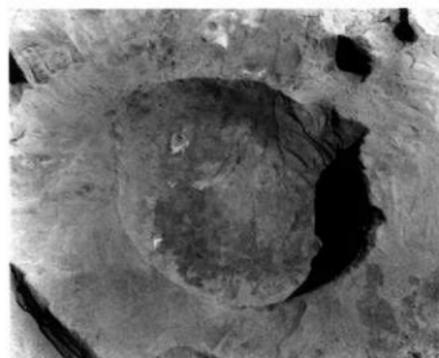
(6) SK028 (北から)



(1) SK031 (西から)



(2) SK032 (北西から)



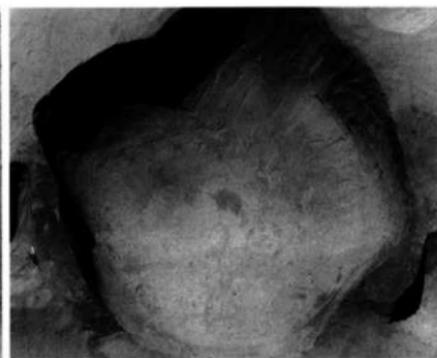
(3) SK033 (西から)



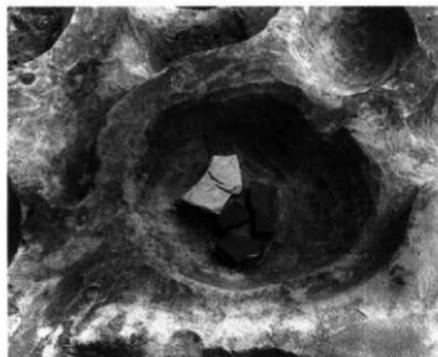
(4) SK034 (西から)



(5) SK036 (西から)



(6) SK037 (北から)



(1) SK042 (西から)



(2) SK043 (南から)



(3) SK045 (北から)



(4) SK046 (北西から)



(5) SK051 (北から)



(6) SK059 (北から)



(1) SD048・049・050 (東から)



(2) SD048・049・050土層 (東から)



(3) SD048・049土層 (東から)



(4) SD052土層 (東から)



(5) 調査区周辺風景 (北から)



(6) 調査区周辺風景 (手前は宮崎宮) (南から)



出土遺物 I





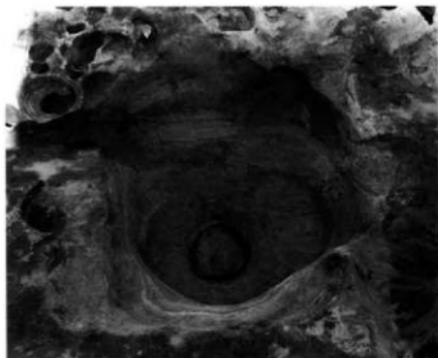
(1) 調査区全景 (南から)



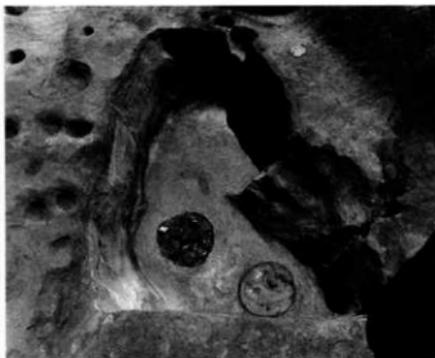
(2) SB18 (南から)



(3) SE04土層



(1) SE10 (東から)



(2) SE14~16, 19 (西から)



(3) SK01炭層上面 (西から)



(4) SK01完掘 (西から)



(5) SK09 (東から)



(6) SK12 (南から)

---

はこ ぎま  
箱 崎 10

—箱崎遺跡第18次・第19次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集

2001（平成13）年3月30日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ソウヤマ印刷  
福岡市博多区中呉服町10-5

---

